THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿三年　第三號

第二百廿八號

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



銀製洋盃及木盃

紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被上度候

- 一金七圓五拾錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十九匁付
- 一金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
- 一金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味九十匁付
- 一金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味五十五匁付
- 一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

- 一金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸盃二ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
- 一金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸同　同目方正味五十五匁付
- 一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸同　同目方正味八十匁付
- 一金參拾壹圓也　同徑四寸丸同　同目方正味百卅匁付
- 一金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸同　同目方正味百八十匁付
- 一金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸同　同目方正味二頁卅匁付

（一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢）
（一文字彫刻　一字　金拾錢）
（一大字彫刻　一字　金七拾錢）

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

商　玉寶堂

東京市下谷區池之端仲町二十九番地
（電話下谷特九六五 一二四四）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

倫理界の曉鐘

木村鷹太郎著

美的道德

美は人自然に之を求む。故に「美」は即「實行」也。美的道德は**倫理の花冠**也、自由と必然と、美と善と、義務と幸福とは、此に調和す。道德法則もと同等の美なく力なしと雖も理想化作用を受けて**高尚、偉大、美麗**なるものとなり禦ぐべからざる**勢力**を有し來る。本書是等の原理法則を明かにして餘蘊なく、所説の眞理に加ふるに文章の美を以つてせるが故に、高尚なる**學理**の書、**家庭**の好讀本、高等程度の**教科書**と爲すべく、近來稀有の好著として敢て之を江湖の紳士諸君に推薦すといふ

序文…第一章緒論—道德の種類…第二章直接なる道德美感…第三章道德と自然美との連結(一)…第四章道德と自然美との連結(二)…第五章道德の人格化…第六章道德の音樂及び天體觀…第七章萬有の道德化…第八章道德美の「モデル」…第九章宇宙美觀の道德…第十章結論—理想道德の性質

菊判美裝全壹冊定價金六拾錢郵稅六錢

發行所東京・大阪大日本圖書株式會社

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新しく生れたる韓國唯一の大雑誌

月刊 朝鮮 雑誌

毎月一回一日發行 **第一巻第壹號** 一冊定價金二十錢郵稅一錢 六冊前金一圓二十錢郵稅共

韓國の事情を委しく知らんと欲する者は必ず本誌を見よ

挿畫 ○伊藤統監、曾禰副統監、韓國現内閣各大臣（コロタイプバン）

○時事評論

○**暴徒問題** 石塚參與官、某將校、岡農商工部次官、松村警保局長、小松書記官、熊谷京城民團長、和田京城居留民議長、秋吉商業會議所會頭、鄭帝國新聞社長

○京城電車問題 松井警保局長、熊谷京城民團長

論説

○裏朝鮮表朝鮮 菊地謙讓

○韓國開發に就て 副統監 曾禰荒助

○韓國教育の現狀 韓國學部次官 俵孫一

○廿世紀初頭に於ける列强 韓國宮内府書記官 井上雅二

○韓國の貨幣 第一銀行京城支店營業部長 木村雄次

○韓國金融機關問題 朝鮮タイムス主筆 山下南海

○大韓協會の本領 帝國新聞社長 鄭雲復

○統監としての伊藤公を論ず 秋尾旭邦

漢城人物評論

○總理大臣李完用の前生涯 菊地謙讓

雜纂

○京城地文考 在京城工學博士 巨智部忠承

○雜誌「朝鮮」の解 咸鏡北道書記官 中井喜太郎

○高麗之花（高麗燒） 鮎貝房之進

○朝鮮大學の沿革 總理大臣秘書官 上村正己

○僧東仁と朝鮮最近開化史 秋尾旭邦

○朝鮮の儒生 片淵琢

○濟州島みやげ 鬼山生

○米人の見たる韓國 落後生

○韓人の家庭 旭邦生

○ミスンタックの末路 城南隱士

○曾禰副統監を訪ふの記 旭邦生

○京城日本人の發展力 京城民團長 熊谷頼太郎

○殖民地の主婦 某女史

○罵倒錄 ヒマラア山人

實業資料

○韓國水產奬勵に就て 農商工部次官 岡喜七郎

○最近三年間に於ける韓國貿易 京城商業會議所書記 山口精

○全南慶北に於ける暴徒の影響 木浦釜山兩商業會議所調査

○韓國森林の大整理 農商工部次官 岡喜七郎

○四十年度韓國貿易の狀況 關稅局調査

○韓國の氣候と實業との關係 統監府觀測所長 和田雄次

○未墾地開拓の許可に就て 某當局者

其他文藝、朝鮮問題と時論重要記事等數十題、趣味と實益無盡藏韓國唯一の大雜誌なり

發行所 韓國京城本町二丁目 振替口座九〇五九番 **日韓書房**

大賣捌所 東京 東京堂、上田屋、同文館 大阪 盛文館、吉岡寶文館

中央公論

春期大附錄號豫告

（附錄小說及び脚本）

我「中央公論」は例によつて四月一日を以て「春期大附錄號」を發行すべし。附錄に寄稿の快諾を得たる大家左の如し。其內容其物が最も雄辯に其價値を語るべきを信じ、玆に吾人の贅言を加へず。

校長の二子（小說）　**小杉天外**

明日（小說）　**德田秋聲**

題未定（小說）　**田山花袋**

題未定（小說）　**正宗白鳥**

ぐうたら女（小說）　**小栗風葉**

生れざりしならば（脚本）　**眞山青果**

尚本文には公論欄及び說苑欄等に第一流の大家に依賴しあれば錦上更に花を添ふるの觀あらん。乞ふ本號の市に出づるの日如何に文壇を驚倒すべきかを見よ。

中央公論第二十三年第三號目次

AN "AL FRESCO TOILET"



By LUKE FILDES, R. A.



第二十三年
第三號
（第二百二十八號）

國家前途の大問題

（一）

非增稅の聲は天下到る處に反響せり、全國商業會議所聯合會率先して之を唱へ、各實業團體多く之に和して、將さに政界を震撼せんとする勢ひあり

然れども彼等果して西園寺內閣の提案したりし增稅を非とする乎、非として斯く熱烈に反對する乎、吾人頗ぶる疑ひなき能はず、否、其の奥に何等か或る物の潛めることを思はざる能はず

想へ、其の金額に於て最も大なる酒造稅の增加額と雖も、一石三圓に過ぎざる也、更らに明白に計算すれば一斗に付三十錢、一升に付三錢、一合に付三厘の增稅のみ、此の稅額は酒造家のみ之を負擔するものに非ず、間稅たる性質として之を消費者に轉稼するに於て、世の飲酒家なるもの果して一合三厘、

一升三錢の値上を如何程苦痛と爲すべきや、飲酒は農夫其の他勞働者に取て幾んど一の必需品の如きも、然かも一合三厘、一升三錢の値上をば左程に苦痛とする謂れあらず、況んや、一の富豪とも目すべき全國商業會議所議員に於てをや、彼等平生自家の利害に鋭敏なるも、一般の農夫其の他の勞働者のために然かく增稅に熱烈なる反對を爲すものには非ざらん

然らば則ち何がために非增稅の叫びを高く且つ大にするや、曰く政費の膨脹に反對する也、最も切實にいへば軍備擴張に反對する也、彼等は斯くして我が政府の財政に根本的整理を行はんとする也

（二）

今や財政に根本的整理を行ふと、殊に軍費問題を解決するとは、少しく識慮ある者の眞面目に考察すべき所たり、而して其の解決の標準が國家前途の大方針に在るべきと論を俟たずとす

日露戰役の後、我が國の地位は一轉進せり、世界の最强大國たる英國とは唯一の同盟國たり、佛國及び露國とも協商して左提右挈以て東洋の主人公たる地歩を占む、況んや韓國をば純然たる保護國と爲せる上、滿洲の一半を手裡に存して、其の地位恰かも明治三十五六年頃の露國に似たるをや、否、韓國を保護國としたるに於て、寧ろ露國以上たり、茲に宣言せる門戶開放主義機會均等主義にして、苟くも一點不實の處あらば、露淸兩國の反感を招くは勿論、獨米諸國の嫉視を受けさらんと欲するも得ず、同盟國たる英人と雖も到底溫顏なる可らざる也

夫れ經濟界に好不況あるは、尙ほ春夏秋冬あるが如し、必らずしも怪むに足らず、又駭くに足らず、世

の永久に春なると能はざるが如く、經濟界また永久不變に順潮なる可らず、常に春の洋々たるに馴れて金風少しく吹き到り、若くば嚴霜氷雪の到るを見て、驚心駭目して直ちに世の滅するが如くに悲觀し、財政上の調節また此の悲觀に伴ふべしと做して、直ちに政費節減軍備縮少を唱ふるは、寧ろ短見者流の事のみ、凡そ今日に於て我が此等の重要問題を決せんとせば、先づ我が國際上に於ける地位如何を觀ざる可らず、此の地位に視て、進むべきか將た退くべきかの大方針を定めざる可らず、根本的に此の要點を決定して然る後始めて財政上の根本的整理と軍備の伸縮とを決定すべきのみ、經濟上一時の變調を視て漫りに悲觀するが如きは、寧ろ國を謬るもの也、少くも國家のために謀つて忠實なるものに非ず

(三)

一切平和無事を主として、絕て外國と事を構へざるを主義とし、外國の勢力來りて衝突せんとすれば、則ち退きて之を避け、只管內を整へて民生の平安を主とせん乎、是れ亦一種の見解也、吾人は假に之を名けて消極主義と曰はん

亞細亞諸國の衰ふるや久し、玆に列國の勢力多く集注し來り、其の集注する間、餘波の竟に來りて我れと衝突するや免かるべからず、此の時に方つて退きて之を避けず、進んで衝突するものを排斥して以て堅く我が地歩を占めんとす、是れ亦一種の見解也、吾人は假に之を名けて積極主義と曰はん、若し或る種の論者をして之を評せしむれば、或は以て主戰派と做さん乎、聊か不穩なりと雖も亦悉く不當にも非ず、帝國主義、又は進取主義とも稱する方却て適切なるべし

吾人の見る所を以てすれば。多年我が廟謨を翼贊したりしものは、多く前者ならずして後者なりき、消極主義者ならずして積極主義者なりき。夫れ列國の勢力東亞に集中し、而して我れ之と衝突するの機會の必らず有るべきことを豫想せしもの、既に幕府時代に於て之れありき、明治政府の創設に及び、此の豫想の著るしく事實に表示せられしは彼の征韓論とす、西郷、副島、板垣の諸老は當時既に積極論の代表者なりき、之に反對したりし岩倉、木戸、大久保の諸老と雖も、全然消極論者なりしには非ず、當時の形勢暫らく消極主義を以て內を整へ、其の整ふを俟つて然る後積極主義を斷行せんとしたりしのみ、明白にいへば、外勢と衝突するを避けて飽まで平和退嬰を事とせんとせしにはあらず、或る準備を整へて然る後大に外に伸んと欲せしのみ

此の以後、廟堂の有司は時に外國の勢力を回避したりしこと頗ぶる著るし、然れども是一種の忍耐のみ彼等は或る準備の成るまで忍耐したりしのみ、故に時會到れりと做すや、猛然として清國と爭へり、露國とも戰へり、思ふに彼等は其の爲すべき準備を爲すに怠らざりき、然かも其の事を擧ぐるや必らずしも必勝の算ありしには非ず、唯だ外勢の壓迫其の極に達し、若し之を避けんか、我れ退きて屈せざるを得ざるに至つて、始めて國運を賭して邁進せるのみ、彼等以爲らく、我れ取て好んて外國の勢力と衝突するに非ず、然かも衝突を避けんとせば、退きて屈するの外あらず、退きて屈すれば、平和にして民生無事なるも國威揚らず、國運伸びず、進んて衝突を避けざらんか、國命或は危殆なること無きを保せず、而して事端滋生政費膨脹して民生苦まん、然るも其奮發努力によりて却つて國威揚り國運伸びん、是れ與

國の氣運を作る也、日本帝國を大ならしむる所以なりと

彼等は國の大方針を斯の如く決定して其の施設を爲せり、政黨と爭ひ議會と鬪ふて常に軍備擴張に鋭意したりしも此の爲めならずや、吾人は今茲に彼等を辯護して而して直ちに軍備擴張を必要なりと斷言するものに非ず、唯だ事實を語り、問題の歸着點を明白にして以て世上君子判斷の資に供せんと欲するのみ

（四）

今日の非軍備擴張論者は、果して消極主義に憑據して然る乎、抑も又征韓論當時に於ける岩倉、木戸大久保諸老の如く、或る時機まて擴張を猶豫せんとするものなる乎、而して今日の現狀に於て斯る猶豫ありとする乎

日露戰役に於て、我が陸軍は其の實頗ぶる痛味を帶べる經驗を嘗めたりき、我が軍隊の連捷して漸く戰線を進むるや、我が路程の多きを加ふると共に露軍は聊かながら其路程を縮少する便宜を得たりき、廿五萬の軍隊と之に供給すべき物資軍需を輸送するに過ぎずと推算せられたる西伯利亞鐵道は、良し少からざる無理を爲せるにせよ、數十萬の軍隊と之に供給すべき物資とを輸送し得たりき、加之連戰連を重ねたる露國は、漸次に歐露の精銳を陣頭に送るに至りたりしに反して、我が續發すべきは豫備、不後備の老兵なりき、然らずんば古劍舊銃を提げ、弊衣陳服を纏へる訓練十二分ならざる壯兵と、老朽に近くして意氣の太だ壯ならざる將校なりき、我が陸軍の智嚢と稱せられ、出征軍の頭腦たりし兒玉大將

が、奉天會戰の後我が霞ヶ關の當局果して眠れりや否やと絕叫したるも亦故なきにあらずとす

此の經驗に由て、我が陸軍は一朝有事の日、壯銳なる百萬の軍隊を大陸に進出せしめ得べき方針を立てたりき、以爲らく、十三個師團を十九個師團と做すも、獨逸及び露西亞佛蘭西の如きは不言の間に之を實行す、仰々しく軍備擴張といふが如きとあらず、何ぞ況んや十六個師團までは戰時より既に成りて、今實際新設せんとするは三個師團に過ぎざるをやと

我れ既に韓國に宗主權を有す。若し我が軍備の竟に東洋に於て露國に及ばざる情形明白とならば、露國假令容易に再び侵略の手を伸ばさゞるも、韓人等は日本の竟に屈すべきを思ふて之を侮らん、之を侮りて露に倚らんと欲せば、韓國は幾んどバルカン半島の如く東洋の伏魔殿たるに至るなきを保せず、是れ豈東洋禍亂の一因にして、而して日本の平和と威信とを失ふ所以なる莫らんや

更らに大に憂慮すべきは清國也、清國の立憲政治が果して其動亂の發端たるや否や、又利權回收論が改革派の利用し煽揚する所となりて、竟に第二の拳匪亂を生ずるや否やは未だ俄かに斷定す可らず、隨つて清國保全を主持すべきか、將た分割の形勢を傍觀すべきか、輕々しく言ふと能はずと雖も、孰れにしても列國外交の舞臺に於て、我が威信を保有せんとせば、必らずや東洋に於て列國に讓らざる武力を有するの必要なきや否や、是れ實に重要なる問題也

或は曰ふ、我れ苟も財力に豊かならば、師團增設易々たるのみ、軍備擴張の如き忽ちにして成らんと、若し三個五個六個の師團を增設して、其の兵營を完成し、軍需を整列するとは、恐らくは二三年にして

能くすべし、然れども有事の日、百萬の精鋭を出すが如き、假令黄金を山積すと雖も、期年にして成る可らず、唯だ知らず今後十五年廿年の間、斷じて斯の如き必要なしと倣す乎、此間我が力他に及ばざるの情形暴露するも、清韓との關係尙ほ今日の如く、隨つて東洋の平和依然として十五年二十年を確保すべきや否や、是れ實に重要なる問題也、何人も此の問題に對して安心すべき解決を下し得ざる以上、軍備を論ずる畢竟空言のみ

（五）

米國が十六隻の戰鬪艦より成る艦隊を東洋に廻航せしめ來る其の眞目的は、必らずしも深く穿鑿する要を認めず、唯だ之に由て彼れが東洋に雄强を輝かし、其の結果頗ぶる勢力の均衡を失はんとするの虞あるを思ふのみ

凡そ現時國際の平和は、多く勢力の均衡に由て保持せらる、所謂勢力なるもの總て武力のみに非ずと雖も、其の主たるものは武力に外ならず、卽ち武力の均衡によりて國際の平和を維持すると稱して可なる也、然るに米國今十六隻の戰鬪艦より成る大艦隊を東洋に派遣し得ることを明示し、然かも菲律賓に據りて高く北方を傲睨せば、其勢力に慴伏するもの第一清國なるべし、彼れは單純に米國に慴伏せず、米國を畏るゝと反比例に日本を侮るべし、古來强に倚り大に事へて苟くも無事を希ふを以て傳統の政策とせる清國が、米國艦隊の廻航に依て其の態度を一變する何ぞ多言を俟たんや

我が保護國たる韓人は、更らに淸人より甚だしきものなり、果して然らば茲に日米勢力の均衡稍々失

はれて、其の影響の我れに不利なると、甚だしきは容易ならざる結果を生ずるの憂あると亦必らずしも論を要せざるべし

故に我れは海軍に於ても、尙ほ少くも米國と均衡を保つことを主眼とせざる可らず、苟くも富あらば、十隻二十隻の戰鬪艦を得る難からずとせん、唯だ智勇ある將校と、猛鋭敏捷なる水兵とは單に黃金を以て得難きことを知らざる可らず

茲に於てか海軍擴張を中止し、若くは斷絕するの利害も亦重要なる問題たらざる可らざる也

* * * * * * * * *

所謂財政の根本的整理なるもの、主として軍備縮少に在りとせば、主義として果して消極なるべきか、積極なるべきか、淸韓の將來を如何すべきか、我が今日の地位を以てして、東洋に於ける國際上の勢力均衡に憂虞なきや否や、先づ此の根本問題より解決せざる可らざる也、吾人は增稅の可否を明かにするものが、區々たる增稅其の物の得失を論ずるよりも、直ちに其の窓戶を撤して以て根本問題を抽出して之を解決せんことを要望す



平民主義と今後の政治

徳富蘇峰

平民主義と云ふことは社會の注意も薄くなり、識者の思想も遠くなり、追々に下火となつて死灰復た燃えざるの有樣である。然し是れは只皮相の現象であつて、其實際を探れば平民主義は相變らず澎湃たる勢を以て社會に横流しつゝある。殊に我帝國に於ては平民主義は日一日より其勢力を伸長しつゝある。されば今後の政界に於て其經綸を行はんと欲するものは平民主義と接觸すべき必要がある。一歩を進めて云へば自ら平民主義の代表者となり、統率者となり、平民社會の心と彼等の活力とを提げて以て國運の發達を計るべきより外に道はないと思ふ。

いふまでもなく我帝國は古來より平民主義の最も行はれたる國である。歷史の上には階級もあり、豪族もあれども詮ずる所は上に一天萬乘の　天皇を戴き、下は萬民皆同胞であると云ふ觀念は殆んど我歷史の初めより今日迄を一貫したる大主腦にして維新の改革も畢竟此目的を達せんが爲めに此方向に向て動いたものに外ならんのである。言ひ換ふれば我國に於ける尊王主義は平民主義の父母である。只皇室を尊び、其尊ぶ結果は皇室以外のものは皆同等であると云ふ感じは國民の一般に行き亘つて居る。固より維新以來華族の爵位などゝ出來、公侯伯子男の新名稱も出來たれども、國民の眼より見れば公侯爵も伯爵もつまり名稱丈けの相違であつて　天皇陛下より見れば等しく　陛下の赤子であると云ふの觀念は誰れしも持て居る。それて我國

の尊王主義は事實に於て國民平等主義を孕産せざるを得ない理由が充分である。

それから第二は教育の普及である。今日我國に於ける國民教育は殆んど百分の九十五以上に行き屆いて居る。此結果は取りも直さず平民主義の奬勵となつて居る。今日に於て平民主義の鼓吹者は自ら覺知すると否とに拘らず文部省である。文部省の役人中には平民主義と云へば毛蟲の樣に蚰蜒(げぢげぢ)の樣に嫌ふ人がないとも限られぬ。然し平民主義の鼓吹者は何處迄も文部省である。

其次は國民兵役の負擔である。軍隊が平民主義と何等の關係があるかと云ふ人あれども、士族の特權を剝ぎ上げたのも徴兵である。總ての國民を平等に取扱ふのも徴兵である。徴兵の前には金持も華族も學者も何も無い。只其實質如何である。余は嘗て事實上日本陸軍のオルガナイザー(編制者)と云ふべき山縣元帥に向て我平民主義の勝利の負ふ所の多大なることを明言した事がある。余は今茲に之を繰返さなければならぬ。山縣元帥が平民主義を了解して居るや否や又平民主義に同情あるや否やは別の問題である。然し元帥が徴兵令を布き國民皆兵の制度を立てたるは大いに平民主義の爲めに氣焰を吐きたるのみならず、長く久しく平民主義を日本國民の裡に涵養する所以である。

第四には實業の發展である。實業の發展は金持を造り、貧富不平等を造り、資本家の階級を造り、勞働者の階級を造るものであるから或點に於ては平民主義に不利益なる事もある。然しながら勞働者をして自己の地位を自覺せしめ、且つ其の自覺心を事實の上に應用せしむるは畢竟實業發展の爲めに刺激せられたる結果と云はねばならぬ。合すれば强を爲すとは今日の勞働者に對する第一の金言である。而して其金言は彼等が追々服膺し追々實行しつゝある事は今日に於ても其例が澤山ある。

右の如く述べ來れば我國に於て平民主義が無言の中に如何に勢力を得つゝあるかは云ふまでもない。最近十年間は我國に於ても帝國主義の最も行はれたる時代

である。處が帝國主義なるものは其根底を國民の上に置かねばならぬものである。國民と云へばクラスでなくしてマスである。階級でなくして衆庶である。二十七八年の役も、三十三年の役も、三十七八年の役も何れも我平民主義の爲めに大いなる勢力の廣告をしたのである。言ひ換ふれは此三役は平民に向て示威運動の機會を與へたのである。それで尊王主義が平民主義の父母であると云ふ事を云ひ得れば帝國主義は平民主義の長兄であると云ふことを云ひ得るのである。インペリアリズムは決してデモクラシーを無視して行はるゝものではない。デモクラシーを無視したインペリアリズムは根のない花である。假令奇麗でも忽ち凋んで了ふ。畢竟國民の志望が外に向て發揮せらるゝのがイムペリアズムである。其國民と云ふ中には一般の人民を含むことは云ふまでもない事である。三十七八年役に最も政治上の有力なる警句は擧國一致と云ふ言葉であつた。此擧國一致と云ふ事が取りも直さずイムペリアリズムはデモクラシーによつて立ち、よつて行はれねばならんと云ふ事を證明したものである。

其處で今日の政黨が無勢力なるのも怪しむに足らんのである。物事の眞相を見ず只看板ばかりで判斷する論者は藩閥と云へば只極めて少數なる執政的階級を代表し、政黨とさへ云へば國民を代表するものゝやうに思ふものもある。けれども若し間違と云ふものがあれは、是れ程間違つたものはない。今日では藩閥など云ふものゝある筈もなく、又あり得る筈もない。文官任用令が明治十八年に實施せられて以來、議會が明治廿三年に開設せられて以來、藩閥などと云ふものは跋扈せんとするも到底出來得る道理がない。固より從來の行掛りで多少の有力家が或地方より出てゝ居るが夫れは或地方の出身であるが爲めに有力家ではなく、有力家なるが爲めに有力家である。扨又、政黨と云ふものも其中には多少民意を代表したものもあり、又代表せんと思ふものもあるであらう。然し此政黨の大體について云へば今では政友會でも進歩黨でも國民の代表者といふよりも寧ろ政黨と云ふ一種の階級を形造つて居

るかの如く思はるゝ。其れは何であるかと云へば彼等は一切萬事只政黨本位で判斷をして行くのである。其處で彼等の爲す所のものは殆んど國民の志望とは何等接觸する所はないやうである。其處で國民全體も政友會が勝つたと云うて喜ぶでもなく。進歩黨が負けたというて悲むでもなく、西園寺内閣が出來たとて勇み立つでもなく、又倒れんとしつゝあるとて悄氣返るでもなく、いはゞ殆んど無頓着である。是れは國民が政黨に冷淡なるからではない。政黨が國民に冷淡なるからである。餘り大ざつぱの申樣であるが今日の政黨が國民を代表するなどゝは寧ろ僭上の沙汰である。

余は平民主義の勝利の例を英國に取て見たく思ふ。今日に於ては英國で一番有力なるものは——少くとも其一は勞働者であらう。自由黨も保守黨も何れも勞働者の意向を迎ふることを勗めて居る。極言すれば迎ふることのみを勗めて居る。近き例を擧ぐれば英國の補缺選擧では所謂ペンジュラム（振子）の移動の如く保守黨が勝つべき理由である。所が自由黨政府の下にある補缺選擧が保守黨の勝利となるよりも却て勞働黨の勝利となることが多いのは一種の奇觀である。是れは現政府が自由主義であるが爲めの反動ではなくして、未だ思ふ樣に自由主義に進まないのを遺憾としてかゝる傾向を生じたのであらう。保守黨の連中には現政府が勞働者養老金法案を提出せんとするのを見て最早や自由黨の政府は社會主義に降參したなどゝ云ふ事を言ひ觸らし、其れを攻擊の標的とせんとするものもあれども、同じ保守黨側でもチエムバレンの一派はかゝる好題目を敵に奪はれては殘念である。社會政策は此方でこそ實行せねばならんとて却て其政綱を奪はれんとするのを口惜しがつて居る模樣が見える。

かゝる例は英國のみには止らん。一言すれば天下の大勢と云つても苦しくない。夫れで政黨内閣など最早や今日では時代後れの事である。殊に政黨が國民を代表しない國に於ては政黨内閣などの話は何等の興趣もない。今後の目的は如何にして此平民主義の大勢に乘つて行くかである。必ずしも此大勢に盲從せねばなら

んとは限らない。必ずしもデマゴッグ（煽民政治家）とならねばならんとは限らない、所謂ペリクリスが亞典を治めた如く治むる人があればそれに増した事がない。政治家の仕事は即ち是れである。詳かに云へば内に於ては社會政策を布き、外に向ては帝國主義を施し、一般人民を提げて起つのである。かゝる政治家は何處にあるか、舞臺があれば人があり、人があれば舞臺もある。吾人は決して失望してはならぬ。為すべき前途には幾多の光明が棚曳いて居る。（完）

高天原人種レーク・ドウェラース論

青柳有美

人類學者が、特に稱して之にレーク・ドウェラースの名を與え、土窟生活を營めるものより區別するものあり。即ち、或る一種の構造装置によりて、家屋を湖上或は岸を去ること遠からざる海上に建築し、之に棲息する種族にして、千八百八十一年を以て病歿せる瑞西の學者フェルヂナンド・ケルレル主として之を研究せしが、此の種の家屋生活を營める人種は、古くは石器時代に當り、瑞西の所々に散在せる湖水を始めとし、歐洲大陸の各所に棲息したるものゝ如く、又今日に至るも、南米ヴェネヅラ國マラカイボ灣内、及、太平洋洲のうちなるボルネオ島セレベス島カロリン島等には、尚ほ存在するものありと聞く。

日本の新優等人種たる高天原人種が、果して何れの土地より瑞穗國に移住し來れるやは、今俄に斷じ難きものありと雖ども、そのレーク・ドウェラースにして湖上或は岸を去る遠からざる海上に家屋を建築し、に棲息したる人種たりしは（予の推論に據れば）必しも、察するに難からず。

第一證　中山一位局或は一條松壽院の如き雲井に近かき貴顯の薨去あるや、其御遺骸を、普通の柩に納むるに先ち、まづ『お船入』と稱して船形の箱に入れ、後初

めて之を納棺するを例とするが如し。言ふまでも無く、冠婚葬祭の儀式は、總て古代の風俗習慣を傳ふるものにして、殊に其雲井に近かく行はるゝものに於て然るを觀る。されば、此の『お船入』の儀式の如きも、全く高天原に於ける葬儀の遺風の、今なほ傳りて雲井に近かきほとりに遺れるものなりといふを得べし。然り而して、此の『お船入』の式なるものは（予を以て觀れば）高天原人種が、日本移住以前に當りては、常に湖上或は海上の家屋に棲息せるレーク・ドウェラースにして、一朝若し家族に死者あるも、其屍體を埋葬或は火葬するの便利なく、爲に止むなく之を船に遷し以て水葬するを例とせる慣習の、同人種の日本に移住し、陸上生活を營むに至り、時代の經過すると共に變形し、遂に儀式となりて今日に遺れるものなり。然らずんば、何を苦んでか、納棺に先ち、貴顯の御遺骸を、特に船形せる箱に納むるの要あらんや。

第二證　邦語にて、河川の通行を便にするが爲め架設せらるゝ橋梁は、一般に之を稱して「ハシ」といふ。即ち、水の上に渡して往來に便するもの、是れ『ハシ』なり。然るに、神明造の如き高天原人種の建築法を傳へたる造營物の戸口に通し、依りて以て昇降に便り、出入の用に供せらるゝ階段も、是又、邦語にて同く『ハシ』と稱せられ、客の戸口に近かく坐を占むるを觀るや、『其處はハシ近か、イザ先づ是へ』と、其客を内に誘ふ熟語さへある程なり。此くして水上に架せらるゝ橋梁も、家屋の出入口に通する階段も、共に「ハシ」と稱ばるゝは、（予を以て觀れば）是れ全く高天原人種が、その昔レーク・ドウェラースにして、湖上或は海上に家屋を建築して棲息し、陸上との交通は、總て其間に架せられたる橋梁によりて行ひ、之を戸口に通し出入に便したるに因せる者にして、同人種の日本に移住するや、陸上生活を營むに至り、戸口に橋梁を架するの要なく、代ふるに階段を以てするに及びしも、尚ほ從來襲踏の慣習より全然脱するに忍びず、その同く出入口に通するものなるが故に、之に「ハシ」の稱呼を與え、又橋梁は水の上に架せらるゝものなるが故に、岡

く之を「ハシ」と稱びしものなるが如し。

第三證　神明造の如き高天原建築の遺風を傳ふる造營物を觀るに、皆な椽束の柱長くして、地面と床との距離比較的に遠く、床下は總て通り拔け自在の構造となすを法とするもの丶如し。是又（予を以て案ずれば）高天原人種の祖先が、レーク・ドウェラースにして、水上に家屋を建築せしが故に、自ら其柱を長くして水中に打ち込み、且つ浸水を防がんとして高く床を上げ、尙ほ水の流通に便ならしむる爲め、床下を通拔自在と爲す必要起り、之を習慣と爲し來れるより、同人種日本移住後も、依然この建築法を襲套し、遂に傳へられて今日に至れるものなり。殊に況んや、南米ヴェネヅラ國マラカイボ灣及南洋ニウ・ギニー島ドレー灣に於ける現在のレーク・ドウェラースは、日本人の如く疊様のものを其の床上に敷き、又瑞西に於ける此の種族の遺跡によれば、其壁の塗方は、日本と毫も異るところ無く、又何れのレーク・ドウェラースも、其家屋の屋根を神明造の如く茅葺屋根にし、南洋ボルネオ島レーク・ドウェラースの家根には、千木、葛緒木に類似する構造あるに於てをや。されば、唯一神明造と雖ども、是れ全く土蜘蛛等が穴居の入口に建てあげたる小屋の進化せるものに非ずして、全然其系統を別にし、高天原人種は、初より椽束の長き家屋に住居せしもの丶如し。

第四證　東京には、今や殆んど其跡を觀ること稀なるに至れりと雖ども、地方の僻邑に至れば、今と雖ども尙ほ家屋の周圍に下水を通する溝渠、或は小川の流る丶ありて、家に入らんとするや、必ず之に架せる小なる橋を渡らざるべからざるを例とす。是又（予を以て觀れば）高天原人種が素レーク・ドウェラースにして、湖上或は海上に棲息し、四圍悉く水を以て取り捲かる丶に慣れしより、同人種の日本に移住し陸上に生活するに至りし後と雖ども、從來の慣習より脫するに忍びず、恰も彼のメヂアより入りてバビロンの王妃となりし好女が、故鄉の風色忘れ難く、空中庭園の建設を國王に迫まりし時の如く、小仕掛ながらも、住居の周圍に水を通して、高天原を忍び、以て自ら慰め樂まんと

じ、此く溝渠或は小川を家屋の周圍に流れしめ、遂に傳へ傳へて今日に至れるもの丶如し。而も、此くの如き習慣は、歐米人種間に其例を觀ざるところなり。

此くして、予は、高天原人種の、其昔、レーク・ドウエラースにして、水上に棲息せる種族たりしを論結せんと欲するものなれども、その果して岸を去る遠からざる海上に棲息せしや、將た湖に棲息せしやを斷定する能はざるものなり。況んや、更に進んで其何れの地より日本に移住せるものなるやを知ることをや。されど、その歐西の中央なる瑞西、或は蘇蘭、或は以太利、或はボスフオラス海峽附近よりせるものに非るや明なり。然らば、南米よりか、將た太洋洲よりか。

ナポレヲニズム及びメッケリズム

文學博士　建部遯吾

ナポレヲニズム及びメッケリズムは、余が近來造れる語なるが、余は世人が是れより多く此の語を用ゆるに到る可きを信す。

ナポレヲニズムとはナポレヲン主義なり。メッケリズムとはメッケル主義なり。ナポレヲンと、メッケルと、是れ既に提灯に釣鐘の感を與ふべし。然れどもナポレヲンは一時歐洲全土を席捲したれど、ウオタローの一敗を以て、一世の功業地に塗れたるの敗者なり。メッケルは官僅に佐官を以て、我陸軍の御雇ひ教師として來れる微々たる一士官に過ぎざるも、晩年渠が教訓の效果なりとやらにて、我帝國陸軍は露西亞帝國の强大なる陸軍を漸次に碎破し、渠は我が常勝軍の恩師たる名譽を擔ふて、世の贊嘆の裡に靖らかに昇天したるなり。然らば此の二者を對比し來る、何ぞ必しも提灯と釣鐘との不釣合を以て目すべきものならんや。

傳ふる處に據れば、ナポレヲンの兵を遣るや、常に主力を一點に凝集し、敵陣の防備最も薄弱なる點に乘じ、必ず其の一角を碎破し、以て勝を奏するを常とせりと。昔はマセドニアのフキリップ此の種の陣法を揶

めたるが、ナポレヲンに到り其の活用の妙を極め、常に軍隊を以て、一の活きたる有機體と成し、奇變百出、巧に敵の弱所を衝くを以て、用兵の秘訣としたる也。苟くも烱眼の將、乘す可きの機を窺はんか、如何なる強大なる軍隊と雖も、必ず若干の弱所を有すべきが故に、如何なる大軍と雖も、如何にかして必ず我が寡兵の敵手たる能はざること無きなり。則ちナポレヲンの用兵に在りては、彼我の兵數の衆寡は、戰鬪の機會の有無を決す可きの要諦にあらず。又事實上敵に弱所有りや否やも、必しもその要諦にはあらずして、唯だ我の如何にかして敵の弱點を捕捉し得るや否やが、戰鬪の機會を決せしむる總ての標準たるなり。余は敢てかゝる主義に下すに、ナポレヲンズムの名を以てせんと欲す。

　メッケリズムは、其趣向全くこれに反せり。メッケルの用兵法は、我が機動演習此れを表はして餘蘊なしと云ふ。則ち豫め先づ總體に於て彼我の兵數を比較し其の布置、結構、組織等を詳にし、而て正々の陣堂々の軍を以て、彼我相對すれば、戰はざるも優劣の數自ら其の間に歴然たるもの有りと做す。結構布置、即ち作戰計劃に於て、軍隊の訓練に於て、武器の精鋭に於て、彼我同等なりとせば、寡は衆の敵にあらずと做す。衆寡は即ち優劣の判斷者にして、勝敗のアンパイアーたるなり。我が機動演習は常に斯くの如きプリンシプルに憑りて行はるゝものなるが、メッケリズムの實戰も亦實に斯くの如くにして行はるゝなり。故に苟くも軍隊の訓練武器の鋭鈍等にして、大いに敵に過ぎたるもの有らざる限り、軍隊の大小兵數の比較に於て、我の彼に及ばざる時は、メッケリズムは斷じて輕々しく戰を挑むことを許さざるなり。之れ、ナポレヲニズムとメッケリズムとの大なる差違を存する所以にして、又各々長短得失ある所以なりとす。

　想ふにメッケリズムは戰はざるの場合多かるべく、ナポレヲニズムは如何なる場合に於ても、戰鬪の機會を發見し得て、一擧に奇勝を博せんとするものなれば、ナポレヲニズムのメッケリズムに比して危險多く、メッ

ケリズムのナポレヲニズムに對して、萬全なるは言ふを待たず。然れども戰はずして勝敗の數を察し、而も猶陸軍備の撤廢を見るに到らざるには、社會經營上、極めて不經濟の事と云はざるべからず。蓋し國家の兵を養ふや、一は以て一の用を爲し、二は以て二の用を爲し、而して五、而して十、遂て百千萬に到る可しとせんか、是れ夫れ〴〵の規模に隨て、夫れ〴〵の實用を成すものにして、必ずしも特に不經濟を以て指斥べきにあらず。ナポレヲニズムは斯かる效用を軍隊より獲得すべし。然るにメッケリズムは我十兵を養ふも、若し敵にして十一兵を養はんか、我が十兵は全然無用に歸し、我百兵を養ふも、敵百一兵を養はんか、我が百兵は全然無用の長物たるに過ぎずして、寧ろ始より兵を養はざるの勝れるに如かざるの觀を呈すべし。此の點に於てメッケリズムのナポレヲニズムに劣れるや、極めて明白なりとす。

日露戰役の當時、メッケル將軍の薫陶を受けたる我陸軍の將士が、常に兢々として萬全の策を講じつゝありしに、鳥尾得庵將軍は、余を以て之を名狀せんか、宜く名づけてナポレヲニズムと呼ふべき所の戰略を我陸軍に要求せり。余は戰爭に關する智識と經驗とを有せず、從て今日我陸軍の採りつゝある用兵法と、得庵將軍の其れとが、果して孰れを勝れりとし、孰れを劣れりとすべきかを審にせずと雖も、而も國家として、國民として、巨額の經費を投じて、不生產的なる軍隊を支持しつゝある以上、若し一は一、二は二の效用を擧げ得べきナポレヲニズムにして實行せらるべしとせば、その實行を希ふは、恐らく何人と雖も異議あるまじき處なるべしと信ず。

然れども余は敢て一知半解なる用兵論を以て、世上の識者を煩はさんとするものにあらず。余が此處にナポレヲニズムとメッケリズムとを擧げたるは、判然たる此の二派の傾向を、近時我が教育社會に認むるが爲なり。想ふに我國現時の敎育に於て、最も廣く行はれつゝあるものは、メッケリズムなり。何をか敎育上のメッケリズムと言ふ、實戰と機動演習とは其の理宜し

く同じかるべくして、而も其の實は同じからず、今若し教育にして實戰に堪ふるの士女を養成するを目的とせず、專ら機動演習に堪ふるの士女を養成せんか、是れ豈に育英上のメッケリズムにあらずや。師範教育にして、若し實戰に怯に、機動演習に勇なる教師を養成するあらんか、是れ豈にメッケリズムの亞流にあらずや。又若し專門學術教育にして、徒らに疊の上の水練には巧なるも、實地の活用に拙なる人士を造出せんか、是れ實にメッケリズムの最も腐敗したるものにあらずして何ぞや。

　余は現今工藝的女學校に於て、裁縫教授の實例を知る。僅々の時間に於て、各種の和服裁縫は云ふに及ばず、或る種の洋服裁縫までをも此處には教ふるなり。教ふるとは、其の雛型を造らしむるを云ふなり。今日中等の實踐女學校、又は女子工藝學校等に於ては、其裁縫課に於いて蚊帳の雛型、袴羽織の雛型等、各種の雛型を造るを以て、進級の標準としつゝあるか、斯る雛型教育を受けたる女子の多くは、一旦實物の裁縫に臨むや、殆んど望洋の嘆に暮るゝなり。偶々實物の裁縫に於て、堪能なるものありとせんも、そは新衣の裁縫に堪能なるにて、舊衣を修繕し種々の斷片を綴り集めて、最も家政的に經濟的に處理し鹽梅するの活才活能を具へたるものに到りては、滔々たる學校出の女子には、殆んど之を期待し能はざるに似たり。雛型の無用なるは云ふに及ばず、新衣の裁縫の如きは、寧ろ之を專門職人に一任するも可。眞に家政的、實用的とも云ふべきは無論舊衣の補綴更新に存す。而も實狀斯くの如しとすれば、今日我國の教育が徒らに演習的にして、眞の活用眞の實戰には極めて疎きは之を一實例に供して差支なかるべし。余は只だ女學校に就て、家庭に就て、現今教育の弊の一を見たるのみ。更らに眼を轉じて他の方面を觀んか、今日の倫理教育、然り。今日の語學教育然り。今日の體育、然り。比々總てこれ雛型教育の亞流たらざるもの罕なりと謂はざるべからず。

　人倫道德の要旨を教ふるや、尋常小學より高等專門

教育の終に到るまで約二十年。人々忠孝の何物たるかは熟知するも、活社會に處し、紛糾錯雜の事艱に當りて、泰然惑ふ無きの人士たり得るもの果して克く幾何ぞ。近時我國の教育は駸々として進歩する處あれども、其の倫理教育に到りては、未だ樣によりて葫蘆を畫くの譏を脱し得ざるは遺憾と云ふべし。

語學の實用に堪えざる批難は、世人之を聽くこと久し。而も文法の暗誦と、ミルトン、セキスピアの講讀とに到ては、今日の學生必ずしも昔日の學生に劣れるにあらず。運動界の勇士たるに於ては、今日の體育は驚くべき奏功を見たるも、堅忍不拔の精氣に富み、克く難事業に堪え得るの氣力を有するもの、極めて罕なるのみならず、簡易なる學年試驗に際しても、神經衰弱の理由を以て受驗の猶豫を乞ふもの年々增加し、眞面目なる受驗者の數が、ベースボール、竿飛び、高飛び、幅飛びのレコードの增進と、反比例を爲しつゝあるは奇と云ふべし。

斯くの如きは今日我國の教育が、徒らに機動演習的にして、實戰實用に遠きの例證とす。余は敢て我陸軍の恩人たるメッケル將軍を傷けんと欲する者あらずと雖も、只だ姑らく其の盛名を借り來りて、世人の雲煙過眼に附しつゝある世事の缺陷を諷せんと擬するのみ。

若しナポレヲニズムをして此の間に行はれしめんか、如何なる面目の一新をか呈すべき。ナポレヲニズムは一を養て一を用ゐ、二を投じて二を回收するの戰法なり、形式よりも寧ろ實地活用を重んじ、巧に敵の弱點を捕捉して、苟くも一戰の勝利を博せざれば歇まざるの陣法なり。人の世に處するや、境遇は即ち敵なり、事情は即ち敵なり。如何なる境遇に陷り、如何なる事情に處するも、必ず一分の勝利を博し得るの人士を造り得れば、教育の効果や足る。余が教育上に於けるナポレヲニズムとは、斯くの如き人を出すの謂なり。尋常小學の卒業生をして、尋常小學卒業生たるの甲斐あらしめ、高等小學の卒業生をして、高等小學卒業生たるの甲斐あらしめ、中等の卒業生、專門學校大學の

卒業生をして、皆それ〳〵其の卒業生たるの甲斐あらしめ、學びたる裁縫は家庭に行ふべく、修練せる體育は事變に處する剛健の體軀を鍛へ成すべく、語學は以て實用に資するに足り、道德は以て實社界の名利の街に惑はざるに足らば、ナポレヲニズムの教育は乃ち成功したるなり。人或は今日の教育主義を目して、反譯主義と爲すものあり。反譯主義必しも不可なるにあらず。只だ實戰と演習との本末區別を誤るは、之れ我が教育上に於ける不健全なる徵候と謂はざるべからず。ナポレヲニズムとメッケリズムとを對比し來りて、余は今此の點に關して多言するを要せずと信ず。要は只だ此の主意に準りて所謂反譯それ自身の適不適を定むべきのみ。

政治經濟等の方面に於けるナポレヲニズムとメッケリズムの流行、及び其の長短御得失を說くは、請ふ之を他日に讓らん。

ナポレヲニズムは失敗者の主義なり。メッケリズムは成功者の主義なり。漫に失敗者を謳歌して、成功者を疎外する、可ならんや。然れども後世國民をして徒らに小成に晏ぜしむる者は、或はメッケリズム祝福の徒輩より出でん。

余は日本の所謂戰勝を、一メッケル將軍の光榮に歸するに同意し、日本國民の成功と誇稱するに反對す。

（右は建部博士の高話を筆記し校閲を經たるものなり）

對清教育政策の今昔

樋口龍峽

現世界に於ける最も辣腕なる政治家の一人として許されたる米の大統領ローズヱルトは、その教書に於て清國人の教育が米人の天職なりと公言したり。同じく最も活動的なる君主として、辛辣の手腕を許されたる獨帝ヰルヘルム、亦清國にその國語と勢力とを扶植せんが爲に、大學の設立を企劃せり。洋の東西を異にし、人種と歷史を殊にし、文明の源流に於ても風馬牛なる

此二大强國すら、清國の將來を洞察し、こゝに其勢力を植ゑんとせば、先づ教育上に其根柢を固むるの得策たるを知り、鋭意力を此に致さんとするなり。否啻に這般二强國の政府のみならず、その國民も、はた英國も、佛國も苟くも識見の高達にして當來の時勢を洞察するの明あるものは、亦悉く此問題に留神努力しつゝあるなり、さるを僅かに一葦の水を隔つる隣邦として、文明の源流を同うし、人種を同うし、文字に於て近く史に於て古より交渉の密なりし我が日本の、對清教育政策は今何の狀ぞ。之を惟ふことに吾人は轉た惆悵の念に堪へざるなり。

我が日本が清國の留學生を招致して、その教育を始めたるは、今の小村伯が北京に公使たりし當時にして、爾來殆んど十有三星霜、その最も盛なりし卅八年の交に在ては、遊歷者を算すれば萬を越え、眞の學生のみを以つてしても八千に出入し、邦人の清國に教習たるもの千に垂とせり。然るに僅かに三春秋を閱せし今日に於ては、留學生の數は當時の半にだも達せず、我教習の解傭せらるゝもの踵を接し、獨米への留學者の增加に反比例して、清國に對する我が教育上の威權勢力は日に月に衰退しつゝあり。是れ抑も何に由りて然るか。固より幾多の紛糾せる事情と誤解と障碍とのあるありと雖、その根本を尋ぬれば、我が外交及び文教の當事者が、清國政府を知りて清國民を解せざるに起因せる對清教育政策の失計にありとす。

我が小村氏が燕京に星使たりし時に於て、氏及び當時の政府が、清國の開發並に我が勢力の扶植の爲に、その青年を教育し、及び我が國語を清國に普及せしむるとの、永遠にして且つ適切の政策たるを、果して能く領會したりしか否かは些か疑問なれども、而かも事實上學生を招致し得たる功勢は多とす可し。然るに留學熱頓かに勃興して幾千の多數に達するに及びて、我が明治初年の風潮の如く、始めて聞き覺えたる自由民權說の速領半解の結果として、或は民族主義を云ひ、革命說を口にし、危矯過激の議論を爲すものあり。清國政府の恐惶杞憂を惹起し、百方その防壓手段に苦心

せしめしと同時に、我が當路の有司亦清政府の感情を害せんことを恐れ、その謬りたる結論留學制限說に同情し、内田公使と張安保との協商となり、更に具體的に卅八年の文部省令第十九號と爲り、こゝに對淸敎育政策は根本より一變するに至れりき。

清國の留學生中、革命主義を標榜せしもの少からざりしは事實なり。されどその謂ふ所革命なるものは、果して嚴密なる意義にての革命なりや、はた竟に政治的改革の義に過ぎざるか。是れ多少清國民の性情を解し、その政治上の知識を解し、留學界の風潮を解するものゝ、容易に領會するを得べき所なり。彼等の謂ふ所革命は必しも國體の變革にあらず、清朝の顚覆にあらず、孫逸仙一派の如く過激なるもの無きにあらざれど、そは極めて少數の徒に過ぎず。その發芽は我が留學界にあらずして、源流は獨逸にあり、佛國にあり、さるを我が留學界に制限して、却て本家本元の佛米獨に學生を送らんとす。是れ謬見の一なり。此極端なる一派の外は、自ら革命を口にすと雖、畢竟施政改善の要求のみ、若くは清政府自ら企劃せし立憲政體の要求の聲のみ。しかも革命を叫ぶは、清國一流の修辭的誇張にして、兵十萬百萬と號する筆法に過ぎず。然るに其空名を聞いて恐るゝこと蛇蝎の如きは、革命の語義にすら通ずるもの少き、清國の官邊には尤もながら、我が當路の諸士またその杞憂に同ずるに至ては寧ろ嗤ふにたへたり。是れ謬見の二なり。また學生の革命を口にするもの、大官の夤緣なきものが、贓官の脅嚇的手段と爲すもの少からず。見よ曩日の革命派の頭株にして、今日政府の忠僕たるもの多きことを。累をその人に及ぼすを恐るゝが爲に、その名を列擧するを憚れども、吾人はその確證を有す。眞僞を甄別せずして一律に此徒に恐怖す。これ謬見の三なり。

更に幾百歩を讓りて、假りに萬々一我が留學界に眞の革命派多しとすとも、我が敎育界に於て、何人か清國學生に革命主義を吩咐し敎育するものあらんや。我が歷史に革命の史實なく、我が思想界に政治的革命の叫なし。僅かに社會主義の聲あれども、之れを歐米の

夫にくらぶれば譬へば太陽の前の燭火の如く、殆んど留目に値せず。若し政治的改革を以て革命と見ば、是れ四百州の到る所に澎湃たる氣運が留學生の口を藉りて現はれたるに過ぎず。淵源は清國自身にありて、我が學海にあらず。若し眞の革命ありとせば、殷鑑は歐米の近世史に存して、我に存せず。然るに底事ぞ、革命の擧を我が留學界に生れしものと爲し、清政府唱へて我また怪まず、沒分曉も亦甚しからずや。是れ謬見の四なり。

聞くならく、某氏はさる公會席上に於て、親しく林外相の口より聞きし所なりとて、外相が清國人の教育が幾ばくの利益ありやを疑へるを傳へぬと、聰明我が外相にしてかゝる見を持すべしとは信ぜざれど、一部の人口はかゝる意見を抱く者なきに非ざるが如し。寸前當眼の利益は姑らく措き、國語が社會的結合の力として、如何に多大の効果あるかは、學理上認められたる所にして、今さら說くを須ゐざるべし。更らに史實の教訓に徵せよ。殖民地と本國との親和力が同一國語の力に待つ所多きは明白なる事實に非らずや。埃及に英語の勢力が普及するに伴れて、その保護權の根ざしも益固きに非ずや。英語の世界に普及せる度と共に、英の商權の範圍は愈廣きに非ずや。或日英同盟の基礎も英語を介して結ばれたる、兩國民の相互の了解親善に根柢を有するに非ずや。這般の事實は、その同盟の當事者たり又英國通たる林伯の既に能く知らるべき所なり。然るになほ且つかゝる見解を持するとせば、これ謬見の五なり。

或は說を爲すものあり、曰く、清國學生が眞に革命を唱ふるや否やは疑問なりとすとも、清國政府が之を忌むこと甚しきが故に、其感情を害してまでも、强て留學生を招致するは、他の交涉繁爭の案件に於て、却て多大の損失を招くべしと。されど是は清國政府の威權がその國民の上に幾何の勢力ありやを解せざる言のみ。見ずや、卅八年の省令一度出てゝ後、之に憤慨せる學生は去て郷曲に歸り、到る所に排日熱を惹起せしめたることを。また一步を讓つて考ふるに、此問題に

て清政府の誤解に媚びて後來の勢力たるべき青年俊良の感情を傷ひたる後、果して他の懸案の折衝に奈何の好果を得たりとするか。歴然たる事實上の證據は、之を否定せるに非ずや。是れ謬見の六なり。

如上六條の謬見以外、殆んど辯ずるを要せざる幾多の謬見のありしあり。その結果として我對清教育策は退嬰主義となり、偸安主義となり、留學生招致の發頭人たりし日本は、文部省令の出づるに及んで、事實上留學生の拒絶策を取りしに等しく、他の強國をして此を機として永遠の勢力扶植の根柢を作らしむるに至れり。

我が外交當事者が清國政府の委託により、文部省をして彼の省令を出さしめし理由は、上陳の革命派斷滅策にありしなり。然れども文部省が省令を發布せし精神は、文部の當局が自ら語る所に依れば、此にあらずして、その目的は別に存す。曰く、これ清國の爲めに謀り、また我が教育界の名譽の爲に、能く教育の効果を收めしむるを目的とせしもの、革命派斷滅策云々の如きは與り知らずと。その言や寔によし。されど事實は却て豫想に反せりき。

我が文部當局の自ら聲明せる所に依れば、彼の十八號省令は文部省が清國留學生を收容する日本の學校を督勵して、十分に教育的効果を擧げしむるにあり。當時留學熱旺盛の極に際し、不完全なる一時的間に合せの小學堂の勃興頻りにして、其間殆んど教育の何たるをも解せず、唯だ營利一面の目的の爲に名を留學生教育に藉るもの少からず。下宿樓上の學堂あり。三十五金に三學年實修の畢業證を賣却する學校あり。亂脈實に極まれり。我が文教の當局が此際その監督を嚴にして、教育の振興を謀ると共に、清國負託の意に副はしめんと企てしは、是れ當然の所置にして、而かも寔に適切の事なりき。然りその精神は寔に可なり。されどその方法に至ては全く失敗なりき。試みにその省令の内容を一考せよ。これ殆んど清國の學生氣質を解せず、否清國の現狀とその民心を解せざる方法なりしなり。清國人に對しては到底行はるべくもあらぬ條項多く、

該省令が到底死文徒法に終るべきは、始めよりその命運たりしなり。その終果として買ひ得たる所は、將來の清國の中堅たるべき有爲なる青年の反抗怨嗟と、對清教育の衰退と墮落とに過ぎざりしなり。

今さら繰返して云ふを俟たざる所なれど、該省令の失敗に終れる第一因は、清國公館の紹介書なき學生を收容せしめざる事なりき。當局者は之によりて、不完全なる教育機關を絶滅せしめ得べしと思へりしが、是れ實に根本的誤解なりき。省令の目的が清國學生を收容する日本の學校を取締るに在りとせば、そを取締らんことは當然日本學府の責任たるべし。然るに清國公館の紹介書に一任せしは、これ清國公館の力を藉りて自國の學校を督勵せんとするものにして、自家の職責を他に課するに異ならずや。換言すれば自らその學校監督の力の不充分なるを告白せしに等し。失態も亦甚しからずや。そは姑らく措くも、是れ清國公館が能く學生を統御し勵督し併せてその良否を甄別して、當然に且つ公平に此利器を用ゐ得べしとせる根本的誤解に出づ。利刄は竟に凶器なりき。前の監督處の處置は、その事務に習熟せざりしか、他の留學制限の眞意に基づくか、何れにしても甚だ不當に此凶器を振廻はせり。本國の大官に寅緣ある者、若しくは自己等の關係者は、たとひ過激の議論を口にするにも拘はらず容易に就學の便を與へたれど、否ざる者は成績好良の篤學の士と雖、言を左右に託して容易に紹介の勞を取らず。其他玆に言明するを憚れども、種々の弊害は此凶器に本づきて百出し、留學界の大混亂となり、紛爭となり、反抗となり、八千の留學生の代表者は燕京の學部に愁訴し、強要し、學部の方針もまた一流の一進一退、左順右眄、紛亂場裡に留學生教育の衰運を醸成せり。公館の忌憚に觸れたるものは、紹介書を得るに由なく、山海數千里東海に笈を負へる青年は、止むなく省令を遵守せざる營利的あぐり學校に入らざるべからざる悲境に陥れり。而かも學蹟は到底擧がる可くもあらず、快々として志の得ざるを憤り、國に歸れば父母の、故舊の前に錦衣を飾るたよりだになく、自國の官府と日本の惡罵

幾時にその憤怨を漏すに至り、文部省が教育振興の策は却つて、留學界の墮落を誘致し、及び日本の惡聲を購ふに終りたり。

加之、もし文部の當局にして、省令の精神を實行して、かの營利一邊の似而非教育者を追究し、省令の遵奉を嚴責して恕さゞらばなほ多少の良効果を得たりしならむ。されど寛大なる文部は爾來悠々二十五閲月昨年末に至り小數の而かも世の公認せる學校に巡視して、唯一回の査閲を試みたるに過ぎず。有は無に優るべきも、時は既に晩し。此時留學界は既に衰運に瀕しつゝありしなり。

日本に於ては此の如し。翻て清國内に於ける狀情を察るに、京師大學の總教習は日本人なりと雖、名の賓ありて、その實なく、事實は高等師範部に多少の勢力を止むるに過ぎず。天津の租界、敷島樓上絃歌低く、芙蓉館裏春夢濃かなる我が有司の觀樂の最中に、京師大學の語學は英佛獨人の勢力に歸し、日本語は全く排斥し去られたり。僅に他の二三學堂に我が有力機敏の學者ありて、孤城を守れりと雖、南京の學堂は紛糾の中に逡巡し、エール大學は分校を南清に設けんとし、獨逸また大學を清國に興さんと努力しつゝあるの時、我は毎年百半の學生の委託すら補給學費の問題に捉へられて未だ決定を終ず。私立の學校は紹介者の脅迫にその衰退を奈何ともするに由なし。我が對清教育の今昔を俯仰して、誰か能く憫恨の念を禁ぜざるものぞ。此の如くにして將來の對清策をいかん。吾人曷ぞ私學の爲に謂はんや。爰にその現狀を述べて經世家の一考を煩はさんとするなり。



米國艦隊の弱點

山縣五十雄

エヴアンス中將の率ゆる米國の大西洋艦隊は太平洋廻航中の最難所といはれたるマゼラン海峽をも無事に通過して既に太平洋の浪に洗はれつゝあり、平和の時のこととて石炭積入糧食の供給等に大なる不便を感ずる事なしとはいふものゝ十六隻の大戰艦が何等の故障もなく、既に其遠き航海の半を爲し遂げ得たる事は米國の海軍將校及び水兵の熟練を證するに足る米國人はよく之を誇るとも可なり

今日迄の航海中聊か注意すべきことは該艦隊が第一次の帳場なる英領トリニダット島に到着したる時、該島在住の英人がこれに對する態度なり、無論英國の有司は該艦隊に對し相應の禮を盡し形式的の歡迎を與へたれど、一般公衆の態度は頗る冷淡なりしといふ、これにつき當時東京諸新聞の海外電報は何等報ずる所なかりしが、近着の外國新聞は特に之を記述せり、此事瑣細なりと雖も、英米の關係が近頃餘りに親厚ならずして、一般の英人は其同盟國なる日本に對する一の威脅運動と評せらるゝところの此艦隊廻航を喜ばざるを見るに足るべし

閑話休題、今や米國人が大なる誇を以て視るところの艦隊が實際彼等が戰鬪力に於ても數に於ても英國の海軍を除きて世界第一と信ずる艦隊がルーターダールなる人の筆により、其實甚だ重大なる弱點を二つ迄有することを指摘されたるこそ誠に笑止至極なれ、此事は既に我國の諸新聞に因りて傳へられたれば讀者諸君は其大體を了解し居らるゝなるべし、然れどもこは頗る重大にして且つ興味多き問題なるが故に、吾人は一は諸君の記憶を新にする爲め、一はこれに關するより詳しき評論を見んが爲めに敢て更に敍述する所あらんとす

事の起よりは今年一月發行のマッククリュア雜誌に於てルーターダール氏が忌憚なく米國海軍の弱點を擧

げ筆を極めて當局者を攻擊したるにあり、ルーターダール氏は米國海軍協會の一員にして、海事專門の一畫家なれば、海軍の事に全くの素人とはいふべからず、されば此人の攻擊には頗る傾聽すべきものありと豫期するを得、況んや高級の米國海軍將校中に此の議論を贊成する者甚だ少なからざるのみか、少壯の將校等は過半氏に同意すといへば、米國の論評界に蜂の巣を突きたるが如き非常なる騷ぎを惹起せしは寔に理由ありといふべし

ルーターダール氏が攻擊は二大要點にあり、一は米國の戰艦は一隻だに水線以上に充分に裝甲しあらざること、一は艦首並に航が低きに過ぎ、爲めに前面及び風に向ふ側舷に於ける砲塔の大砲は浪高き際に充分に用を爲さずといふに歸す、左に氏の文を引用すべし。

近世戰艦の建造法は其大體の方針に於ては甚だ單純なるものなり、其保護に堅要なる點二つあり、一は其水線を衞るところの砲彈不可通の帶甲、一は波浪のすぐ上に其大砲を揭げ得る高き且つ彈丸不可通の砲塔これなり

明白に總ての中最も緊要なるは水線に沿へる帶甲なり、砲塔破壞せらるゝ場合に沈默せしめらるゝは其砲塔内に於ける大砲に止る、然れども水線に孔穴を穿たるに於ては其艦は不具となるか若くは沈沒すべし、日本海の海戰に於て暴露されたる露國海軍の失策の中に最も際立ちたる事は露艦が餘りに多く石炭を積み込み過ぎたる爲め其水線の彈丸不通過の帶甲が水中に沒したる事なり、これが爲めに露艦は實際に於て軍艦の質を失ひたるなり

日本海々戰のありたる後一年のうちに我海軍は一の驚愕すべき事實を發見したり、即ち米國の戰艦々隊は日本海に於ける露艦隊と全く同一なる狀態にありて、然も一時に止らず永久に其狀態にあることを發見したるなり

我戰艦中一隻として、充分に準備され海に出づるに當り水上に六吋以上其主なる帶甲を露出するものなし、此主なる帶甲は各艦が幅七呎半乃至九吋有する所にして、建造當時の計畫にては各艦が試運轉を爲すに當り之を水上に十二吋乃至三十吋を露出せしむるにありき、然れども試運轉の時に艦に積載する重量は實地勤務の時のそれの半以下なり、故に充分に積載されて海に出づるに當り艦の水線帶甲は實際全部水中にありといふも不可なし、其主なる帶甲の上に一層薄き帶甲あれど、こは重彈丸がよく貫通し得るもの、今日の大砲は直徑十二吋長さ四呎重さ八百五十斤にして非常の力ある爆烈藥を裝置しある砲彈を發射す、此種の砲彈第二の薄き帶甲に命中して破裂する時はよく艦の水線に於て大さ戸の如き孔穴の穿つを得

ルーターダール氏は述べて曰く、過去十年間に米國が二十隻の一等戰艦を建造するに費したる總金額は一

億弗にして、目下建造されつゝある五隻は四千五百萬弗を費す筈なり、然るに總て此等の艦中、既に完成したるものと建造中のものとを問はず、一隻として戰闘せんとするに當り、水上に六吋以上の帶甲を露出し得るものあるなし、世界いづれの國に於ても斯の如き根本的失策を爲したるものなく、佛國の海軍に於ては帶甲は水上に露出すること五吋乃至八吋に及ぶと

艦首及び側艦の低き事につきてルーターダール氏は曰く

インヂアナ號型の三艦は艦首の水上に於ける高さ僅に十一呎にしてカーサーヂ號型の二艦は十三呎のみ、最も近く完成したるカンネクカット號すら其艦首は水線の上に露出すること僅に十八呎にして最近の裝甲巡洋艦の艦首は水上より高きこと二十呎に過ぎず

然るに外國海軍の有する新式の戰艦は首の高さ二十二呎乃至二十八呎に及び、裝甲巡洋艦は二十五呎乃至三十二呎に達す、蓋し外國の海軍殊に英佛の海軍に於ては艦首を高くすること一般の傾向にして英國の最有力なる戰艦ドレッドノート號の如き其の高さ二十八呎に及ぶ

建造の工合に於ける此差違の結果は海戰の場合に惧るべく明白となるべし、我米國の軍艦は波浪高き際には艦首に於ける砲塔の大砲、即ち新式戰艦の主なる武器の半數を有効に發射し得ざるに反し、外國の戰艦は容易に之れを發射し得るなり、此の弱點は米國の裝甲巡洋艦にありて一層甚し、何となれば巡洋艦は速力大にして體も亦長きが故に艦首を水中に沒すること多ければなり

米國戰艦の側舷砲は更に一層惡しき狀態にあり、ジョージア號、アイダホ號及びカンネクチカット號型の十二隻より成る最新の戰艦は側舷の水上に現はるゝこと僅に十一呎にして、又裝甲巡洋艦の側舷に備ふる中位の大砲十四門のうち十門は同じ高さにあり、此等の大砲は戰時の速力を以て走りつゝある時には、よし波浪さほどに高からずとも風に向ひては一門だに發射することを得ざるなり、換言すれば此等の大砲は風が砲門及び煙突より吐出す煙を攜ふが故に最も有利なる位置にあるに當りて使用するを得ざるなり、之に對し外國軍艦の側舷砲は一般に米國のそれに比ぶれば高さ二倍にして、中には三倍なるも少なからず

世界の海軍國中米國の艦隊より速力優れる艦隊を有する國三四あり、此等の艦隊は其速力優れるの故を以て大抵の場合に隨意に戰ひの時を選ぶを得べく、彼等若し風波高き日に戰はんとせば、其利益は非常に大なるべし、例へばかゝる日に佛國及び日本の艦隊が戰ふとせば、彼等は其全部の大砲を使用し得べけれど、我米國艦隊に於ては、艦首の大砲及び風に向へる舷側の大砲の四分の三はよし全く不用ならずとするも非常に發射を妨げらるべし

ルーターダール氏の指せる米國艦隊の弱點は斯の如く重大なるものなり 何が故に斯の如き缺點が彼の

艦隊に存在するや、氏は其責を全然米國海軍の官僚制度に歸したり、曰く

米國海軍省の政務は其大臣の下に一の官僚制度によりて行はる、大臣は海軍の事に知識なき門外漢なり、近年に於ては海軍大臣の位置は大抵手腕ある法律家が更に高き地位に進むに當り一時占むる所の踏石なり、此故に海軍省の政務は勢ひ彼れの部下なる官僚の手によりて取扱はれざるを得ず、此等の官僚は航海、砲術、艦造主計等の七課に屬する人々にして米國の海軍は此等の人々が建造し、装置し且つ運用する所なるが故に、もし其海軍に對する批評起ることあらば、彼等はこれに對して同時に判官と被告との位置に立つことゝなる、いふまでもなく殆ど總ての場合に彼等は被告を赦免するなり、斯の如くにして殆ど總ての批評は排斥さるゝ故に何人も批評を加ふる者なきに至る、かくして米國の海軍は徒らに舊を株守して改良發達するとなき次第なり

ルーターダール氏は前述の二大弱點の他に米國の軍艦が猶ほ砲塔と火藥庫との交通が直接に過ぐるが故に爆發の危險大なる弱點あることと及び多くの場合に於て砲塔が開き過ぎ居れるが故に熟練なる敵の爲めに砲彈をこれに投入さるゝ弱點あることを述べたれど、これ等の細説は省略すべし、之を要するにルーターダール氏の説は今太平洋に向ひつゝある大西洋戰艦々隊は數字の上に現はれたる程に實際の戰鬪に於て優勢ならずといふにありて、これにより米國人は熱狂したるに頭一杯の冷水を注ぎかけられたるが如く感じ一方ならず驚愕周章しつゝあり、贊否の議論鼎の沸くが如く、先づ第一の結果として海軍省の航海課長ブラウンソン少將は辭職するに至り、次て官僚制度の改革を要求するの聲擧り、猶米國國會は調査に着手せんとすと傳へらる、吾人は米國海軍の弱點が若しありとすれば、實戰に於て曝露されずして平和の調査の後に改良さるゝに至らんことを世界の平和の爲めに切に希望する者なり

英國新聞の墮落

由來英國の諸新聞は着實にして記事の正確議論の穩健を以て世に知られ尊敬されたり、有名なる倫敦タムムス新聞は『雷神』(The Thunderer)と綽名さるゝ程に世に重ぜられ、其言論は英國の智識あり、修養ある社會の輿論を代表するものとして、内閣諸大臣の演説よりも多くの注意を拂はれたり、然るに此英國否世界の最大新聞が將に一派の新聞經營事業に於ける「成金黨」とも稱すべき人々の手に歸せんとしつゝあることは近日の海外電報に據りて讀者諸君の既に知らるゝ所なるべし、但し此相談に對しタイムス新聞の小株主等は強き反對を示し、遂に訴訟沙汰に迄及ばんとすといへば、或は今回の相談は不調に歸するやも計り難けれど、斯

の如き相談が持上りし事實は、同新聞が從來の編輯營業の方針を繼續するに於いては財政上の困難多きが故に多數の購讀者を有し多數の廣告を集むる爲めに、編輯及び營業方針を一般の俗趣味に適し、多數の人氣に投ずるやうに改めざるを得ざるの位置に立ちつゝあることを示すものと見るべし、換言すれば英國の新聞が從來の品位高かりし態度を變じて、發賣紙數を增加せんが爲めに媚を俗衆に呈せざるを得ざる勢となりし事の一の現象と見るを得べし、これ實に人間思想史の一の革命とも目すべく、種々の點に於て頗る興味ある出來事なるが故に、吾人はこゝに少しく英國新聞の過去及び將來の趨勢につき講究する所あらん

　第十九世紀の後半に於て世界の總ての事物が飛躍的進歩をなしたる中にも、新聞紙の發達は殊に驚くべきあり、之を英國の例に見るに、一千八百五十年の頃倫敦の諸新聞は其價一枚二十錢乃至十六錢にして、其發賣紙數の如きも極めて僅少なりしなり、當時タイムス新聞は發行額最も多かりしものにて、每日六萬枚を發行し、之に次ぐはモーニング、アドヴアータイザーにして六千五百枚を發行したり、其他の諸新聞の發行紙數が如何に少數なりしかは之を以て推知するを得べし

　斯の如く倫敦諸新聞の發行紙數が少なかりし原因は敎育が一般人民の間に普及せざりし爲め讀者の數が少なかりし事勿論其の一なりしと雖も、同時に重大なる他の一因は代價が前述の如く甚だ不廉なりし事なり、かくて機敏にも當時の社會が廉價なる新聞を要求しつゝあるを推知して、一千八百五十五年デーリー、テレグラフなる一新聞が創立されたり、此新聞は當初一枚八錢の定價を以て現はれ、創立後僅に二箇月以內に更に之を四錢に引下げたり、當時此擧は殆ど狂氣の沙汰を世人に評され、到底永續せざるべしと豫期されたり、然るにも拘はらず、デーリー、テレグラフは非常の好評を以て迎へられ、忽ち大成功を遂げて初號發行後僅に六箇月のうちに早くも二萬七千枚の發行額を有するに至れり、これにより他の諸新聞も勢ひ其代價を引下げざるを得ざりしも、猶ほ四錢以下の代價を以て發賣するものは一千八百九十七年即ち今より十一年前迄一も無かりし

　然るに此年年に至り、アルフレッド、ハームウアースなる人現はれてデーリー、メールなる一枚二錢の一新聞を創立し、瞬く間に非常の讀者を吸收したり、此人は年猶ほ四十七歳の壯者なれど、旣に新聞事業に於て空前の大成功を遂げ、倫敦に於ても、又地方に於ても多數の新聞雜誌を所有し、先年貴族に叙せられて今や

ノースクリップ卿として知らるゝ人なるが、其の成功の秘訣は廉價に面白き讀み物を供給して多數俗衆の趣味と需要とを満たすにあり、此故に氏の經營する諸新聞は一定の主義も操守もなく、記事を誇張し、事實を枉ぐるを躊躇せず、只管一般社會の趣味の傾向を察知するに努め、好みて耳目を聳動し、人心を驚かすが如き題目を選ぶ、代價は廉なり、記事は面白し、多數の讀者がこれに引付けらるゝも無理ならず、デーリー、メールは今や英國に於て發行紙數最も多く、一日八十萬に達すといふ程に勢隆々たるものなり

此デーリー、メールに比敵する新聞をデーリー、エキスプレスといふ、これ亦頗る新らしき新聞にして、今より八年前始めて發行されたり、其持主たる人はペアーソンといふ今年猶か四十一歳の壯者にして、今回タイムス新聞の經營者とならんとするは此人に他ならず、氏はデーリー、エキスプレスの他にニユーカッスル市に於てはノース、メール新聞を、バーミンガム市に於てはガゼット、エンド、エキスプレス新聞を所有し、獨ほ遠からぬ前倫敦の有名なるスタンダード新聞、セントゼームス、ガセット等を買收し、又多數の週刊、月刊雑誌を經營しつゝあり、氏の新聞經營の方針は全く、ハムアース氏のそれと同一にして主義も操守もなく、專一に俗衆に媚びて廉價に面白き讀物を供給するに在り

斯の如くにして今日が英國に於てはハームウアース氏とペアーソン氏とが其新聞界の兩大關の位置を占め、天下を兩分して其一を保つといふ觀を呈しつゝあり、而して前述の如く記事の正確、主義の不變、議論の穩健の故を以て世界の尊重を享受し居たりしタイムス新聞までが將に其一人の手に歸せんとす、こゝに於て英は墮落に傾きつゝありといふも過言に非ざるを知るべし

然しながら斯の如き向下的傾向は獨り英國の新聞界に止まらず、世界いづれの國に於ても現はれつゝあるものなり、我國に於ても以前所謂大新聞と稱せられたるものと小新聞と稱せられたるものとの間には、明白なる差違ありし事は何人も知る所、然るに今日に於ては此等二種の新聞間に殆ど何等の徑庭あるなし、甚しきは以前大新聞といはれたるものの中に以前の小新聞よりも品位下等となりたるものあるを見る、蓋し斯の如き現象が世界の總ての國の新聞界に生じ來たりたるは、交通、電信、印刷等の發達進歩したると、教育が一般人民の間に廣まりたるに因る、前者の爲めに新聞は廉價に作らるゝを得、後者の爲めに新聞が廉價となりたると相待ちて讀者が大に增加したり、然るに此等增加したる讀者の趣味は其教育の程度猶ほ低きが故に從て亦低きを免れず、こゝに於て新聞も亦其低き趣味に適すべく作られざるを得ざるなり、思ふに新聞界に於ける此傾向は教育の普通益々大と共に永續するは勿論益々甚しくなるべし。



現代人物論（二）

夏目漱石論

△夏目漱石論　片山孤村

詩は理屈でもなく、説明でもなく、觀照である、描寫である。小説は藝術品で、心理學ではない。この原則より見れば、漱石氏の著作中比較的純粋に、詩として、藝術品として翫賞の値あるものは「坊つちやん」（其の他一二の短篇）だけだらうと思ふ。「猫」は隨筆の變態で、小説では無い。氣焔は面白いが、趣味には乏しい。「虞美草」や未完の「坑夫」は説明が多ほすぎて觀照を妨げて居る。人物の行住坐臥に悉く言譯がしてある。心理學の演習としては利益も興味もあらうけれども、小説の讀者には迷惑至極。骨董屋では有るまいし、品物に一々折紙を附けなくても可からう。「草枕」は漱石氏の作中自分の一番好きなのだが、此書の長所は所謂部分美で、人物も活きては居ない。總じて漱石氏は自然物の描寫に於ては獨得の手腕をもつて居られるけれども、氏の人物は、氏の理智の絲に釣られてる傀儡のやうで、活きて居ない許りでなく、また單調である。換言すれば餘りに主觀的で有る。

之を要するに漱石氏は詩人としては形成力に乏しいが、非常に聰明な怜悧な理智がこの缺乏を補つて居る。だから詩人と云ふよりも、趣味、學識に富んだディレッタントと云ふ方が寧ろ適當かも知れぬ。固よりこのディレッタントは確かに群小詩人を壓倒するに足る程の巨大なる「天才的の」ディレッタントたるとは勿論で有る。

△予等と路の異れる漱石氏　小栗風葉

予は豫て世間から言はれてゐる如く文學以外他に融

通の利かぬ人間である。随つて自分の書いてゐる小説以外には、哲學も分らぬし、宗教も知らぬし、政治論も出來ねば米の相場も知らぬ。文學と云ふ中にも小説、小説と云ふ中にも自分の書いてゐる小説――乃至自分の書いてゐる小説と類似した小説で無ければ、其善惡可否も分らぬと云ふ偏狹な予である。て、漱石氏の文藝論も二三拜讀したし、創作も「我輩は猫である」を始め、近くは「虞美人草」乃至昨今朝日新聞に連載中の「坑夫」も拜讀してはゐるけれど、元來が予等と全然異つたる立場に居られる事であるから、予は只面白いと思つて拜讀してゐる以外、是まで未だ何等氏の物に向つて考へた事が無い。所詮氏は予等と路の異れる人てある。予等は藝術の第一義に叶ふか叶はぬか知らぬが、作家と作品と全然有機的であつて、作家の煩悶なり懷疑なり努力なりが直ちに作品に現れてゐる――言換へれば、作家自身が作中の人間と一緒に藻掻いてゐると云つたやうな、極めて餘裕の無い物を痛切がつて喜んでゐる。つまり作家が一段高い所に居て、人間を批判したり冷笑したり揶揄したりするまでに、予等は自分と云ふものが未だ出來てゐない、若いのである。随つて氏の「我輩は猫である」を見ても警句や皮肉が面白いとは思つても、主人公を始め、出て來る人間も、予等とは全然思想も感情も乃至生活も沒交渉の人達であつて、唯結構な御身分である結構なお世界の人達であると思ふだけだ。苦沙彌先生が發狂でもし、迷亭大人が自殺でもし、金田夫人が墮落でもしてくれねば予等は飽足らない、是は氏の態度に就いて言ふのでは無い、お仲間の方の口上にもあつたが、氣が向けば書く、厭になれば完結を待たずに止めて了ふと云ふ、それが物に拘泥せぬ洒々落々たる所であらうけれど、予等は何でも大詰の打出しまで書いて、讀者にヤンヤと言つて貰はねば滿足が出來ぬ、食ふ爲めには厭になつてもウン／＼云つて書くし、又自分で骨を折つて書く以上は何所までも其れを吹聴もしたし、人からも其れだけに賞めて貰ひたし、又賞められたさに厭でも我慢して書く、我ながら淺ましいほど執着深い、名聞好きな、非

俳味的の態度である。是も矢張り若いからであらう。「坊ちやん」から「野分」「草枕」「虞美人草」どれも氏の學問なり智識なり文才なりの凡ならぬ所が現れて、誠に結構なものとは思つたが、前言ふ通り予等と路が異つてゐるから何とも申上げられぬ。けれど唯一言申上ぐれば、「野分」にもあつたと覺えてゐる、物に拘泥せぬと云ふ事、それが反對に、或る意味から拘泥し過ぎる事氏の作の如きは最も甚しいものゝやうに思ふ、氏は餘りに術と云ふ事に拘泥し過ぎる。隨つて何れの作品の主人公を始め出て來る人間でも、如何にも面白く、如何にも作中の人物らしく拵へられ過ぎてゐる。どうかすると一篇の筋の爲めに動いてゐる人間――一度誤まると、作家の或る概念に繰られてゐるやうな、つまり類性的の人間ばかり出て來るやうな事になる。筋の上か云つても「虞美人草」などは殊に作爲の勝つた、術の上の巧過ぎる痕があつたやうに思ふ。文章の上には仍更術が勝つてゐる。術が勝つてゐる爲めに、予等の如きは讀んでゐて、作家が言はんとし感ぜしめんとする以外の方に引張り出されて了ふ。例へば針山に針の刺してあるのを、赤い何やらに銀の雨が降つてゐると云ふ風に言つてあつては、餘りに形容が過ぎて實感が浮ばぬ。實感と云ふ事は氏等の第一に好まれぬ所であらうが、其所が予等と路の異なる所なら仕方が無い。それから「倫敦塔」とか、「幻影の盾」とか云つたやうな作、あれはつまり氏の智識の上の作品で、空想も理路を逐つた空想、あれを以て氏を詩人的空想の勝つた人と言ふ事は出來ない。元來氏の作には世既に定論がある、予は唯予等と立場の異なる點をのみ申上ぐ、妄言多罪。

△漱石君の文章

紅　緑

漱石君は文章がうまい、天下匹儔なしと斷言する事が出來る、小説としては僕と立場が違ふし意見が違ふし主張が違ふ、根本から違つてゐるから僕は此處に贅言する必要があるまいと思ふ

けれども文章に於ては僕頗る欣羨して居る世間では漱石君を寫生文派の人と言てるが大變な相異だと思ふ、子規翁の薫陶を受けた寫生文と漱石君の文章とは全然趣を異にして居る、抑々子規翁在世の時から漱石君丈けは別種なものであつた、子規虚子四方太碧梧桐鼠骨即ちホトヽギス同人の寫生文と漱石君の文章とは全然異なつて居る、又漱石君は俳句に於て子規翁の感化を受けたらうが、文章に於ては直接に感化を受けた事は無いと思ふ、僕は昔から漱石君の文章は子規翁に勝つて居ると信じて居た。

　どうしても日本の文學は日本の文字で書くものたる以上は、文章といふ事を度外視して評論する事は無理だと思ふ、新らしき革袋には新らしき酒を盛るのだから、文章が疎雜でも誤謬が多くとも不熟でも生硬でも幼稚でも構はぬといふ批評家が方々にあるやうだが、あれは負け惜みの我田引水論で、筋だけわかれば話の上手下手は構はぬといふのと同じである、恁んな評論家には迚も文章のうまみがわかるものでない。

漱石君は漢學の素養が深くて英文學の素養が深い、そして其れを消化して滋養となす強大なる胃腑を有して居る、これが當今に卓絕して居る一大要素だ、漢文と英文、文章のうまいのは尤もな話さ、思想が凡て道德の基礎から割出されるのも尤もな話さ、佛蘭西や露西亞の趣味を憎むのも尤もな話さ、況んや俳句の考が深く〳〵浸潤してるのだから所謂「感じのいゝ」事を主とするのは尤もな話ぢやないか。

　要するに漱石君の思想には漱石君の文章が最も能く當て篏まつてるもので、其れが一點の模倣もなく飽くまでも獨創的に立て行く處は彼の偉大なる處だ。

　だから僕は彼れを我國古來有數なる文章家として敬服して居る。

　漱石君にはバタ臭い處が微塵もない、これが或一派の如く強てバタ臭きを衒ひ、新らしさうな北歐の匂ひを附け、日本人でないやうな人間を描いて、分別の足らぬ批評家の喝采を博して居る作品とは月鼈の差がある、素養が違ふのだから無理が無いさ。

僕は漱石君が近頃ツルゲネフの作物を讀で居るといふ事を聞て、どうか丁寧反覆、精讀に精讀を重ねて貰いたいと陰ながら祈つて居る、其結果が漱石君の思想に一大影響を及ぼし、鬼に金棒、あの文才で今までとは異なつた方面に一轉歩せんとは近き將來にあるだらうと信じて居る。

△夏目漱石

徳田秋江

苟くも文壇の空氣を呼吸して生息して居ながら不忠實と申さうか、はた無禮と申さうか、正直な話が小生は其の實漱石先生の著作は首尾徹して讀んだ物は二つか三つに過ぎない。それなら漱石先生の著作が面白くないかといふに決してさうではない。小生は幸乎不幸乎、當節は漱石派の物が下火て、自然派の物が羽振が好いからと言つて、自然派のものでなければ夜も日も明けぬと言ふやうに、都合よく小生の趣味を狹く閉塞する自由を持たぬ。自然派の物だつて愚作もあれば惡作も少くない。その愚作惡作を歴々と承知しながら、『之れは佳作』などゝ公言して憚らぬほど小生は量見が大きくない。丁度それと同じやうに漱石先生の物にも劣作も隨分少くない、が佳作も全くないではないやうに思ふ。

可否は世評に任す。小生が漱石先生の作で、最初に通讀したのが確か『ロンドン塔』であつた。其の幽欝悽愴なる四邊の光景と、幽欝悽愴なる光景を表はすロンドン塔が眞面存せる二十世紀初頭の時世とを、作者が英國歴史文學等に依つて得たる智識の主觀に照らして一種のヴィジョナリイに描いた點は、他が何と理屈て貶しても小生には興味がある。勿論小説といふものであるかないかは關係せぬ。其の次に通讀したのが『カーライル博物館』之れは尙更小説的ではないが、一種の隨筆として決して面白くないものではなかつた。衆愚文明の喧騷を厭ふ神經質のカーライルが二階三階と仕舞には天井裏まで登り詰めて地上の響を避けるのも面白い。此處て一寸エピソードを入れる。二月十六日の『讀

賣新聞』の日曜附錄に石井柏亭先生が岩野泡鳴先生に對する論中に斯ういふことを言つて居つた。

『私は近頃日本に於ける自然派の運動に同情する。漱石氏の所謂せつぱ迫つた小説の美點は可なりに認めて居る積りだ。併しながら一を擧げて他を貶されて見ると反感が起つて來る。云々』

小生も其の點は石井先生に賛成する。無暗矢鱈に黨力を用ゐて壓制的に、はた日本の帝國議會の增稅案のやうに多數決を以つて貶されるのを傍て見て居ては假し多數黨といふ以外に、一般に其の方に眞理が多くあつても其處は一つ石井先生の所謂反感的になつて見る氣にもなる。一般にこそ自然派の方が最近の文學的眞理に叶つても居やうが、個々には自然派の作物が悉く可いとは言へぬ小山内薫先生の『手』などが新年の作物ては好いといふことだが好いかも知れぬが、それが好いのなら漱石先生の『ロンドン塔』などは數等好い。これは『手』が文章の點に於て稍々漱石張りてあるのみならず、手なら手、塔の內部なら內部を論緖にして種々な回顧幻想に耽ける點の類似から思ひ付いた小生の引例だが、『手』に比べて一方は其の强さに於ても凄さに於ても大きさに於てもはた價値に於てもズット勝れて居る。

何卒黨派根性を挿まずに公平に見て上げやうではありませんか。ねえ多數黨先生諸賢！

さて其の次に小生が通讀したのが『草枕』之れも無論面白い、文章は通達だし、詞藻は豐富だし、趣味も津々として盡きない。

石井先生がまた同じ論中に斯ういふことを言つて居る。

『近世人は其の包容する處自然派よりも廣いのてある。今の自然派諸氏が近世人てあると同じく、漱石氏も虛子氏も鏡花氏も亦近世人てあると思ふ。

此處だて！　○○先生などに言はすれば、生粹の自然派は三四人にしか過ぎない、否先生一人に過ぎない結論に得て落ち易くなつて來るが、味噌(汁)の味噌臭きは上味噌にあらず。○○先生を並味噌と申すのでは

毛頭無い！それは別問題だが、少くとも漱石先生の『草枕』の中には其の近世人の影が點々散在して居るのは爭はれぬやうに思ふが如何。「非人情云々」「出世間的云々」が既に其の邊から發して居るのだが一つ二つ例を擧げれば、

……汽船、汽車、權利、義務、道德、禮義で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすりと寢込む樣な功德云々……

二十世紀に睡眠が必要云々

婆さんは幾年の昔からぢやらんぢやらんを數へ盡くして今日の白頭に至つたであらう云々

それよりもつと適切な例は

……畫をかくのも面倒だ、俳句は作らんでも既に俳三昧に入つて居るから、作る丈野暮だ。讀まうと思つて三脚几に括りつけて來た二三冊の書籍もほどく氣にならん。かうやつて、煦々たる春日に脊中をあぶつて、椽側に花の影と共に寢ころんで居るのが、天下の至樂である。考へれば外道に墮ちる。動くと危ない。出來るならば鼻から呼吸もしたくない。疊から根の生えた植物の樣にじつとして二週間許り暮して見たい。

小生どものやうに生活に疲勞を感ずるものは、此の趣味もある。が、小生があると言つたとて、それを具象的に表現した肝心の作物がないから仕方がないが、正宗白鳥先生の作などには隨分此の意味の思想が隱見する。强烈とさうでないとの區別、また全體の空氣にも相違はあるが、要するに漱石先生も所謂自然派と等しく近世人である。幾年の昔から「ぢやらん〳〵を數へ盡くして白頭に至つた婆さんを」あれではどうも溜らないと焦りはせぬが、漱石先生も矢張りさういふことには眼の付く近世人である。

小生が通讀したのは恥かしながらこれだけしかない。『猫』は二三度讀みかけたが止した。『虞美人草』は新聞に掲載中一二回讀んだきり。『坑夫』もさうだ。

これは餘談だが、しかし漱石先生の評判には最も必要な事だ。それは先生があの不平な大學を退き『朝日

新聞」に入つて高給を得る得意の地に立つたといふ噂が喧傳せられてから先生の評判は下つたやうだ。先生の實際の作物が下つたのであらうか。先生の作物を忠實に讀まぬ小生には其處は何とも言ひ兼ねるが、それが何うも疑はしい。世の中は隨分輕薄だ、また嫉妬も强い小生どものやうに、最初から先生をオヴアエスチメートせぬものは假し先生が年俸を何千圓取られるやうになつたからとて今更別段にアンダアエスチメートする氣にもなれん。所謂文壇も『非人情』はがりでは通らぬと見える。何うも此の邊が衆愚の社會に對する骨だて――(二月二十八日夜)

△夏目君

芳賀矢一

夏目君は學校て同級てあつたこともあり、海外留學の時にも同船して巴里まで旅行しました。俳句をよくし、漢詩をよくし英文學に於ては從來の英文科卒業中の故參てあり、最も深遂な知識を有つて居られる人と信じて居ます。篤學て、寡默て、身を持することが極めて謹嚴であるから、よく君の性質を知らぬ人は、唯君を畏敬する方面ばかりに氣が附かうが、元來が江戸ッ子で機警敏捷なところがあり、飄逸奔放なところもありますから、君がユーモアは全くこれから出て來るのだらうとおもひます。俳句漢詩て養つた修辭洗練の句法と英文學から得來つた思想着想が君の沈着て、しかも機敏な性質と相合して、君の作物を成すのだらうと信じますか。君の作物の警句に富み、對話に綴みのないところと、これ迄に例のないユーモアの發現とは我文學史に於て尠くとも一時期を作つたものとおもひます。唯君の文は觀察は誠に微細に入つて至らぬ隈の無い、痒い所へ手の屆く樣な感はあるが、作中の人物に向つの同情熱誠な點は缺けて居る樣におもふ。これから君はどう發展されるか、どういふ方向に向はれるか分らぬが、余が感ずるところはそれだけてある。余は君の作は大抵愛讀して居ります。

△漱石氏の作風

相馬御風

○漱石氏の作物で、一番先に僕の讀んだのは、「帝國文學」に出た「倫敦塔」であつた。それを讀んだ時は、たゞ非常に珍らしいもの面白いものと思つた丈で、別に之れを小説だとも何とも思はなかつた、ただ想像の豐富な、警句の多い、何處となく鋭い諷刺の味のある、文章に才氣の溢れた、一種の叙事文位に思つて居た。そして學者にもこんな氣の利いた人があるものかと讃嘆して居た。次に讀んだのは「學燈」に出た『カーライル圖書館』である。之れも前同樣の心持で讀んだ。そして更に一歩進んで思つた。たしかこれは英吉利式だ、流石に英文學に通じた人の書いたものだ。もし我が文壇、就中小説界に英吉利趣味が取り入れらるゝものとせば、こんな風のものでなければなるまい。と、かう思つて居る所へ、漱石氏は今度「ホトヽギス」に書いて居る『我輩は猫である』を始めとして、大に創作に努めるさうだと云ふ噂を聞いた。それと同時に、この調子ならば、必ず我が小説界に目覺ましい新彩を添へるに違ひないと思つて、非常な好奇心と希望とを以て、待ち焦れた。

○こんな風で、『我輩は猫である』を迎へ、『琴のそら音』を迎へ、『幻の盾』を迎へ、『坊ちやん』を迎へ、『趣味の遺傳』を迎へ、『野分』を迎へた。そして一作を讀む毎に、例の「英吉利的風格」と云ふ特色の益々著しさを覺えた。それと同時に他の一面に於ては、既に鏡花氏の作物に於て滿足する事が出來なくなつて居た、ロマンチツチ趣味の飢渇を、こゝに再び充たす事の出來たのを嬉しく思つた。この時分はもう漱石氏の人氣は殆んど讀者界の大半を蔽ひ盡さうとする勢であつた。が、一方を見ると、これとは殆んど全く毛色を異にした自然主義的傾向が日を追うて勃興しかゝつて居る。もし此傾向が今少し旗幟を鮮明にし出したら、漱石氏の勢はどうなるだらうかと云ふ不安が起り出した。某大家に「夏目さんの出られた勢は、丁度紅葉時代に浪六の出たやうな調子ですなア」と云れたのも、この頃であつ

た。

○兎に角、漱石氏の作物が、一時文壇の人氣の中心となつたと云ふには、舊來の小說に飽いて、何物かの新らしいものを期待して居たと云ふ、讀書界それ自らの好奇心が動機の大半をなして居る事は爭はれない。が、それと同時に、漱石氏が作物の特色に於て、未だ嘗て我が小說界に見る事の出來なかつたものがある事は、明らかである。細かく論じたら、いくらもあらうが、大體から見て、その最も大きな特色とすべきは、ユーモアと云ふ點であらう。即ち從來我國に云ひ來つた滑稽とか諧謔とか諷刺とか云ふことよりは、モツト文學的な、モツト上品な、英語で云ふユーモア趣味の發揮、これが漱石氏獨特の新開拓境であつた。此點に於て、漱石氏は我が文壇に全く新らしい一方面を開拓した元祖として明治文藝史に特筆すべき人であらうと思ふ。

○漱石氏の新作風と並んで、藤村氏の『破戒』は、更に新らしい、一作風を我が文壇に提供した。併し、『破戒』によつて發揮された自然主義的傾向は、必ずしも『破戒』によつて創始されたものではない。寧ろ暗々裡に勃興しつゝあつた小說界一面の氣運が、最も著しく、最も價値多く『破戒』によつて、現出されたと見るべきであらう。漱石氏の作風に至つては、これとは異つて、全く獨創であつた。だから、前に著しい系統なく、後にも亦著しい傾向とならない。(但し、漱石氏の文體によつて全小說界の受けた影響は少くないが、これはこゝに論ずる限りではない)。先に漱石氏の作風に「英吉利的風格」ありと云つた通り、藤村氏等によつて歐洲大陸文學の傾向がわが小說界に現出したとすれば、漱石氏の作風によりて、英吉利文學の風格が我が小說界に現出したものと見るべきであらう。同じ悲哀の色があつても、一は現代的悲哀、一はペーソスである。漱石氏が作風の最大特色は、大陸文學脈が殆んどその大勢をなして居るわが小說界に、獨り高く英吉利的風格を持して居る事であらう。

△漱石氏

長谷川天溪

若し夏目漱石氏に定義を下すとせば次の如くならんか、漱石子とは不平の遣り場なしに猫の爪を切りて面白かる人也

△夏目君について

藤岡作太郎

○夏目君の作物は、其出た當時讀んだ丈けで、まだ纏めて精讀した事がないのだから、全體の評論を下すことは六つかしいのですが、當時一番面白いと思ひ、今でも一番面白いやうに思ふのは「草枕」です「草枕」を小說と見れば、出て來る人物は、どの人物もどの人物も同じやうなもので且つ別に纏まつた趣向もないやうだが「只讀んで居ると春ののどかな、やさしい、溫かな、夢のやうな感じ――一種の春の匂ひに身を襲はれる樣な氣がする。其氣分が一番面白く思つたんであります。其外の「草枕」の價値又は面白味については充分言つて居る人もある樣ですが、其以外に私の面白いと思つたのは、沖澹の趣味と云ふことを大雅堂などの繪に比較して論じた所、彼所が大變に面白かつたんです。あの所を見ても夏目君の美術眼の勝れた事が分るのです。此れが贋作か眞作かなどいふ鑑識の事は別として美術其物を鑑賞するとは多くの批評家又は作家などに一頭地を拔いて居ると感心した。從來大雅堂の繪などを只飄逸だとか、奇拔だとかいつてホンに簡單な、漠然とした感じの二三句で評し去つたばかりで、委しい說明を加へて論じたものはない。此繪は面白いとはいふけれども自分で考へて見て何處が面白いかと追究して見れば分らず、他人に附和雷同して旨いとはいふけれども、追究すればこれも何處が旨いのか分らないといふ有樣であつた。處が夏目君が其を說明して、成程文人畫の面白味は此處にあるといふことを詳しく說明し得たのは、他の批評家が聞いても、從來自分のいひ得なかつたものをいひ得たと首肯くだらうと思ふ。其邊は私の感服

に堪へなかつた所であります。

○「虞美人草」を讀んでも、非常に面白いと感じた所も多いし又多少遺憾に思つた事もあるが、兎に角全體をいへば、此「虞美人草」は人間を寫すといふよりも、どうしても觀念を人格化したやうに感じられて、すべての出て居る人間が一本調子のシムプルな人間ばかりで、複雜な性格を具へたものは見えず、こんな人間が今の世界にあるか知らんと云ふ樣な感じがする。が其結末の大破綻などは餘程思ひ切て書いてあつて、近頃あれ丈け大きな破裂を寫したものは餘り見ないので、極めて痛快に感じた。が然し痛快に感じて居る中にも悲壯又は壯嚴といふ所を少しく缺いて居るやうに思ふ。これは何時もの夏目君一流の調子がついて廻つて、熱烈に物を見ると云ふ事をやらないのか、又は實在から退いて物を諷刺的に見るといふのか、何にしろ悲壯、壯嚴の分子が多少足らないやうな感じがするのです。然しながら長短共に存して居るとはいふもの丶、夏目君の持色を發揮して、近頃類を見ない小説と思ふ。殊に之を見て思ひ出さるゝのは、江戸時代の曲亭馬琴である。馬琴に比したら夏目君自身は或は不平かも知れないが、其觀念を人格化するといふ點、それから自分丈けは極めて健全な作物を作つて世の中の贈々者流とは群を異にして、獨り超然として立て居るといふやうな點は頗る馬琴に似て居る事であらうと思ふ。時代が違ふからして無論其人も違ふ。文化文政時代が明治に進んだ如くに、其文化文政時代の馬琴が明治の夏目君に進んだであらう。時代の間の相違は大なるものであるが、其相違を措いても尚相通うて居る點が多いやうに思ふ。

○私は夏目君の作物を熱心に讀んで居る一人である。其豐富なる學識を以て何時も〳〵、回は回毎に（然し今度の「坑夫」の如きは一向感服しないが）人目を新かにせんと勉めて居らるゝのは優に當代第一の作家として推重するに足ることと思ふ。（談話筆記）

△夏目漱石論

正宗白鳥

漱石氏の作も大抵は讀んでゐる、「ぼつちやん」や「猫」「幻影の盾」等相應に面白く讀んだ。創作家の殆んど無い官大學の人としては珍らしいと思つた。しかし以上の作も二度讀み返へすと薩張興味がない。落語家的口調が多くて鼻について不快になる。氏は性格を寫す技倆は更にない。「坊ちやん」の如きも、淡白で氣象の强い人間を描かうとして、一の類型的人物を作り上げたのだ。氏は他の作家が千人に一人しかない人間を寫すと云つて非難するが、千人中の一人といふ特別の人物でも實際界に存在すれば描くに足る價値が充分ある。氏の作には一寸見てありさうでその實今日の時代に生存してゐさうでない人物が多い。「ぼつちやん」中の幇間的畫家やその他の人物は類型的人物で、しかも誇張してある。この點は餘程鏡花に似てゐる。鏡花の作は夢幻的だの詩趣があるだのと云はれてゐたが、予はこの頃彼れの「婦系圖」を讀んで、少しも夢幻的でもなく超然的でもなく、その江戸通がりと變挺な一種の人生觀が出てゐるので、溜らなく厭になつた。彼れは昔から藝者崇拜通人崇拜學者嫌ひ女學生嫌ひ、慈善家嫌ひと云ふやうな淺薄な人生觀を持つてゐて、それから割出して故意に一を崇め、一を貶する筆法で書いてゐる。個人としては藝者が好きであらうが、女學生が厭であらうが、どうでもよいとして、製作に取掛つた時は「藝者」とか「女學生」とか云ふ類型的好惡の念に驅られず、個々の人物についてもつと深く觀察したらよからう、漱石氏は流石に學殖があるだけ、鏡花ほど淺薄でもないが、その人生に對する考は一種の道學先生である、「野分」や「二百十日」を見れば常識的道德小說の臭ひが漲つてゐる。氏はイプセンなどに比ぶれば、「退き場所」を持つてる丈えらい」と悟つた風な口を利いてゐれど、吾人にはさう信じられぬ。氏の作を見ると、氏は與へられたる道德に跼蹐してる人で、今の家庭小說家と多く異る所がない。若しも氏がその自から云ふ

如く禪的態度で、眞に世上紛々の事、老病死苦に超越してるのなら、何で「野分」等の娑婆臭い者が書けよう。要するに氏は超越したつもりなのだ。吾人も現實に苦んでるよりは、出來る事なら超越したいが、生きてる間は出來ぬ相談だ。超越してると思つてる時は、それは己れを欺いてるので、現實に接觸すれば直ぐ毀れてしまう。

同じ俳人でも戸川殘花氏の如きは多少現實を離れて「退き場所」を持つてゐる。少くも超越的分子に於ては漱石氏と段違ひだ。「露とく〱試みに浮世すゝがばや」の滋味を多少解してゐる。「浮世三分五厘」の域に住むんでゐる。夏目氏は玆まで達してゐない。だから第二義道德の境にうろ〱して、「坊ちやん」をして、その所謂俗物を罵倒せしめ、「野分」や「二百十日」に於て岩崎などを氣にしてゐる。しかしまだ悟れないから小說も書けるんだらう。終に云ふ氏の從來の作中では、「幻の盾」「猫」等が佳作で、評判の「草枕」は部分々々に佳い所もあるが、全體として感心せぬ。

△漱石氏の第一印象

青果生

僕の友人には不思議なほど漱石黨の人が多い。漱石黨と云つても惡るい意味に取る可らず、昵近の人が多いと云ふまでの話である。長江君、白楊君、椋陰君、浩峰君、そして柴二君、まあざつと算へてもこれだけはある。だもんで、まだ面接せぬ前から、氏の噂や性格は始終聞いて居た。椋陰君や浩峰君からは寧ろ聞かせられたつた方なのだ。それが二年越しだもの、斯う云ふ人だらうとか、あゝ云ふ人だらうとか、大抵のあたりは僕にもついた。だから、長江君の紹介で今度——つい十日ばかり前に初めて對面しても、別に初對面と云ふ感じはなかつた。自分の思つた漱石氏と、會つて見た漱石氏と、何う違つて居るか、何う似て居るか、それを比較研究したぐらゐの事だ。

歸り路に長江君が、「何うです、君、初めて遇つて見た感じは。」と斯う聞かれた時も、「然うですな、矢張

り考へて居たやうな人です。」と答へたら、「フン。」と云つて長江君は興の無い、顏をして了つた。然うぢやないか、長江君は僕を初めて漱石氏に紹介した氣で居るんだもの。前にあれほど紹介したのを忘れてるんだね。

僕の漱石觀は大抵あやまらなかつた。思つて居た漱石氏と、本當の漱石氏と然う大した相違はなかつた。

今の文壇に漱石氏ほど餘裕のある人は少ない。と思ふ。餘裕に語弊があるかも知れぬが、他に適當な言葉を知らないから然う云つて置く。早い話が世間話に興味を持ち得るだけの餘裕を持つて居る。他の文學者を訪ねて見給へ、十人が八人まで話題は文壇の事だ。誰の作品は何うの、彼れの主義は斯うのと、自分の職業の話で持切りだ。酒を飲んでも茶を啜つても、日向ぽつこしても直ぐその話だ。忠實は忠實だらうが餘裕は無さ過ぎる。そこへ行くと漱石氏は違うやうだ。三時間が四時間でも、くだらぬ世間話に興味を持ち得る人らしい。維新頃の浪人の話をしたり、淸國遊學生の話をしたり、蓄音機、わさび漬の話をして居たりする。例の底さびのある聲で偏窟らしくそつぽうを向きながらポツリ／＼と話して居る。興が來ると輕るい身振り手振りを入れて話を助ける。話が盡きたのかと思ふと然うで無い、後から又ポツリ／＼と出てお出なさる。落付いたものだ。そして、巧に話題を轉換して行く具合は何うして／＼立派な坐談家である。腹のクチい人で無ければ出來ない藝當である。

この書いたものは無論漱石氏の目に入るものと思ふと些とまづいが、氏は思つたほどの皮肉屋であるらしい。相手の出次第では飛んだ皮肉を云ふ人だ。それも面と向いて、直向から他を怒らすやうな眞似はせず、俯向いて火鉢の隅ッこでも見詰めながら、落付いた聲、落付いた調子で存外思切つた皮肉を云つてのける。相手が氣付かうが氣付くまいが、すまアして知らぬ顏をして居る。中々人が惡るいよ。

漱石氏は非常な才人である。世に云ふ小才子の才人でなく、底の底のどん底に非常の才智をかくして、幾

鋒を容易に顯はさぬ才人である。眞の才子と云ふのだらう。腹にはシッカリした膽の大きい强い自信を持つて居ながら、そのつやを消して、濟して、白雲悠々たる樣子を見せて居る。心熱のある人だ。表面から透して見て底の見えない人だ。惡意味でなく、方解石のやうに二重の屈折する人である。横なり縱なり、一斷面からばかり見て分らぬ人である。

だから世間では、漱石氏を一趣味に固定して動かぬ人のやうに云ふが、僕は決して然うぢやないと思つて居る。動けばどッちへでも動ける人たらうと思ふ。動かないのは思ふ所あつて動かないのだ。默つてお茶を飮んで書物を讀んで考込む人ではない。動く時が來ると、どつと動く人なのだ。今の作品や作趣味ばかりて漱石氏の全豹を知り得たりとするがあつたら、それは甚しい迂濶なやり方である。今の見る氏にXを加へて見なければ眞の夏目漱石と云ふ人はわかる筈がない。その最も好い證據には、嘗て同氏が門弟某氏の謂ゆる漱石趣味に固定して動かないのを諷して斯う云ふ手紙を送つた事があると聞いた。「イブセンを讀め、モオパッサンを讀め、近代の文學を出來るだけ讀め、少くとも近代思潮の趨向を知れ。君は僕の趣味にかぶれて、これを萬能と思ふと、それは由々しい誤謬である。僕は動く男、融通のつく男だ。」と云つたと聞いた。又聞きだから眞僞の保證は出來ないが、動き得る人融通のつく人と云ふ事は確かな事實だらう。自ら知るの言葉である。例令手紙はうそにしても面白い言葉ぢやないか。

△夏目君の作物

醒雪

夏目君の評を書かうと思つて又「草枕」や「ロンドン塔」などをも覗いて見たがどうも感心しない。なる程文體の上から見ると、辭樣や比喩の些末に至るまで、創始の工夫は重ねてあるが、只新らしいといふのみて何となくわざとらしい、字句そのものには特殊の面白味があるが、情景を彷彿ならしむるには足らぬ、全體

としての印象が極めて漠然としてゐる。句ごとにあまりに新しくて讀者を瞠かせるのである。

唯面白いのは、やはり「猫」だ。この種の作物は、特にその情景を想見する必要もない、その脚色の發展に注意して興味を感ずるものでもない、唯一句一句、一節一節に、嶄新な奇警な描寫筆致を味ふことは、譬へば俳諧の一句一句に別樣の興味を感ずる樣に、山陽東海の汽車の窓に、瞬間ごとに新らしい景色を眺める樣に尾もなく頭もなく、統一のないきれ／＼が悉く面白い夏目君の長所はこのきれ／＼の奇警な觀察や描寫にあるのではあるまいか。尠くも世間が夏目君に喝采したのはこの點ではあるまいか。時々朝日の「坑夫」を讀んで見るが、脚色には勿論感味が乏しい、「猫」ほどに作者の感興も乘つてゐない樣だ。だが、毎時も一二の警句の忘れ難いものがある、今日も仲間の嘲弄に畏縮してゐた坑夫が、嘲弄の威壓が絕えるとともに、氣力の恢復して來たことを描いて、人間は常に手を出さない角力をとつてゐるものだといふ比喩が加へてあつた、この一句だけが、今日の「坑夫」の全體である樣に、僕には感ぜられた。

或る人はこれ等を唯技巧の新らし味だといつてゐるが、實は聯想の新らし味であらう。普通の文章家の頭腦は、多少遺傳的の慣習で支配せられてゐる、聯想の範圍も大抵定まつてゐる。猫といへば鰹節か木天蓼かといふ方に自ら聯想が向つて來る、それがビールに醉つたといふのは實に奇想天外より來るといふ類で、その作中の人物が皆トボケた樣なことばかり口にしてゐる、その會話が常に唐突で、相對した人が、全く異つた聯想を辿つてゐる樣に感ぜられるのは、夏目君の作にのみ見ることを得る趣である。

この異樣な聯想は、或は俳諧から來たのではなからうか、元來題を設けて句を案ずるといふ場合には、なるべく嶄新な材料を配合しようといふのが、一般の俳人の傾向で、ことに新俳といはれる人々の運座などでは、調和不調和といふことよりも、寧ろ配合の新らしいのが勝を制する。若しこの心持が散文の上にも應用せ

られるならば、例の炎々たる焔を飴の沸騰してゐるのに聯想するのも至當であらう。その心持が、更に文章の推移流動の上にも應用せられると、接續詞のない、時間の關係を表示した助動詞のない、作者獨得の急激な突飛な聯想に從つて自由自在に去來する、一種の文體も出來上るべき筈である。唯讀者は時とすると、作者の聯想の迹を逐ふことが出來ない。そこで、唯切れ〲の妙味を感ずるばかりて、全體としての印象を持し得ないのである。

加之、僕は夏目君が、例へば「草枕」や「猫」の第一章に筆を着けられた時に、果してその作物が如何に發展し如何に歸着すべきであるかを、明に豫想せられたか否かを疑ふものである。比喩や辭樣や文章の推移に於いてのみならず、脚色の發展して行く順序に於いてさへ、例の突飛な急激な聯想作用でもあらうか、往々意想外な方向に外れて了つて、「猫」などの場合には、讀者の好奇心の的になつてゐた篇中の人物の運命は、「猫」の死とともに全く闇中に葬られてゐる。若し臆測が許されるならば、その各段は、其の段に筆を執られた瞬間の感興や聯想によつて、例へば俳諧や隨筆の樣に發展して行くので、段ごとに特殊な情緒と思想とで出來てゐる、その歸着は全くこれに關係した面白い聯想が全く盡きた時は、脚色の發展如何に關らず、筆を擱かれるやうに見える。

唯一の除外例は「二百十日」である、世間の評はあまりよくなかつた、夏目式の妙所は或は尠なかつたらう。しかし、この一篇のみは、(僕の見た限りて)一氣呵成の作て、湧くが如き感興に逐はれながら健筆を飛ばして、毫もたゆみなく草し了られたものゝ樣に感ぜられる。首尾に一貫した、健鬪主義と苟安主義との反照が、極めて鮮明て、卷をう敝ても、未だ二人の青年が眼前にちらついてゐる樣に感ぜられる。夏目君の文には勿論別樣の長所があるが、小說としてはこれも同氏の傑作ではなからうか。

元來、三馬や一九や乃至鯉丈などの滑稽物の樣に、片々たる滑稽の連續したものも、讀みものとしての價

値はないではない、更に溯つてかの黄表紙の樣に、一切脚色などには重きを置かないで、箇々の鋭い穿ちや洒落て落をとるのものも、亦棄つべからざる妙味がある。だが、この種ものゝ傑作は多く長篇でない箇々の小さい興味の連續は、久しくなれば單調になるが爲であらう。且つや、この種の作者は、文壇に於いては多く知命であつた、一九の洒落も東海道の膝栗毛で盡きて他は雞肋に過ぎぬ、三馬も浮世風呂と浮世床の外に出色の作はない。人の氣のつかない珍らしいもの新らしいものばかりは、如何に豐贍な腹案にも、さまでに澤山準備せられてゐるものではなからう。黄表紙や中本と、幾分か種類は異ふが、やはり箇々の新らしい觀察や警語で出來てゐる「猫」の妙味は、果して何時まで持續せられるであらうか。抑、氏の殆んど奇異な不可思議な聯想が、何時まで、嶄新なりとして、人目を聳動するであらうか。

「草枕」や「虞美人草」は「猫」に比べて見れば、とにかく多少の脚色がある、單篇ながらも「二百十日」は、脚色ある小説としての手腕を示してゐる。僕は夏目君の當來はこの方面に發達すべきものと信ずる。

△夏目漱石論

生田長江

○何と云つたつて、夏目先生位貫目のある人は少からう。

人格の立派なのは云ふまでもない。種々なる意味に於て隨分天分の豐かな人だ。

學殖と云ふ點から云つて見ても、創作家にあれ丈け學殖のある人は、外國にもさう澤山はあるまいと思はれる。

先生は批評家としての天分と、修養をも有つて居る人である。森鷗外先生よりも、坪内逍遙先生よりも、より多く創作家たるべき質を備へて、しかも是等の人々に比して劣るところなき批評眼を有する人である。

漱石先生は創作の上にも其批評家的天分を利用しな

いては居られぬ人だ。

文學とは人生の批評なりと云ふ定義は、餘程嚴密なる意味に於て、漱石先生の場合に適用され得る。即ち先生は如何なる題目を取らるゝ場合にも、常に批評の態度を捨てることをせぬ。

先生は自分丈け人生の渦中から一歩を退いて、その外から、もしくは其上から人生を見やうとして居られる。冷靜と云ふ言葉が不穩當だとすれば、靜かにと云つて置かう、先生は御自分丈け一人、高いところに立つて、騒がしい人生を、靜かに見下さうとして居られる。

先生には勿論溫かいところがある。人生を批評する場合にも決して冷かな眼て冷かな言葉て批評されるのてはない。

先生は英吉利の皮肉屋スヰフトが御好きだとか、スヰフトに似て居るとか、聞いたけれど、先生はスヰフトなどより、ずつと溫いところのある人だ。サティリストと云ふよりも、寧ろユウモクストと云ふべきだ。

先生のユウモアはイングリッシュ・ユウモアと俳味禪味などから來たジャパニイス・ユウモアとの化合物てある。混合物てはない、たしかに化合物てある。

先生には坪内先生などに見るやうな文化文政あたりの文學から來た、輕い洒落や滑稽の趣味はあまり無い。より上品なる所以てある。

先生は紅葉山人や幸田露伴氏などに比べて、ずつと哲學的の頭を持つて居る人てある。ユウモアがなか〳〵念入りのユウモアなのに不思議は無い。

が、之を要するに先生はユウモリストだ。所詮悲劇の書けない人てある。

悲劇に悲劇特有の題材があるものとすれば、さう云ふ題材は先生に適しない。

若しまた、同じ題材が悲劇的にも、喜劇的にも、その他如何やうにも取扱はれるものとすれば先生は如何なる題材をも、悲劇的に取扱はうとはしられないことを希望する。

先生は御自身て餘裕のある文學とか餘裕のない文學

とか云つて居られるが、成程先生のは餘裕のある文學だ。而して近代文學一帶の悲劇的根調を全く有つて居らぬ。

イプセンがどうあらうとダンヌンチオがどうあらうと先生はやつぱり先生である。近代文學の一般思潮に伴はぬ、もしくは近代的でないと云ふ批評は、先生にとつて何等の毀譽褒貶を意味するものでなからう。乃はち敢へて云ふ、先生の作物は到底近代的のものでない。

△夏目先生

樗陰生

○三月の中央公論に「夏目漱石論」と題して先生に對する諸家の評論を集める積りですと、先生に手紙を上げたら次のやうな御返事があつた、「夏目漱石論が來月の中央公論に出る由聊か恐縮致候。先達中より大分漱石論が出て申候。もう澤山に候。出來得べくんば百年後に第二の漱石が出て第一の漱石を評してくれゝばよいとのみ思ひ居候。」先生の抱負如何を見るべし。

○其後先生に逢つたら「僕はこれからどの位エラクなるか分らんぢやないか、今から僕を評するなんてよして貰いたい。それに生きて居る人を評すると云ふ事は、いろ／＼の利害關係上どうも公平に行くものでない。評するなら其人が亡くなつてからの事だ」といふ意味の事をいはれた。けれども生きて居る中に評に上らないやうな人なら、死んでから滅多に評される氣遣はない。生きて居らるゝ中に評さるゝのはお嫌かも知れないが、これはエラクなつた御不承ぢやと諦めて頂きたい。

○先生はなか／＼義俠心が強くつて、困つた書生や知人などに金錢を與へ又は助力を與ふることなどは屢々てあるが、然し一方にはなか／＼利害にも明かな人て一時の感情に動かされて一生の損失を招ぐ樣な事は決してせぬ人てある。御自分の作物についても總て印稅になさるなども、「本屋は相當の利益があればよい、

本屋が無暗に儲ける——作者以上に儲けるなどはよくない事だ。」といふ意味てあるらしい。權利思想の餘程强いやうに見えるのは、先生は英國を餘り褒められないに拘らず、英國風の感化がある事だらうと思ふ。

○先生は餘程瓢逸な處があつて……と輕く笑て居らるゝ處などはどう見ても俳人のやうだが、然し下女なんかゞ用事を聞違ひて埒明かぬ時や他人から見當違の評を受けられた時などは隨分癇癪を起されて顏色を變へらるゝ時などもあるやうだ。

○今の創作壇に先生程本を讀んだ人は無論あるまい。先生の書架には斯學のオーソリチーになるやうな大著述が多くて、片々たる一時の流行物などは餘りないやうてある。際物ばかり讀んで多讀を誇りたがる某々氏とは非常の相違てある。先生の思想も見識もしつかりして力があり、根底があるのは多くは先生の惡書俗書を讀まれぬ所から來て居る事と思ふ。

○先生は哲學、心理學、生物學、社會學等何てもやられたやうだ。殊に哲學に於ては餘程の研鑽を積まれたやうに見ゆる。禪學の研究もなかなか深いやうて、自から座禪をやられた事もあるやうに聞いて居る。禪學のよい本は大抵讀まれたらしく、思想に於て文章に於て其影響を受けて居らるゝ所も少くはないやうてある、

○先生は餘程早筆の方てある、「一夜」は二日「二百十日」は二三日、「薤露行」は一週間、「坊ちやん」は學校に出て居て十五日「野分」も十五日許りて書かれたやうてある。「草枕」は非常に長くかゝつたといつて居らるゝが、それでも廿日とはかゝらなかつた(尤も學校休暇の時なれど)やうてある。原稿は非常に奇麗で、消したり直したりした所は滅多にない。而かも其れが清書したのてもなんてもなく、ぶつつけ書きてある。筆を執て紙に臨まるれば想も詞も共に滾々として湧き出るものと見える。若し湧き出ぬ時があつて一句にして筆が止る時があつても、意に滿ちた次の一句が出て來る迄は容易に筆を下されぬものと見える。「一度書いたものを書き直す時があつたら、別に今一つ新らしいものを

作る」とまでいはれて居る相である。

○先生の作物で一番よく上手に書けて居るのが「カーライル博物館」かも知れない。何でも先生の話に「漾虚集」を校正する時「カーライル博物館」とか「一夜」とか比較的すら／＼と書いたものは何遍よんでもよいが、「幻影の盾」とか「薤露行」のやうな比較的骨を折つたものは處々にイヤになる處があるといはれたやうに記憶して居る。先生の傑作はといへば「坊ちやんて」お手のものといへば「坊つちやん」「二百十日」「猫」等であらう「草枕」は誠に驚くべき作で、部分／＼に何ともいはれぬ妙味はあるが、全體としては作者の餘りに苦し相な樣子が見えて「坊つちやん」など程心持ちよくは讀めぬ。

○「虞美人草」は非常によい處があるが、又左程によくない處もあるのは、先生が新聞小說を初めてやられて今迄多くは一氣に呵筆せられたるものを、長日月に亘つて結構剪截等に意を用ひなければならなかつた爲めかと思ふ。「坑夫」に至ては先生一流の說明が多過ぎて先生作中で一番見劣りするやうだ。尤も九十何回といふ長いものがまだ半分しか出ぬから、これからどうなるか分らぬが、今迄出た丈けで以て缺點の非常に多い作だといふ事はいへやうと思ふ。

○人或は今日先生の評判稍々下り加減なのを見て先生が極端に褒められた反動で、作物がわるくなつた譯ではないと云ふ人がある。それは大いに一理ある事と思ふ。先生の作物を精讀した事がなく、只衆に和して褒めて居つた人の大部分は、只反動的に惡口をいふやうになつたらう。然し僕等は熱心に先生のものは研究して居る。僕は先生の將來については無論計ることも出來ず先生の事であるから又どんなすばらしい作物をドン／＼出されぬとも限らぬとは思つて居るが、新聞物を書かれてから――少くとも今度の「坑夫」などは確かに先生の今迄のものに比べて見劣りする事は疑はないと思ふ。

○先生は原稿を賴まれてもなか／＼安請合はせぬ。其代り請合つたら是非共書く。人物のしつかりして居ら

る丶事、身を持することの高き事等は今の他の作者とは大いに面目を異にして居らる丶。

○先生の文章の妙、詞藻の豊富、學識の高遠、等は皆人の知る所、重ねていふの要を認めない。故にいはない。

アイヌの文學（下）

金田一花明

アイヌ古謡「峽中記」梗概（承前）

神襲(カムイコソンデ)六襲(イワンコソンデ)、身に鎧ひ、鎖金帯(ウチツカニクツ)纏ひしめ、神(カムイ)刀取り佩きて、金兜(カンボンカサ)の緒紐を結ぶ。

かくありつ丶、圍爐の上座に立たうとして、覺えず蹣跚(よろく)とてけか丶る。立ち直り、居丈高に武者振りゆすり、雄々しく上座(かみざ)下座(しもざ)を、踏みならし、歩くと見えて、身は矢庭に草屋の高窓跳り出た。〔註、この物の具を身に着けると、神が、身に乗りうつるといふアイヌの信仰。〕今こそ、神風身を捲けれ。女は伏しまろび、泣き呼ばふ、斯く——

「吾兒よ、吾兒よ、ゆめ腹立して過ちなせそ。シヌタプカシのおん身が郷へ先づ歸り、さて後、村々國々は越えて征戰(いくさ)し給ふとも！」

さはれ、神風飄々として吹き起れば、身は遠く、遠く、甘し國原へ運ばれて、いつしかとある汀に下り立つた。仰ぎ見れば、此處は、頂、雲に入る高嶺の麓、甘し小川、山の頂より走り流れて下る。川の中流には、黒霧立ち掩ひ、神々達の住家にやあらんたゞずまひ。川の下流には赤き霧、遥か下流には黄霧、たなびく。姉は泣く／＼追ひついてその上に云ひけるは斯く——

「斯はしも唯の神々の里にはあらじ。禍津日神(まがつび)の住家にあらずや。斷(た)つて此の地は過ぎり給ふな。ゆめ、ゆめ此等の惡神をな侮り給ひそ。

聾耳、少年はつか／＼と進み行く、黒霧の、霧の中へ歩み寄り、打見れば、神瀬(カムイカマソ)の六瀬(イワンカマソ)、瀬の上に、黒霧まよひ、立ちこそ靡けれ。

黒霧の、霧の中入る。何處よりとも知らず、烈しき

刀の撃ちが飛び來る。續いて姉へも、烈しき刀の撃ちが飛び來る。二人は身を避けて僥に免れた。刀は空を拂つて行く。

女は再び慟哭して云ひけるは斯く——

「斯は、ゆゝしき大事ともならむ。疾く〳〵彼方へ赴き給へ。」

かく云へど、直ちに赤霧の、霧の中へ、一進み行く。打見れば、赤岩の六岩ぞ立てる。岩の上に進み寄る。此度は、曩の撃ちをば嬰兒の刃に比せしむる程、幾倍はげしき刃の撃が飛んで來た。けれども避けんともしなかつた。されども、空しき刃となる故に、身は寸膚も傷受けぬ。最後に、黄の瀬の、六瀬、瀬の上黄霧まよひ、立ちこそ靡けれ。黄の瀬の、瀬の上より、烈しき刀の撃ちが飛び來る。されど亦、空しき刃と化る故、自若として行き過ぎた。

さて行く、神嶽の、岸を超えて、岩が根繞り、下り來る徑。羊腸として眼前に開け來る。徑の傍には、金泉迸り、泉の中には、金杓浮く。徑をたどると、霧の山、六山あり。最先だてるは黒の襲を纒ひ、その背なるは赤の襲を纒ひ、尙背なるは黄の襲を纒ふ人。尙三人の女あり、女を併せて六人の神。

最先だちて來る神、恭しく前に來て云ひけるは斯く——

やや我が弟人!!云ふことあれば克う聞きね。吾々こそは、戰をせんもの等にあらず。禍津日の、疫の神なれ。こゝなる郷は吾等の郷なり。彼のカムイ・オトプシは、身を擧げて戰をのみこれ事とす。吾等ひそかに惑む。故、汝をば是迄戰亂に遠ざけ置くに、如何なれば、世界の廣きに、かくは敢て狹き吾等の郷へ足を容るる。汝を他處へ轉ぜしめんがために、わざと、最前、黒き潭、赤き潭、黄な潭の、潭の上より、我が劍もて汝に擬した。世の庸の人ならば、汝は彼處より引返したであらう。けれども自若として進んで來る。歸つて呉れ。如何なる戰の、戰の害をも、汝が身には及ばぬやうに盡すべし。どうか此處から歸つて來れ。

かく云ひつゝ、身を曲げて會釋をする。少年は、之

に對して小指を向けた。〔註、輕蔑の意の表示〕そして云つたには斯く――

「禍津日神、我を斬らんとならば、いざ斬られやう。斬つて見よ。」

斯く云へど、神達は、ひたすら謝して云ふには斯く

「吾々は戰をせんとするものにあらず。歸つて行け。」

これは少年を愈々腹立たしめた。忽、刀を擧げて三人に飛ばす。けれど固より神達なれば、忽焉姿を匿くして太刀の手上に搔き消える。三人の女は一度に姉なるチワシペッの女に襲つて來、互に相うつ刃物の音。忽ち一度に六人少年の上にかゝつて來る。身を匿し、矢庭に一人の刃の上に飛ぶ。さながら橋を渡る樣。片手は他の一人を擊ち、片手は黃衣の神の髮を掴んだ。大岩小岩へ微塵になれと投げつけて、見ると、全く死んだ其の五體は、魚の皮の如くにあざれた。首神怒りをなして猛烈しく我が上に襲うて來る。死神を楯にとつて防ぎ戰ふ。死神は暫くにして粉々になり、その生靈はその住家なる山の、山の頂へ立登る。同時に黃衣の神の女神も斃れてその生靈は、その身をぬけて登りゆく音す。

今は赤衣の神の髮を捉へて岩壁に擊ち、そを楯として打振り／＼黑衣の神の手元へ進んだ。黑衣の神が斬り下ろす劍は皆赤衣の神を斫る。赤衣の神は遂に寸斷されて生靈は空き骸を土に留めて山巓のすみ家に登り行く音が起つ。今は黑衣の神と刀を交ふ。終に其刃の鋒先に觸れて、黑衣の神は、二つに三つに斫り倒される。生靈は內より音をなして飛び去つた。黑衣の神の女神も、赤衣の神の女神も、盡く斃れて、屍より生靈はなれて遙かにその住家なる高嶺に登る音。

この時、チワシペッの女、側に下りて來た。幸に身は微傷も負はぬ。そこに蝦夷松林の丘繼起伏して廣野に續く、喬木の金森、金森の灌木の、川添ひの森こそ繁これ世に云ふ、ウカムニタイ（繁森）・カニニタイ（金森）てふ二つの名をもつ郷か寔に美しき名。その森風のさ渡る音は、金の響にまがふ。よの常の神々の住む郷にはあらじと思はれた。

歩みを進むると、ふと火臭ひ。怪み乍窺ふと、今焚きつけた許と覺しき篝火が、どん／＼燃上つた處である。焚火の一方には、石の物の具襲ねたる六人、側に六人の女を据ゑて居る。焚火の他の側には、金の物の具襲ねたる六人の首領、側に六人の惡女を据ゑて居る。火の上座には、小山が手と足とを出した樣な異態の巨人。人間てあらうか、膚は癬疥の如く、刀は櫂程ある。顔なるものか、山の地の滑り落ちた赭崖のやう。鼻なるものか、嶮惡き山の根の岩組の峙つさま。見も知りも及ばざる惡形異相の怪物、これこそ、噂に聞いたエトラチ、(吊鼻天狗)といふ魔物に相違ない。暫、見て居ると、あたり怪しき物の響と共に、大地が靜かに震ふけはひ。その間に、美しいエゾ松林の、美しい小枝が摩れ合ふ微けき音。今こそ氣が着け、そこに、側に、思ひも掛けぬ大エゾ松の、松の梢に、死にかゝれる一人の若人、梢たからかに吊られてある。瀕死の人は、仰向けに縛められて、苦しげなる其の面より奇火が走つて居る。けれども何處の人やら知らぬ。知らなんだ。いづくんぞ思ひ圖らん、あゝ、エゾ松の、松の梢に、あがける、若人、これなん、吾が血を分けた兄、勇敢なるカムイオトプシが最期であつたらうとは。大地の搖ゆるゝは、彼が、松の梢に、身をもがく餘勢のひゞきてあつた。

姉なる、チワシベッの女が告げた、

「弟よ、今、おん身に告げんよう聞きね。

この屍を、おん身が手に取り卸し玉はゞ、戰さに障りとなり玉ふべし。いて妾が取り卸して連れて走らば、御身ひとり殘りて、心置きなく此等の惡者と戰ひ玉はむ。」

この時火の側なる、金の物具着けたる六人の首領話しけるは斯く――

「吾等はカネペッ(金川)の住人、六人の縁族と、六人の妹てある。今日、山へ行つて歸つて來ると、カムイオトプシの惡奴、戰をして歸つて行く所に會つた。會つた時に、斬つても、殺しても、よかつたのだが、遠くに居るシピシの叔父に聞かずに殺してはいけぬと思つ

て、大エゾ松に縛りつけて置いたのだ。今丁度、シラ、ペッ(岩川)の六人の首領と、六人の妹とが來合せた。その上、神様だか人様だか知らないが、汝も幸來合せた。いゝ具合だ。美しい此のカムイオトプシを一緒に食はうては無いか?!そして、シピシの人達へも遣つて喜ばさうてはないか。」

火の上座に坐したる人間がことば、喉の奥にて何やらごろ〳〵と鳴るやうな、そして云つたことを人間(アイヌ)のことばに直して云ふならこんなこと云つた。

「おらが國はポンモシリコタン(小・島・村)、おらが名はエツラチ、云んだ。オトプシは、シピシの人へ遣るがいゝ、遣るがいゝ。そして彼等を喜ばそう。」

わが姉。シワシペツの女、この時、松の梢に急ぎ攀ぢて、オトプシが縛めの繩、ふつつり斷つた。一時に居ならぶ惡魔の眼は振り向いた。

少年は早くも姿を消した。爐端に並み居る惡人どもに劇しき太刀を打ち飛ばす。三人の男と三人の妹と、六人同時に斬られてわが刀に斃れた。火の半ばに居た石の物の具着けたる三人も、一度に斬られて又わが刀に斃る。返す太刀、エツラチ、惡魔に飛ばす、けれども手答へ淡く風と掻き消えた。そして驚いて呼んだその言葉は斯く——

「おのれ死んで松の梢に縛り上げられて居ると思つたら、よくもおれの相手を斬り殺したな。我が刀にかけて、殺すにも當らぬ汝、さあ來れシピシびとの大窖穴へ、その谷底に投げ入れて呉れう。

斯う云ひ乍、峯つゞき、刀を飛ばして相撃ち相追うて行く。行く〳〵、わが飛シワシペツの女來る音きこゆ。わが側に來る。そして云ひけるは斯く——

汝が兄、カムイオトプシの、屍を運んで、汝が里、シヌタプカシに赴き、妾は、汝が家に、汝が同胞に會ひ。オトプシを蘇生らせて今戻つた。

かく云ふ語も終らざるに、醜の魔女六人、刄を連ねて女の上に襲ひかゝて來た。勇ましく渡り合ひつゝ、山超え、岑超え、遠く、遠く、戰ひまはる。

少年も、今は六人の男と、エツラチチとの刀を身に

受けた。再、三度、死地に陥り、姿を消して僅かに免れつゝ渡り合ふ。いつしか美しい小河に添うて路が開けた。遠く遙かに委曲して、その水下は、近き端山の根にそゝぎ、その水上は遠き狹山の頂に出づ。川筋は、水の行く／＼神淵、神壑充ちて、まことや世に云ふ戰嵯とはこれ、谷底には岩矛、岩劍植ゑ列ねられ、流るゝは毒の汁。毒氣惡氣屢々身に襲ひ來て胸に浸むに、六人の刀は一齊にこの壑底へ擠し墜さんと攻めて來る。幾度死なんとしたかわからない。こゝに聲を擧げて祈りけるは斯く――

「壑うしはく神々、崖うしはく神々、吾が申さく靜かに聞こし給へ。吾が味方は唯吾ひとり、吾を死なすとも、吾がひとりの血の酒は、以て神々を飽かしむに足らじ。吾が後ろに行け、彼等數多の異人、その血の酒は飲むとも盡きじ」

かく祈り、滿身の力を振って、彼等を谷へと擠し揉んだ。石の物の具着けたる最年長の首領が、まづ眞倒に谷底墜ちて、身は岩根岩角に打碎け、さながら青栞の如くに飛び散つた。生靈は音をたてゝ屍を離れて行く。次に金の物の具着けたる年長の首領を擠し込んだ。亦谷底の岩角に微塵に碎ける。かくて、一人を墜とし、二人を墜し遂に盡く谷底へ推し落して今は六人の生靈皆身をはなれた。こゝに、エッラチ、、ボンモシリ人一人となる。エッラチ、の擊つ太刀は、したゝかに二度、三度わが急處をうつた。わが飛ばす劇しき太刀は殆んど彼を傷け兼ぬる。姿を消して手元に失せて了ふ故。惡戰苦戰やゝ暫、巨魔は、物の具、劍、かなぐりすて、大きな聲で叫んで云つた、そは斯く――

「さあ、來い兄貴、一つことは止にしろ、面白い別な勝負をやらう！」

かく云ひ乍、飛びこんで來た。こちらも刀を收めてがらりと投げた。劣らじと飛びついて組み摶つ。エッラチ、の大きな手が、鷲掴みに握んで息もほと／＼に絞め込んだ。スルリと水の如く脇を拔けて、山の巔に又ガッシと組む。倒に毒水の淵に傾きかゝつて、えいえいと擠しあひせられて、可愛相に深い谷間に落ちこけ

んとする一刹那、一しきり、吹き上る谷間の風に、からく堪へて逆まに山の如き巨魔を哄と許りに投げなどす。巨魔、骸の岩根の、岩の劍の尖に、身は碎肉の如く打碎け、靈は、おそろしき響を成して空に立ち騰つて行つた。ほつと一息いこひて考へた。

今戰半ばにしてこのまゝに、シピシ人なるものを、よくも見窮めずに我が故郷へ歸らば、定めて卑怯な奴と下げすまるゝであらう。

かく考へつゝ、さゞれ川、川並み下る。下りゆくと、我が護神いたく呼ぶ音す。こゝに云ひけるは斯く——

「我が神、靜かにあらせ玉へ。我は必ずシピシ人の住む處を見窮めて歸らん。よしや運拙く、其處に殺さるゝとも厭はじ。我は我が力を其處にためさんのみ。」

かく云へば、我が護神靜まりて遠き端山へ赴く音聞ゆ。こゝに氣が全く和いだ。

雲霽れて光風目もはゆきばかり、神風の風の前に乘りて起つ。

下り行けば、今こそ、磯の、浪の音、近く、近く、美し小川、海べに注ぐ河口へ降る。沿岸は、數多の村落に塞がれて居る。數多の村落が立つる竈の煙は、登りて霧の如くに村の空をたなびいて居る。村の眞中には神さびたる一峯の嶽が聳ゆる。石の小徑がその巓まで通つて、巓には大いなる古城が立つ。その城の古千木は、黑雲の空の堺を凌ぎ、新千木は、白雲の空の堺を犯す。城の巓には、城主の護神、雲の上に鎭り坐して、打震ひ、打震ふ音、城の上に長鳴りす。

こゝに、城のほとりに步を進む。大城の、城の戶までも步み寄る。見ると、音に聞くシピシ人は、實にも大きいが、皆美しい。薄鬚であごの處にごく疎らである。衣帶、佩劍、皆異樣な風をして、火の側に坐し居る。端には又、若い女も居た。今迄、世に姉なるワシペツの女にあらで、かゝる美しい女が又あらうとは思はなかつた。今此處に見る若い乙女の美しさは、實に心を驚かす。加之、其の風丰は、よく神占に長ずる女子の相を具へて居る。〔註、アイヌは、卜占は女がする。一國の首長と崇めらるゝ勇敢なる男子の配とし

ては、美貌にして且最卜占に長ずる女を侚ぶ。」

城の主は、何事か仔細ありげに面垂(うなだ)れて居る。

暫して、眉目をあげて話を始む。立聞きをすると、斯う云て居る。

「わが妹よ、汝は幼い時より神占に長じて居る。今、吾が爲に一つ占て見ては呉れまいか。我が家の護神の、啻ならぬこの音は、抑々何事の前兆であらう。どうか一つ、占て知らして呉れ。

茲に、美しい少女は、占ひの布を頭に纒ひ、占ひの木を手に執り行ひ、歌を以って、その占を宣べて云ひけるは、斯く——

にわかに　我が里川の
川なみの　いそゝる岩根
岩根の上に　まがつびの戰ひ
すさび　金川(カチペツ)ひど
岩川(シラペツ)びと　エラッチチ
ひと時に　拔き放つ大太刀
本土人(ヤウンクル)が　佩く太刀と
交りみだれ　戰(よそ)ぎ揺(ゆ)らひ
こゝに　飛火なす打つ太刀に
血煙たちて　掻き消えぬ
さては　かなたに
日のぼる方　ひと時に
交りみだれ　戰ぎ揺らひ
さては　何とかも
島びとの太刀　ひと時に
鍔元より　打ちくだけ
日の入る方　掻き消えぬ
碧落一空(ウーラフナイ)　本土人(ヤウンクル)が太刀
日のぼる方に　輝き充ち
なからは　わが里川の
川並たどり　小靈鳥(ケツラフ)
天の原　翔り來
らしも　なからは
斯く躍(り)跳(よ)もの　吾未見ず
かれ、心して　占ひ吾がせば

小靈鳥は　雨のしづくと
身をなして　地の隊のまを
進み寄るかも　さては
見よ　またいみじう
小靈鳥と　身をなして
わが里川の　川並みたどる
にわかに　わが鄕
まがつびの戰ひ　すさび
東の間に　諸びとの里
荒金の土と　荒れはて
かくて　本土人が佩く太刀
我が背子の　大太刀と
まじり亂れ　そよぎ搖らひ
血けぶりたちて　搔き消ゆる
こゝに　黄塵一洗
碧落一空　日おつる方に
まじはり亂れ　そよぎ搖らひ
さては　おそろしや

すさまじ音し　わが背子が
大太刀は　鍔元より
打ち挫け　血けぶりたちて
搔き消ゆる　本土人が太刀は
日の入る方に　輝き充つ
らし
あゝ今　わが目眩み
得見ずなりぬ　禍占と
わがせし占は　なりにけらしあはれ

かく歌ひ畢る。こゝに城の主、大に怒りて曰ひけるは
斯く——

かず〲も吾が妹、曲言云ひて吾を嘲るかな。吾は、神との戰をこそはせめ。人のやからと爭ひいさかふものにはあらず。島人の惡罵どもが、少本土人と戰ひ死せしとは聞けど、吾は素より溫厚の君子、溫言を以て人を迎ふれど未だ曾て人と爭はず、神卜と汝は稱すれども、これ必竟、汝惡妹が作りごとならんのみ。」
かく云へば少き女子の頰に淚流れぬ。さて曰ひける

は斯く――
かずかずも吾が背子、宣ひ嘲り給ふかな、何しに妾は、詐りごとすとわが背は思し、さはのたまふぞ。
この時、窓の戶抑して、風の如くに少年は家の中へやをら入る。梁の上へ上つて、重々しき響きもて、その上を蹈みならし、搖ぶつて見る。
城の主、驚いて、と見、かう見、振り返り眺めわたす。少女は、身じろぎもせず、ぢつとして靜まり返つて居る。彼は、やをら梁より火の上座へ下りた。
矢庭に城の主の髮を掴んで、さて云ひけるはかく――
「シピシ人、いしくも汝豪語するかな。今一度繰り返し見よわが聞く前に。如何なれば罪なきカムイ・オトプシを松の梢に縛らした。其の讎討に吾、金川びと、岩川びと、小島のエッラチチを我が刃にかけた。今こそシピシびとの強さを試見んが爲こゝに來た。今さら温言には乘らじ、汝等が强さを試さんまて、死すとも歸らじ、いざ來れ。」

默って居る故、女を搔きさらつて神窓を超えんとする。女は泣き叫ぶ
「詐占すと、吾が背子宣ふ。詐占と、尙宣ふや。その國人、その村びとの、奴婢に妾連れいなれんとす、はや助け玉ひね。」
城の主、終に刀を打ち飛ばして起つ。窓を超えんとする中に、十太刀廿太刀、斬り下す雨霰、窓超え煩ふて引返せば、飛び來る太刀は、新らたに十太刀、廿太刀。少年は飛鳥の如くに屋根裏をとび廻り避け廻る。
怒れる城主は滿面朱を濺きて叫びけるは斯く――
「わが惡妹よ、汝が凶占故にかゝる凶事こそ起れ。われ先づ我が惡妹より屠らむ。」
云ひつゝ二人に太刀打ち飛ばす。少年は若き女を楯にかざして立つ。されど撃ち止めねば、女は恐れに戰いて若人の手に堅く取り附く、若人の腕の下に、又腕の上に、逃れまどひては若人の腕にしっかと抱き縋る。
女は、若人へ、聲もやさしく、

「君が來ますは妾知れり、ふつゝか乍らみ力副へまつらむ下ろして賜び玉ひね。」

女を下すと、爐端に倒れ、さて起き直り、匕首を振つて城主に立ち向ひ云ひけるは斯く――

「わが惡しき背子、露わが占を信ぜず、剩へわれを殺さんとし玉ふ。さらば君が力の限りもて斬り玉へ殺し玉へ。いざ。」

云ひつゝ刃を打ち飛ばす。此の時諸人、物の具かためて外戸に寄せ來、押合ひ、へし合ひ集ふ。今は二人となり數多を相手に戰ふ。雲霞の群は爐ばたに相踏み合ふ。諸人の護りの神と吾が護りの神とが爭、其の叫び城の巓に立ち登る。神風の大風戸の間、窓の間を吹き上げて、折しも散る火の焔に神風あふり立ち、見る間に城は燃え上りて人々戸外に出る。槍もつ群、太刀もつ群、擠し合ひ踏み合ふ。

その時見ると、遠丘の、丘の巓、大いなる一むらの雲起り、矢の飛ぶ如く舞ひ來り、眞の神の音轟きて、飛び來る方我が打見れば、カムイ・オトプシ我が兄。劍もて遙かに會釋す、此方も太刀もて會釋し返す。オトプシが進む所、敵は、道を開いて去る故に、女もよく戰ひ我もよく戰へど、二人は唯オトプシが陰影たる丈に過ぎぬ。この時シピシ人叫んで云ひけるは、邪なる惡少女よ、亡命人の子が側に馳せて歸す、そは汝が村人へむけての汝のつとめか。剩へ手づから刃を村人に向く。この戰果てなば神の天罰おのづから酬ひ來べきを知らずや、斯く云へば少女は泣きまろび、若人に云ひけるは斯く――

我が、神なる猛者の君よ、妾云ふことあり聞いてたび給ひね、君が姉、シワシベツの女、戰さに村々超えて今、雫澤におはす。今は荒ぶる神の村に居れば、斬り裂かれ斬りさいなまれて、若し遲れなば君再び姉を見る由なからむ。此處の戰はカムイ・オトプシ、一人に任せて、いて行きて援ひ玉はむや

かく云ひつゝ女は空にたつ。續いて其の背に若人もたつ。行き行くに、女の足の早うして一射程ほど相はなる。女云ひけるは斯く――

強き益荒男の壯にいませど、長途の旅に君は勞れ給ふや、急ぎ給へ、疾く、疾く。追ひつきて、又一射程ほどこなたが追ひ越しつゝ、かくて相ゆくほどに、世に云ふ雫澤(チリンナイ)村、美し郷。されど、嶽の巓に惡魔の霧が立ちまよひ、のみならず、遠く、遙かに、數多の神々の死ぬ音ひゞく。中に我が姉チワシベッの女の護りの神の、臨死の叫び山々谷々越えて傳はり來。歩を早めて行き着くと、かの姫、あはれチワシベッの女、衣類も無しに僅かに胸の打蔽ふ丈、五體斬り傷られて背骨のみ高う、今や再び太刀擧げて斬りさいなまる。つと寄れば、「女は涙を流して息も絶え〴〵。こは、わが子か、わが育てし神なる童か、云ふ事あり、克う聞いてたべ。妾はえう無き女子なれば、妾が死ぬとも里に歎がん人もなく、國に悼まん人もなし。たゞおん身無かりせば國のこと〴〵荒れ果てん。あはれ妾が死出の名殘りに雄々しう立ち働いてこれ等の敵を掻き散らし、追ひ拂つてたべ。」

かれシビシの女諸共、群る敵を斬り拂ひ斬りまくり、見返れば足の踏處もなき屍の原。此處に打倒れたる姉をいたはり起し、抱きかゝへ、天の涯打仰ぎて禱を擧げて曰ひけるは斯く——

わが父の、御神よ、チワシベッの女、吾が育ての親を、惡人の子にはあれ、みゆるしあらせ給へ

斯く呼びつゝ天に祈れば、わが手より、新らたなる神と成り、生きたる神となり、本土の國の、國の涯指して上天す。こゝに、シビシの女と力を戮せて斬り拂ひ斬り盡し、今は雫澤(チリンナイ)の郷を荒土の土と荒し果てぬ。この時シビシの女面てに涙を流して云ひけるは——

「雫澤(チリンナイ)の民、今は人間の主といふもの亡し。されど、雫澤村の、村の地の西の涯、朦雨の魔神、雲霧の魔神、其の妹と共に國を建つ。其の外、クルイセ鳥の魔共、數多、雫澤村の村の地の西の涯に村を建つ。若しクルイセが戰を起さば吾等の生死測るべからず。クルイセ果つとも朦雨の惡魔、雲霧の惡魔尙戰を構へむ。妾は女子なれば、惡魔の妹と戰はむ、醜の占女なれど、妾むかへてことむけむ。君若し魔神を引受けて手綏うし

王はゝ、妾は君が眼前に斬り殺されむ。そは、君が名を増しはせざるべし〔美名を損ぜんと也〕
斯く云ふ中に、雫澤(ヤリンナイ)の地の西の涯に雲霧起ちぬ。たちまち其の霧二人が頭上を包み來てさながら江頭の州に立ちたるけはひ。こゝに鳥なるものか身の圍りに無數に飛び交ふ。わが皮膚斬らるゝ如く覺ゆ。どこが晝やら、どこが夜やら、けじめも分かずに過ごす、黒霧の霧の中にもがきつゝ。今我が襲も唯、襟と袖とを殘すのみ。刀打揮ひて防ぐ間に、身は弱り勞れてあやめも分かず。いつか黒霧漸く天の涯より霽れ來つて始めて日影を仰ぐ。如何なる形のものと格鬪せしやも自ら覺えず。たゞ其處に、シピシの女あり、我が腹部に息吹きかける。その度毎にわが痛手淺手傷口を閉ぢて癒えて行く。〔少女が息もて、英雄の死地を援ふといふ、此處は樺太アイヌの古謠にも全くこの通りにある〕シピシの女は、尙自らの腹にも息吹きかく。その度毎に女の痛手淺手が閉ぢて行く。我が着たる襲は、元のものを嬰兒の襲のやうに成す〔今着て居る襲は甚立派てもとのものを之に比較すると、それは嬰兒のものゝやうにある程劣る義〕
折しも再び、雫澤(ヤリンナイ)村の、村の地の西、朦雨の霧、雲霧の霧が立ちこめる。國土の上、海原の上、立ち擴り、立ち蔽ふ。その中に、人の如き形凝る。其の膚癬疥の如く、其の顏土地の滑り落ちた赭涯のやう。小山が手足を出したる姿、佩く太刀は檣の大さ。背の上には山の毛物海の毛物の皮織り成したる革の鎧を着けて、女が其處に寄り添うて居る。女は大いなる刀を拔いてシピシの女に飛ばして來る。男は大いなる刀を飛ばして少年に擊つて來る。忽ち姿を替へて烈しき刀の打ちを飛ばしてやる。けれど刀は少しも透らぬ。こゝに鎧の縫目を目掛けて斬り下ろす。鎧は斷れた。人と思ひきや海を掩うて立ち擴り、その中より驚くべき物現はれ出づ。大いなる人かと思へばさは無くて、小さき世にも美しい人、美しい襲を重ね美しい太刀佩いて立ちあらはれて云ひけるは斯く――
「不思議や少本土人(ポイヤウンペ)！人間わざもて汝はよくも、神さ

へ断ちあへぬ我が鎧を斷った。汝既に鎧を破る。吾は鎧無しに汝と闘はむ。」

かく云ひつゝ刀を舞はして襲ひ來り、烈しき打ちを打ち飛ばす。「妾を消して忽ち烈しき打ちを相酬ゆ。神の助けに終に我が斬る音我が太刀の間に起る。小さき人は粉々に海上へ飛ぶ。生靈は音を成して起つ。遙か彼方にシビシの女、雲霧の魔女と相戰ふ。赴き援けて革の鎧の縫目を斷つ。「鎧は海を掩うて中より小さき世にも美しい女、驚いてその女呼びけるは斯く――

「人なる身もて、少本土人、神さへ斷ちえぬ鎧を斷つた。神は鎧無しには柔し。來れシビシの女、力の限り。さなくば汝が屠られむ

かく云へば、シビシの女云ひけるは斯く――

數々この惡女の云ふことの可笑しさよ

かく答へつゝ雲霧の魔女を斬る。生靈大いなる音して起つ。生神となりて東の方に行く音用ゆ。

こゝに、シビシの女、若き女、云ひけるは斯く――

あはれ、惡人の子に妾はあれば、今は何卒君が御手もて、みてづから妾を殺して賜び給ひね。妾は、かくてこゝに生き永らへんよりは、それは幸ひなり。

さらずば君よ、み惠賜び給ひて、君が郷へ妾を執り給へ。妾は克うかしづき仕へ侍らむ。

かくて、少年英雄は美しき少女を得た。少女の勸めによつて一先づ征戰を終結して、手を執つて神風に送られつゝ、始めて故國、シヌ・タプカシへ、二つの島を超えて凱旋す。古父王の宏壯なる古城に一度心を驚かし、チワシペッの女、並びに、兄のカムイ・オトプシの歸り居て、城の礎に迎へ立つに再び驚き感泣し、かくて、村人のかしづく所となり、カムイ・オトプシハ、チワシペッの女と、少年英雄はシビシの少女と契つて、茲にこの峽中記一段の英雄譚は曲を終ふ。

・附記　古謠の曲は尙幾十種あるか解らない、こゝにその一つの梗概を譯述するに當つて、最初自分が手取て採錄したものを撰んだが、尙一二箇處怪しい處があるので、バチエラー先生のテキストに準據した茲に遙かに先生の恩惠を謝す。

必要なる性慾文學

戸川秋骨

我が文壇に肉情文學の是非の切りに論ぜられる今日、不思議な事には英吉利にも同じ議論が行なはれて居るらしい。雑誌ブックマンは書を寄せて肉情文學に對する諸大家の意見なるものを尋ねて居る。其答書を見るとさすがに英吉利の事であるから異口同音に之を排斥し攻撃して居る。余は今の英吉利に於ける第一流の文士て如何なる人が此種の文學の代表となつて居るかしらぬ。故人て云へばオスカーワイルドの如きはそれてあるかも知れぬとは聞いて居るが、今日の處て何人がそれてあるかは余の知らぬ處てある。實は余の淺學寡聞かは知らぬが、現英第一流の作者には左様なものはないかと思ふ。若しそれ第二流第三流以下の作物に其傾向が著しいとすれば、それは何處にも往々ある事て、際立てゝ肉情文學などゝ云ふべき價値のない物てあらうと思ふ。

所謂俗惡の文學に性慾肉情の文字のあるのは、之れは全く道德上から見て論ずべきてあつて、文藝の上からは一顧の價のない事てあるから異口同音にこれを排斥し攻撃するのは至極その當を得た物てあらう。然るに第一流の文學若しくは性慾的の主張を以て書かれて居る作物に於ける肉情的文學に付ては大に考へなければならぬ處がある。それては現在の我が肉情文學は果して如何なる物てあるか、發賣禁止になつた生田氏の作品などは、果して禁止すべき物てあるか、又禁止すべきものとした處て、それが文學上の價のないものであらうか、その邊は深く考へなければなるまいと思ふ。余は今此處に禁止の可否又は肉情文學の如何を論んぜんと欲するものてはない。かゝる文學の代表者とも云はれるモーパッサンの作の一篇に付いて思つてた事を一寸述べて見やうと思ふのてある。

凡そ肉慾の事を書いたものの内で、余は又モーパッサンのもの程猛しいのを見た事はない。又その烈しいモーパッサンの作の内で「女の一生（ユーヌ、ヴィ）」程思切つてそれを

寫したものはないと思ふ。單に抽象的に肉情を寫したものは怪しからぬ、それは不都合である不道德であると云ふ考へからいへば、「女の一生(ユーヌヴィ)」は即ち不都合極るものである。然るに之を道德宗敎の本尊であるトルストイが口を極はめて賞めて居る。之にはなにか仔細がなくてはならぬと考へられる。トルストイ翁は著者の同情が全く善良なる女主人公の身に向けられてあるからこの作が良いのであるといつて居る。それは如何にもそうであらう。併しながらその內に寫されてある春畫も及びかねる一條の光景は之を何と辯解するのであらうか、ト翁の言は此大事な處に多く說き及んでないやうである。

「女の一生(ユーヌ、ヴィ)」を讀だ人は承知して居るであらう、此書の主人公なる婦人が結婚したその夜の有樣及び結婚後の旅行中に於けるある一場の光景の如きは道德主義からいへば實に醜文學と云はなければならぬ。立派な春畫と言いたいが或は春畫よりも甚だしいかも知れぬ。併しながら此一場の醜文字は必要があつて其處にあるのである。此著者のある作に至つては婦人の醜惡を書くに態々筆を弄したかと思はれる程の處もあるが、余の考によれば此書に寫つされたるその醜文字は實にその必要があつて出されたるものである。全體女主人公の人物が全然精神的であるに對して、その配者たる男の性格が凡ての點に於て物質的肉體的である。此對照が全篇によく現はされ、此對照が結局女主人公の一生を覆す因緣となり悲劇の原となるのである。即ちこれから男はだん／＼に女主人公の家政の全權を掌握し、財產を橫奪する迄に至る。併し此物質的傾向を最も明らかに現はす處は其夫婦間の關係にある。即ち女主人公の愛情が全然精神的であるに反して男の愛情は肉慾的である。女主人公が人世に棹し出でた其第一日即ち結婚の夜に於て此對照が現はれたのである。女と男との考へ若しくは性格が著じるしく相違して居る事を云ふには是非とも此結婚の夜の一場がなければならぬ。その日迄精神的に愛情を考へて居た女は男の態度の全く肉慾的なのに驚いて呆れてしまつた。之が女の一生

女の一生の悲劇の始めてある。此醜文字がなければ決して男の心と女の心との相違が示されない。随がつて之が全篇の大局に關係する大事な事になるのである。若し之を單に抽象的に書いてその醜態を明らかに書かなかつたとすれば、話は理に落ちてしまつて小說にはならぬ。即ち此醜文字は一篇の大事な鎖鑰になるのて、著者は決して單に醜文字を弄して居るのとは云へぬのである。醜文字が人生の一側面を現はすに緊要なものであるとすれば之は是非なくてならぬものである。モーパッサンの思ふ通りに女の一生を現はすには是非此一條はなくてならぬ處である。此意味に於て萬一それが道德に差閊かへを起しても致方がないてあらう。之は忍ばなければならぬ處である。實際此小說はかの一條があつてもそれ程醜惡の感を讀者に起させぬ。これは泥中から出た蓮の花の例のやうに、此の醜惡の光景が何かのために美化するからてあらう。單に一篇の大體に於て醜惡の感の起らぬのみか、かの條下をのみ取り離して考へても、それほど惡い感は起らぬのてある。此は大に注意すべき處てはあるまいか。

余は前に此醜惡の一條を以て必要なる個處となし、必要故に惡感が起らぬと言つた。それは素よりさうてあるが、さらに精しく言へば、必要といふ事が實は醜惡そのものを寫すといふのてなく、著者がさらに大事なものを寫さう顯はさうといふ事を示す理由なのてある。かう考へて見ると、醜惡も醜惡として夫を出すのてなく、他に何物かを顯はす場合には立派な文字になるのてあると言ひ得るてあらう。かく言ふと、極端なる一方の說者からは軟弱な議論、道德論として嘲られ、また他の固牢な道德論者からは、怪しからぬ意見として攻擊されるかも知れぬ。併しながら單に醜そのものを書いたのであれば、それは挑發的てある處が春畫と異るのみて、結局大した違ゐはないのてある。余の考へる處に依れば、如何しても醜惡を書くには何かこを書く所以がなくてはならぬと思ふ。その理由を說明するものは則ち實にこのモオパッサンの「女の一生(ユーヌ、ヴィ)」が極めて適例であると思ふ。さらに言へば醜ばかりで

はない、何を書くにした處で、その表面の事實よりさらに深いか高いか、兎に角何者か大きなものを見せるといふ考がなくてはならぬものであらう。余はかゝる考を以て現代の肉情文學を見たいと思ふ。またた世間がこれを以てその可否の標準とする事を願ふのである。

戸川氏の此文中にあるモーパッサンの「女の一生(ユーヌ、ヴィ)」といふ小説は"A woman's life,"といふ題にて英譯せられて丸善及び中西屋等にあり價は僅か五十錢也。

（編者しるす）



代議士と總選擧問題

代議士の腐敗、無氣力、無能、無學の譏は、今や殆んど天下の輿論なりと云ふも、毫も不可なきが如し。渠等の能力威信が日々に官僚の徒、學者、商工民、技藝家等の進歩に比して、恰も逆反例を成して減退しつゝあるは、遺憾ながら今日爭ひ難き事實なりと云はざるべからず。

●●●萬朝報の記者は『逐年沈淪に就く』と題し、代議政體の沈淪を慨して、左の如く言へり。

憲政創始以來茲に二十年之を個人として見れば誠に山縣公の言へるごとく恰かも丁年に達す凡べての機能略ぼ備はるべき頃なるに、我が憲政の本義は年を逐うて

沈淪に就く、其の現狀を目擊するもの、孰れも慷慨の念なきを得ざるべし

と、吾人も亦此感なきを得ざるなり。憲政の沈淪、想ふに其の因、多かる可しと雖も、その最も甚しきものは代議士の敗德なりとす可し。就中請託收賄の惡業を敢てして、恬として愧づる事なき渠等の沒見識沒良心は、獨り我が憲政の名器を弄して、詐僞賭博の賽にも類したる惡翫弄物たらしむるの公罪を敢てするのみならず、下、上に傚ふ社會の風教上、眞に寒心に堪えざるものの有るなり。

大阪朝日新聞は代議士腐敗の現狀を敘べ、國民の愛國心に訴へて、惡德議員の排斥を計らんとし、「總選擧準備」なる題下に論じて

前議會に於て刑法改正案の議事進行中、藤崎某が「本員は收賄嫌疑の調査委員會に附せられたるも、現に此の議場に列する代議士中百六十餘名の收賄者あるを知れり、先づ此の議員等を取調べて議會を淸め、然る後に刑法案を議す可し、自ら賄賂を收めたる不法者は、決して刑法を議するの資格無きものなり云々」と放言せる、言稍矯激に類するも、現代議士中三分二以上の收賄者あることは、何人も之を首肯せざるもの無し、斯る徒輩をして再び議會の神聖を汚さしめんことは、選擧區民の德義として否權利として斷然之を避けざる可からず、且や改選期毎に能ふ丈新知識新人材を選出して、淸新なる生氣を議會に注入すると同時に、絕えず腐敗分子と老朽代議士の排斥に努む可きは、四年目毎に改選を擧行しつゝある、法の精神とも云ふ可きものなるに於てをや。

と云へり。今日代議士の腐敗を云々するは恰かも前日も日は東より出てゝ西に沈みたりと云ふが如く、事餘りに明白に過ぎたれば、吾人此處に多くを言ふの愚を爲さざるべし、吾人は次に、不義の黃白に男子の節を賣り、選擧區民の信賴を賣りつゝある渠等が又當然の結果として、自黨の爲めに、若くは自家の私益の爲めに、滔々として御味方黨となる、御用議員たらんことを望みて、只管焦慮腐心しつゝあるの無氣力意識を指摘せんと欲す。

大阪每日紙は『在野黨の絕滅』と題して、近時の政黨が汲々乎として、官僚政府との苟合默契を之れ計りつゝあるの陋を論じて曰く

政友會か消極的政見を捨てゝ爾來政府の後援を以て任ずるは復これをいふの要なし、大同俱樂部も亦その系統に於て、成立の事情において時の政府と絕つを欲せざる一の醜聞たるを示す、その積極方針を標して陸海軍に媚ぶる、亦說くを須ゐず、一箇消極主義の大政黨を目せられたる憲政本黨が、亦多年の逆境に堪へずして其方針を一近來積極政策に謳歌するに至りたるは驚くべき變化といふべく、シも本黨が此の如く變化したるが爲に逆境を脫するの手段とならず、內訌百端、いよ／＼逆境に沈淪し行くは甚だ憫笑に堪へざるも、事實においては政黨は總べて政府の政策に同意し、陸海軍費の偏重なる支出

を協賛したる者のみとなり、今や政府に對して、公々然として、威嚴ある、疚しからざる態度を以て其計畫の過誤を正すの資格あるもの一も之なきに至りしなり、露國議會の政府黨の多きよりも我政府黨に多しといふべきなり、

其非政府黨たるを標榜するは些々たる問題においてするのみ、

と、吾人必しも事毎に當局政府と反目し衝突したる往年の所謂民黨時代に謳歌する者にあらずと雖も、抑々近年當局者の採る處、自黨若くは自家の利益を離れて、爭ふべきの問題無かりしとする歟、吾人頗る疑なきを得ざるなり。

次に、猶批難すべきは、代議士が近來國家の重大問題に對する辯論討議の著しく熱心を缺ける事なりとす。時事紙が『衆議院の紛擾』と題して

十四日衆議院に於ける豫算案の議事に就ては政府黨と反對派と豫め交渉の上演說者の數を定め成る可く之を省略せざることを約束したるを以ていよ〳〵開議の場合には各派順次に演說者を出し交も〳〵贊否の意見を吐露して殆ど遺憾なき模様なりしに最後の反對派議員の演說に至りて政友派議員は一齊に案を打ち床を踏鳴らして非常の妨碍を加へたるより續いて登壇したる大藏大臣の演說には反對派より復讐の妨碍を爲し遂に演說を中止せしめたるより反對派議員と議長との間に爭を生じ結局議長の陳謝に依りて僅に議事を繼續するを得たるは衆議院に於ける近來の椿事と云ふ可し議員が種々の手段を以て互に反對派の演說を妨碍するは從來珍らしからざることにして外國の議會にも類似の例なきに非ず一概に之を禁止するは到底不可能なれども今度の出來事の如きは餘りに極端に走りたるものにして何人も苦々しく思ふ所なる可し抑々議會は一國の大討論場にして其場に上りたる問題を論難研究して遺憾なきを期する所なれば議會に於て最も大切なるは議員の言論を尊重するの一事なるに我議會の風として兎角演說に重きを置かず重要なる問題も有力なる議員の演說を聞かざる中に匆々議決せらるゝ場合なきに非ざるは奇態なる習慣と云はざるを得ず蓋し議員の大多數はおの〳〵所屬の黨派を有し各黨派の頭數如何に由りて議會に於ける問題の運命も豫め決定せらるゝことなれば其場に臨みて如何なる大演說を試みるも既定の運命を飜へすの望ある可からず此點より見れば議會に於ける演說は實際に無益の勢なるに似たれば之に重きを置かざるも強ち其道理なきに非ざれども既に、論難研究を以て議員の職分とする以上は之を怠るは即ち其職務を曠ふするものと云はざるを得ず況や議會に於ける演說は必らずしも同僚の議員のみを相手とするに非ずして一般國民に對し間接に自己の所信を主張するものなるに於てをや假令ひ其演說に直接の効果なしとするも之が爲めに議會内の演說を輕視する如き以ての外の次第と云はざるを得ず

と譴責したるは、蓋し至當の言と云はざるべからず。

抑々斯くの如く無氣力無能力なる惡議員の徒をして臆面もなく、白晝首都の中央に跳梁を縱にせしむるの文明上の大奇蹟を現出するに到らしめたるものは何ぞや、之も亦其の原因尠からざるべしと雖も、就中今日代議士選擧の實狀が餘りに馬鹿々々しく、餘りに俗惡に流れて、緣故情實と不法なる運動費との外、殆んど當選

を期すべき有効の武器なき有様と成れるの一事は、想ふに高材逸足の士をして、愈々選擧場裏を遠からしむるに到らしめたる重なる原因の一なるべしと信ず。今試に浴々たる今日の代議士が如何なる方法に據りて總選擧運動なるものを擧行しつゝあるかを觀んに、大阪朝日は『總選擧準備』に、詳しく其の實狀を叙べて、左の如く言へり。

中には受動披露に藉口し、重なる選擧區民及び運動者を請待して盛宴を張れるものあり、受動披露の爲なりや次期總選擧準備の爲なるやは問はずして明かなる可し、或は十數年來全く交際を絕ち居たる遠緣のもの迄も、其れより其れと歷訪し、無沙汰見舞とか墓參とか稱して、反物又は菓子折を配りつゝある者あり、選擧區民に對し阿諛諂佞到らざる無く爲さゞる無きの陋態は、眞に吾人をして其面に唾せしめんとす、斯る徒輩に限り一旦選擧されて議場に上るや、選擧區民の休戚と國政の汚隆と兩ながら之を度外し、私利私慾を是れ事とし是れ營まんとするものなり、彼等は選擧の爲に消糜せる運動費を以て、一種の投資と同樣に心得つゝあるなり、數千金を投じて代議士となりたるは、更に之を倍加して回收し得るの望あるが爲なり、或は代議士てふ肩書を看板として官府との黨緣を作り、何かな一儲けせんとするものなり

其の地方に在るや巧に地方問題を擔ぎ廻りて、成功と否とに拘らず、周旋到らざる無きの狀を裝ひ、蒙昧なる地方人士を胡麻化し去らんとす、地方に於て比較的聲望あり地盤堅固なりと稱せらるゝ現代議士の多くは概ね此の種の人物なり。東京或は他地方に在りて選擧區に歸來するを屢ならず、隨つて選擧區民と相逢ふ稀少なるものは、目して以て地方問題に冷淡なりとし、動もすれば之を排斥し去らんとす、犬養毅氏の如き河野廣中氏の如きを以てして、猶且此の害あるを免れず、其の如何に中央政界に重を爲し、如何に國事に盡瘁しつゝあるやは、不幸にして瞶々たる彼れ選擧區民の諒とする所とならず、慨す可きの至ならずや。

玆處に代議士候補たらんとするものあり、之が運動者たり友朋たるもの、先づ問ふに幾何の運動費を準備し居るやを以てす、其の閱歷と學識と人格等の如何に至りては、殆ど始めより問題と爲し居らざるなり、於是乎高明の士は自から其足を裹みて代議士候補たるを肯ぜず、群小をして獨り選擧場裡に翺翔するに一任す、彼等は此の如くにして惡政府の[illegible]となり、國政は此くの如くにして年一年敗壞し去らんとす。

吾人は言はんとす、今日の如き代議政體は寧ろ之無きの勝れるに如かずと、「代議政體の名の下に桀を助けて暴を爲すものは今日の衆議院議員なり、平民政治の味方たらざる可からざる彼等は、國民の選擇に據り公々然大手を揮りて藩閥內閣の爪牙となりつゝあるなり」と、頗る肯綮に當れるの言と云ふ可し。抑々又斯くの如く醜陋を極はめ、俗惡を極はめたる渠等の選擧運動をして唯一の有効武器たらむるは何ぞ。言ふまでも無く選擧區民の蒙昧之れなり。一個の菓子折、一枚の風呂敷に渠等の愛國心を賣り、渠等の參政權を賣り、恬として恥ぢざる醜穢なる國民の心事之れなり。朝日は更らに同論下に極言して曰く、

今日の選擧區民は未だ代議政體の眞價を知らず、代議政體の眞意義を解せざるものなり、劍を學ばざるものが正宗の名刀を手にし護身の用

に供せんと欲して却て自ら傷けつゝあるものなり。今日の如くにして推移し行かんには、我が國の代議政體は專制政府の其れよりも有がたからぬものとなる可し。賢き君主と宰相とを戴きたる專制政府は、愚かなる代議士と不健全なる政黨とを有する代議政體よりも、確に國民の利益なる可ければなり（中略）

畢竟するに國民の政治思想幼稚にして、自己の代表者として一流の人材を選擧せず、群小をして國政の參與を私せしむるの罪に歸す可きものなり。政治の改善を期せんと欲せば先賢良なる代議士を選出せざる可からず、群良なる代議士を選出すると否とは選擧區民の意思如何に依りて決せらる、選擧區民たる者自ら三省する所無くして可ならんや。」

と、然り選擧區民の反省を促す外、今日の處他に良法なきなり。さても旅順奉天の難戰に、己が愛兒を喪ひ己が愛弟を亡ひ、猶之れ陛下に忠に、一死以て國難に殉し得たる所以、寧ろ祖家の名譽とすべしとまで云へりし我が國民の愛國心は、苟くも今日陛下の手より授けられたる一國の參政權を行使するに當りて、僅に一個の菓子箱一枚のハンカチーフに貴重なる權利を賣るべしとなすか、斯の如きは吾人の容易に信ずるを欲せざる處なりとす。やまと新聞は『總選擧前の議會』と題して總選擧に對する國民の覺悟を論じて

然れども代議政體の國民は、宜しく代議政體の國民として、毫も他に批難せられざるだけの行爲と識見なかるべからず、彼の徒らに感情の奴隷となり、或は黄白に左右せられて、其說を二三にし、乃至自己の意にあらざるものを投票し、若くは投票せしめんとするが如きは、斷じてこれを排斥せざるを得ず、（中略）

其時代の國民の意思を代表せしむべき政治的公人の選擇は、最も冷靜に、最も愼重の態度を以てこれを爲さゞるべからず、既に一度び自己の意に依つて決せる候補者を擁立し、政治上の運動を開始したる後に在つては、冷靜は寧ろ其敵なるやも知るべからずと雖も、其以前に在ては、要するに其頭腦を冷靜ならしめ、熟慮又熟慮、愼重の態度を以て、事にこれに從事せざるべからず（中略）

敢て政友會といはず、又進步黨、大同俱樂部、猶興會といはず、其所屬代議士にして變節、破廉恥等の行爲を爲したるものは、固より其黨上に置くべからず、又其黨の爲めに忠實なりとするも、國民の意思を代表せず、徒らに其黨議に盲從し、或は政府の利便のみを計つて眼中國家なく、又國民なきの徒は斷じてこれを再選すべからず、たゞ、忠實に代議士たる任務を果たし、國士として體面を毀損せざりしものゝみ其選に入らしむべきなり。

黄白の多寡、或は情實の如何を以て、この政治的公器を弄せんとするは沙汰の限りなり、吾人は今日に於て、豫めこれが監視を怠るべからず。

と云へり、萬朝報の『改選を待つのみ』も稍ゝ感情的の口吻を以て

曾て英國のピットは當時腐敗せる多數政派の攻擊に答へて「如何なる誘惑も如何なる脅迫も予が國家の爲に盡さんとする熱誠を銷沈する能はず、國民の自由が迫害せらるゝ間予は決死の奮鬪を絕つ能はず、公然の掠奪が强行せらるゝ間予は不滿の沈默を守る能はず、如何なる危險を冒すも侵害者を追放せざるべからず、民利の强奪者を正義の法廷

に引致せざるべからず、其兇惡を幇助し其掠奪に加擔する者も悉く之を法廷に引致せざるべからず」と云へり、移して以て我邦の現狀に適用し得べきに非ずや、嗟今日誰か我邦にピットの此言を絶叫し得るものなきか、我政界の現況はピットの時に於ける英國よりも遥かに腐敗滅裂せり、而して一人のピットに比肩すべきものなしとするも、之に倣ひ之に擬するの男子なきか、其人なきに非ざるも之を立たしむる人なきか、來る可き總選擧に於て選擧民は一人たりとも其人を求めんことを務め、一人だも今の如き議員を再選せざることを期せざるべからず國民の志としては國政の腐敗を改むる手段是に外ならず、若し一般選擧民にして此選擧民にして此決心を以て進み行かば、我邦と雖も豈啻に一人のピットを出すに止まらんや、コッスート出づべく、グラッドストン出づべく、リンコーンの徒も亦出づべし、此の如くして我弊政は遂に改善せらるべく、我國家は永久に安泰を保つを得べし、我國家の窮厄を救ひ我國民を幸福ならしむる有爲の士を出すと否とは一に選擧民の良心に在りと存す

と論じたり。吾人も亦切に此の感なきを得ざるなり。然らば選擧區民たるものは果して如何なる標準を以て、自個の貴重なる參政權を行使すべきか、朝日の『總選擧準備』は說いて頗る親切なるものの有り、曰く

何如なる人物を候補者として推薦すべきやと問ふものあらんに、吾人は之に向つて人材本位なれば答へんとす、本來ならば各自關係の政黨政派中より候補者を選定するこそ、代議政體の一要義なる可けれど、今日の政黨政派は雜然たる一部政客の烏合團體たるに過ぎず、高明の士は寧ろ政黨政派の渦中に投ずるを好まず、地方の恒產あり名望あるものも、寧ろ政黨政派との關係を忌避し、政黨員と謂はゞ直に一種の政治ゴロツキを聯想せしむるが如き狀態なれば、代議士として適當なる人材を政黨政派中より物色し出さんこと思ひも寄らず、寧ろ廣く候補者を黨の內外に求め、品流、人格共何處に推出すとも恥かしからざる者を選出することこそ、選擧區民否國民全體の幸福ならめ。現代議士中に人材と稱す可きもの稀なるは、人材本位としてよりも政黨本位として選出されしもの多きに職由せずんばあらず、故に曰く候補者選定は須らく人材本位たる可く、政黨本位たる可からずと。

と、吾人願くは忠良なる選擧區民の愛國心と、冷明なる判斷とに訴つて、庶幾くば我が憲政の廓清を期せんかな、大方識者の希望も亦恐らく此處に存せん。

（烏山人）

我國體と基督教に對する其後の世評

端なく世論の喧囂を誘ひたる加藤博士の「我國體と基督教」に就いて、其後現れたる世評の重なるものは一月並に二月の「東亞の光」に出でたる井上哲次郎博士の「加藤博士の我國體と基督教を讀む」、及び同く一月二月の兩月に亘りて六合雜誌紙上に見えたる廣井辰太

郎氏の「吾國體と基督教評論」の二なりとなす、井上博士は先づ加藤博士の「物質」と「知識」とを以て自家立論の牙城と憑み、塹濠は深し、壘壁は高し、敵勢如何に强襲すとも、白頭將軍豈空く面縛して出づるの陋を爲さんやといはんずる慨あるに對し、直に肉薄を試みて爾の所謂一物質とは何ぞ、爾の所謂「知識」とは何ぞ物質といふも物質そのものゝ全分が、如々の姿を露堂々と吾人に直示するとなすは淺し、視聽嗅味觸等の五官よりそれぞれ導かれ來る箇々の感覺が、吾人の心象に潜入して統一せられたる上に、初めて物質なるものは認めらるゝなり、至竟は物質といふも唯諸種の感覺の集合に外ならずとなし、認識論上より外界の吾人の心象に入り來る過程を詳述して一氣先づ老博士の膽を奪ひ、更に餘勢を以て輕々に「知」々と漫稱すれと、知は爾く單純なるものに非ず、なるものに非ればこそ優に一科の學として認識論なるものが成立せらるゝにはあらずやと外らし、一轉して博士の所謂科學的とは如何程の義を含むか、明かには認むべからざるも案ずるに自然法即ち因果律なるものを以て凡てを律せんとするにあるかと、少しく同情ある揣摩を敢てし、之ならば今の時世、詳にいへば、日露戰爭以後如何なる譯にや兎角迷信的傾向を取れる時世に、頗る對症の良藥たらずんばあらず、因果法は此現象界だけを說明するには極めて的確なりし樣に、陽に賛するが如くにして實は現象界外何ものかのあると暗示し、陰に因果法の効力を極限する老猾なる論陣を張り、再轉して國體論に移りて國體には形式と內容とあり、前者は不變化的なるも後者は變化的なり、形式はその故に常住の姿を取るとも內容はその故に亦轉變の勢を追はざるべからず、即ち我國體に就いて云々せば國初以來大らかなる形式はありたりとするも、而かもその內容には取次に交代あるを免かれず、時には儒教を導いて陶化し、時には佛教を交へて鑄成す、然らば獨り基督教を以て此陶化と鑄成との外に置かるべしとすべけんや、唯それ各の教理に異同あり、從つてその取つて我國體の內容とせらるゝ上に難易の差あることのみは許すとし、餘波として基督教の長短を比し得失を較し、三轉して氏が獨自一己の宗教觀に入り、基督教賴むに足らず、佛教も亦排すべし、要するに既成宗教は以て現在並に未來の吾人に對し、敬虔なる信仰を迫るに足らず、大人は襁褓に包まるべからず、進歩せる人類は歷史的宗教の羈絆を脫して別に新光明を齎すものに向はざるべか

らずとし、之より氏の所謂理想宗教の如何なるものかを說き吾人の信仰を繫ぐべきものは唯此理想あるのみ、神といふも唯此腦中の觀念たるに過ぎずとし、理想即神の意を暗示し、所謂新光明を齎すべき新宗教とは此理想の上に建立せらるべきものなりとの希望を洩し、四轉しては加藤博士の基、佛、回、の三教を以て世界教となすを非として、世界教の說義より一寸要もなげの言葉咎めをなし、それを足場として眞乎の世界教の出現を望むの語氣を示し、之と關聯して再び博士の國體論の遠攻に掛り、之には先づ敵の匕首を以て敵に擬するの利を悟りてか、博士の金科玉條たる進化論を奪ひ來り、博士は有機體の第三段階まで說きながら、何故百尺竿頭唯一步の勞を惜みて更に第四段階までを說くを爲さゞる、單細胞組織より、複細胞組織、それより又國家的社會と、此處迄進化の跡を辿りながら、更に何が故に第四階段として此等箇々の國家的社會が今や世界的社會を造らんとするの氣運を觀過せるや、之を論じて極に到らず說いて精を盡さゞるものなりとて、再呵博士の氣鋒を挫き、末段悠揚として此第四段階たる世界的社會に對しては又世界的宗教なかるべからず、地には畛域あるも人の理想には我他彼此なし、此我他彼此なき理想の上こそ世界的宗教が以て礎を定むべきものなれと結び、斯くて老博士の駁論となす傍ら潛に自己の所信に襯接して理想宗教なるものの闡明を試みぬ、

廣井氏は全篇を二章に分ち、先づ「信仰と智識即宗教と科學の評論」の題下に、更に五項目を設け、(一)に於て博士の宗教は盡く迷信にして人文の發展に大害あるものと言へるを難じ、そは根據なき、即ち歷史と人生とを無視したる不完全なる概括に基ける偏見に過ぎずと論じ、(二)に於て博士が佛耶の經典に現れたる誕生談の冷評に酬ゐて、博士は今一步神話や奇蹟の本領に立入つて、是等の者が元始民族の如何なる精神狀態より生れ出てたるものなるか、彼等古代の人民は奇蹟や神話によりて如何なる信念如何なる眞理を言ひ現さんと努力したるものなるかを考察せざるべからずと詰り、最後に耶蘇を私通の見なりとせるを腹立しげに科學的說明として何等の價値あるものにあらず、畢竟ヘッケルの臆測に欺かれたるもののみと誹り、(三)に於て、博士が宗教なるものは多少智識あるものが、故意に揑造して愚夫愚婦を欺くものなりといふに對し、宗教起原の動機とせらるゝ世說の限りを盡し、宗教の

起原には已むべくして已むべからざるの動機あるもの、偶ま一二の猾僧ありて博士の叱斥に値する所業ありとするも、之は一を以て萬を律するもの酷も亦甚しとの意を洩し、(四)に於て知信の關係を說き、知信は相依りて立つべく、決して偏在を許さゞるもの、而かも信の領域は知のそれに比しては廣大なり、知そのものを含んて尙ほ綽々たる天地を餘す、智は短く信は長し、短きものには滿足を得ざるところあり、之を長きものに往いて迷ふを要すとの旨趣を示し、(五)に於て博士が宗教は固信の凝り固り、到底一顧の値なしと罵りながら、猶ほその業的方面、即ち社會的方面に於て能く慈善事業に種々の効績ありといへるを捉へ、枝葉は根幹に依らずして榮えず、迷信の凝り固まりにて一顧の値なきものが如何にして博士の賞讃を値する如き、左程の効績を示すを得んや、社會的に効績あるは偶まその教理に人天孚化の妙諦あるを語るものなりと辯ず、次には「民族教と世界教の評論の題下に六項を設け、(一)に於て博士が民族教が人文の發展に伴ひ次第に世界教に蠶食せられたる過程を詳述しながら、結論に於て世界教の爲に諸國の害を被れるもの頗る大なりといへるを駁し、博士の科學的態度は僅に人生觀の上に止まり、國體論に移るに及びては俄然として感情的なり、獨斷的なりとなし、更に宗教を以て超自然的のものと見る博士の見解の妄を正し、此の如きは最早前世紀の神學者の謬說に止まり、進步せる今日の神學の言はざる所、博士は今日の宗教觀念には不通なるものと貶し、(二)に於て博士の忠君愛國論とその主張する乾燥なる因果的宇宙觀と、一視同仁なる生物進化主義とがよく兩立し得るかと責め、更に僅に一利一害を見て直に全體の功過を糾明せんとするは妄の妄なるものとなし、歷史に顧みて世界教と國家の興廢との關係を敍し、世界教と國家的觀念とは背と腹の如く相反けるものにはあらざるを語り、(三)に於て博士が國家と世界的宗教との兩立すべからざるを說くを非とし、之は畢竟、國家と宗教との明確なる概念を有せざるに基く、宗教は國家の如く權力關係を以て成立するものにあらず、故にその點に於ては兩者は沒交涉なりとし、更に博士の利己說、因果說、生存競爭論、進化論等が、博士の信ずる如き我國體論とは互に相反撥すべきものなるを論じ、(四)に於て博士の所論往に佛耶兩教の如き世界教を目するに一種のコスモポリタン(宇宙主義者)、即ち兼愛主義者の如く見做す態度に不滿を抱き、

世界教とて愛に差等あり、即ち愛に親疎の別あるを言ひ、却て反噬を博士に試み、博士の利己主義なるものより能くも國家の爲に自己を犧牲にするといふ、左る見上げた者へ出づるものよと嘲り、（五）於て博士が世界教の慈悲忍辱主義を罵るを以て淺解の致す所とし、博士が基督教攻撃の爲に引用したる聖典の句、即有名なる家人爾の右の頬を批たば亦他の頬をも轉じて之に向けよ」の句を再び掲げ來り、之丈の字句に拘泥して直に云々の解を下すは、即ち斷章主義の我儘に陷るもの眞に此句を解せんには更に前文を味はざるべからず、之は殘忍酷薄なる古の復讐主義を戒めんが爲に捻出したる文字に過ぎずと辯じ、（六）に於て博士が比喩を設けて巧に國家主義と世界教との一騎打を試みしめんとし、他日某國と我國と戰禍を釀すことありとし、其際偶ま不義我に在りとする時には世界教の信徒は如何なる態度に出てんとするかといへるに對し、默從これ忠にあらず、時に侃諤の論階下に立つて直諫を飽くまでするも亦忠ならずや、戰場を以て一向ら忠魂の現し處と思ふはゞ誤まる、所詮は義と共に終始すべきのみ、此意味に於ては世界教とて決して戰爭を拒否するものに非ず、議論は暫く措け、事實は眞に之を證するに非ずや、とて、基督教國たる諸列强現下の趨勢を掲げて終りぬ、加藤博士もこの東亞協會に於て「拙著の批評に就いて」と稱する題下に。聊か世評を一括してそれに對する辨明を試むと自稱しつゝ縷々數千言を費す、そは載せて一月の「東亞の光」紙上にあるも、所論肯綮に中らず、爭て摩姑の長爪を得て痒處に達せしめんとのもどかしの感を伴ふ、博士は唯自然法の學ぶべきを再論して神の存在を否定し、神に智情意ありとなすが是れ心得ぬ沙汰、畢竟は人が己れに似せて神を造れるもの、神は妄見の所産のみとし、神が善惡の判定を爲すといふも亦大謬なるもの、善惡は社會あつて初めて定まる、大初に在つては茫たり漠たり、善惡の境界あるべからずと說く、世評の焦點とは相涉らず、爾右せんと欲せば右せよ、我は吾適に從つて左せんと言ふものゝ如きは惜むべし。（松逕子）

編輯だより

校正小僧

▲卷頭の謹告に有之候通り本誌は四月一日を以て「春期大附錄號」を發行致すべく候。本誌の春秋二期の附錄が如何に大いなる貢獻を文壇になしたるかは讀者の熟知せらるゝ所に候へば今更ら多言するの要を見ず候。

▲久しく雜誌小説に筆を絶ちて專ら新聞小說にのみ立籠られし小杉天外氏が四五年振にて再び雜誌界に打て出てらるゝは近來の快事と存じ候。「校長の二子」と題して五六十枚のものを草せらる筈、如何なる材を如何なる技術を以て描寫せらるべきか、文壇一般の御精讀を煩はし度存候。

▲近來「日本新聞」が「文壇廓清問題」と題して事實を誇張し若くは揑造して二三の文士及び書肆等を攻擊したるは極めて淺ましき事と存じ候。文壇廓淸甚だよし、只だ何故に正直に、眞摯に、熱烈に論議して文壇を廓淸せんとはせざる。誇張し揑造したる記事は人の反感をこそ買へ、斷じて矯正改善の効なし。彼が如き調子を以て彼が如き問題を提出す。或は恐る、「日本」が文壇知名の人を攻擊して被攻擊者の辯駁文をとり、之を以て振はざる紙面を賑はさんとする奸手段を弄するものとの攻擊を受るも、以て辯ずるの辭なからんことを。吾人は切に「日本」の爲に之を惜む。

▲「日本」が二重賣りとか三重賣りとかせりとて書き立てたる眞山青果氏の脚本「生れざりしならば」は四月の「春期大附錄號」に掲げらるべく候。早稻田社にても新思潮社にて固より之に向て原稿料を拂ひしことなく、本社にてもあの記事の出てし時は只約束のみありし丈けにて未だ原稿料は拂はざりしにて候。又新思潮にて原稿を燒けるやうに書さあれどもあの時は「生れざりしならば」の三分の一も出來居らず、小生が今日此編輯だよりを書き居る時てさへ未だ全部出來ざる原稿を燒いたなど〻殆んど夢のやうな事をいひ居るは笑止至極に候。且つ新思潮及び早稻田には約束といふ程の約束のあらざりしは各社自ら公言致し居る處に候。文壇を廓淸するよりも御自分の筆先の御注意肝心とつひ皮肉もいひ度相成申候。

▲又眞山氏の原稿は博文館にて買はざることに相談一結せりなど〻書きあれども博文館發行の三月の「文章世界」には同氏の「家鴨飼」が載り、四月の「太陽」には「時」といふ小說が掲げらる〻由に御座候。勿論「妹」が「弟の碑」と題丈け變はりて「趣味」より「太陽」に轉載されしについては眞山氏を辯護仕らず候へ共これには又いろ〳〵の事情有之候事故、これしきの事にて一人の有望有方なる作者を葬らんとするが如きは餘りに甚しき儀と存じ、こゝに眞山青果氏の爲めに聊か辯じ置きたる次第に御座候。

▲扨左程に噂に上りし「生れざりしならば」は略ぼ九十枚の長さの由にて今は八十枚許り出來申候。昨年の脚本界を驚かしたる「第一人者」よりも事件は更らに自然に、性格は更らに複雜に、描寫は更らに手際よく出來一種陰深悲痛の氣全篇に溢れ居り候。出た時のお樂みに其以上不申候。

▲小栗風葉氏、田山花袋氏、德田秋聲氏、正宗白鳥氏の作物については詳細未だ分らず候へ共我創作壇第一流の此等の諸氏が如何なる佳作傑作を寄稿せらるべきかは、吾人の讀者諸彥と共に樂しみ待つ所に御座候。

▲相州茅ヶ崎に病痾を養へる國木田獨步氏の爲めに文士廿八氏の作を集めて「廿八人集」と題し、之れを國木田氏にデヂケートして其原稿料を同氏に送らんとす。文壇近時比類なき美擧と存じ候。因に記す、本書の發行所は新潮社也と。吾人は本書の一册も多く賣れんことを希望致し候。

▲五月の本誌には眞山青果氏の「南小泉村」第三篇「勘兵衞の家」及び生田葵山、小栗籌子女史の作物掲げらるべく候。先つは右申上度如斯に候。



五月幟

正宗白鳥

（一）

「穏浪村は人家三百戸」と、小學の敎師は二十年も前から兒童に敎へてゐる。この三百戸の八九分は漁業か農業、或は漁農兼帶て生活を立てゝゐるが、百八十番地の「瀬戸吉松」の一家は、母は巫女、息子は畫工。村に不似合な最も風異りの仕事をしてゐる。て、海が荒れて不漁が續いたり、暴風雨や蟲害で麥や稻の充實が惡いと、商人も大工も石屋も疊屋も、或は僧侶神主、皆その影響を受けるのだが、殊に吉松一家は酷い。

しかし今歳は漁がよかつた。鯛も捕れた、鰆も捕れた。漁夫は沖で釣つた魚を賣つて、岡山や牛窓から縮緬の兵士帶、疊付の下駄、洋銀の簪やら派手な手拭やら、土產物などつさり買込み、倘魚籠には兩手て掬い切れぬ程の銀貨や銅貨を殘して歸つて來た。明後日は舊曆五月の節句であれば、遠海へ出稼に行

つてる舟も、よく／＼不漁でない限りは、久振りに陸の鹽辛くない飯を食ひに歸り、濱邊には珍らしく百艘近くの小舟親船が並んでゐる。そして吉松は諸方から幟の揮毫を頼まれて、近年に無く多忙である。

彼れは日限に迫まられ、五六日戸外へ出ず、夜も行燈の側で書いてゐたが、いよ／＼今一つで描き終れるのだ。圖題は鎧姿の清正で、略々形だけ出來上つてゐる。彼れは禿筆の先で清正の髯を細く描きながら、疲れた肩を左の手で揉んだり、墨の染みた下唇を噛んで、細長い布を見上げ見下してゐる。一筆毎に凛々しい姿の浮き上るのを見るにつけて、もつと奇麗な繪具が欲しくてならぬ。あの草摺もその脇當も、他の色で彩つて見たい。何時ぞや大福寺で蟲干のあつた時、佛様の繪を二三幅見せて貰つたが、どれも懐かしい繪具を用ひてあつて、見てゐて何といふ事なしにいゝ氣持がして、その前を離れたくなかつた。あんな繪具は何で拵へるのか知らんが、自分も一年に一度でも、立派な繪具で絹地へ書いて見たいな。

彼れの左右には墨を溶かした飯茶碗と、小さい朱硯と、臙脂と藍を兩縁に塗つた小皿があるばかり。筆も小學生徒の手習用の一本二錢か三錢のを毛が擦り切れるまで使つてゐる。で、道具には不平を抱いてゐるが、好きな仕事ではあり、第一金が取れるのだから、自然に勵みもついて、身體の怠いのも我慢して、筆を運ばせた。家は二室だが、只閾で區切つてあるのみで、襖も障子もない。上等の室には床板の上に薄縁を敷き詰め、次の室には座蒲團代りに一枚の蓆を敷いてある。繪布の裾は蓆の室へ挾出され巫女婆さんの膝に觸れてゐる。婆さんは片袖をまくり上げ、肥つた腕を露はして臼を挽いてゐる。居眠

をし通して、朝から掛つてゝ、まだ一升足らずの粉が挽け切らぬ。
「吉よ、汝やまだ書いてしまはんか」
と、婆さんは附木で粉を掻寄せては張籠に移つしてゐる。
「も少して書いて仕舞わあ、お母はまだ挽いて仕舞はんのか」
「お母も、もう一握りでえゝんぢやがの、汝お腹が減つたら、お晝飯にしやうか、太陽様もそろ〳〵隣りの牛小屋へ當りだした」
「さうかな、もう正午過か、そないになるたあ思はなんだ」
「どりやお茶でも沸さう」
と、婆さんは片手で膝を壓へ、「うんとしよ」と伸び上り、凸凹の多い庭へ下りて、柴を一握を壓折つて茶釜の下へ投げ込み、附木で火を點けた。黒烟が渦を卷いて綸布の上を這ひ、低い軒下へ流れ出る。吉松は青い顔を顰め、勢のない咳を出した。目を細くして戸外を見た。門口には五月雨の用意にや柴木片を堆高く積んである。空は見えぬが、日は鮮かに石ころ道を照らし、帽子代りに頬冠りして肥桶擔つた男が、腰を振つて通つてゐる。二三人首を抱き合ひ、得意氣に卷煙草を吹き、グラ〳〵笑つて村の若い衆が繰つて行く。「吉マ」よ「チビ松」と聲を掛けて行く者もある。尻端折り藁草履を穿いた水汲女が小さい桶を荷つて二人三人續いて通つた。井戸水は鹽氣があり、山陰の泉のみが一村の飲料水となるので、盆と節句には泉が乾れると云ふが、急に家族の殖えた此頃、女房や娘は水汲が一日の大役なのだ。

吉松はその水汲の一人の後姿を見て、お竹ぢやないかと思つた。顔をも見せず、すた〳〵と行つてしまつたが、その眞紅の襷、脹らかな白い脛、どうも彼女らしい。て、彼れは少し伸び上つてにつたり笑つた。これを書いてしまつたら彼女に遇へる。磯の屋では節句を當て込んで、岡山からうんと小間物を仕入れて來たさうだから、彼女に簪でも櫛でも買つてやる。目顔で呼び出し泉の側の藪へ行くのだ。

二三年前から目星をつけてたお竹と、睦じい言葉を交はすやうになつたのは去年の秋。忘れもしない、彼女が藪下の川で洗濯をしてゐた。澄んだ水がちよろ〳〵と草の中から流れて來る。お竹は絞りの手拭を姉様被りにし、幅の廣い滑らかな石の上に少し屈んで立ち、足の甲まで水に浸し、兩足で調子よく汚れ物を踏んでゐた。周圍に人の聲もしない。只烏が寺の屋根に鳴いてゐるばかり。その時此處を繪に書きたいと思つた。その姿もその顔も、この村にや比べる女はありやしない。それで「私の女房になるか」と云ふと、首を横に振らなかつた。あんな別嬪が私の女房になるんだぞ。村の小若連の集會に行くと、吉の野郎は二十歳になつて、まだ衒妻一人よう拵へぬ、意氣地なし奴といつて、皆んなして冷かしやがるが、どうだ羨ましからう。

彼れはうつとり考へ込み、やがて又にやりと薄氣味惡く笑つて筆を執つた。て、漸く書き終つた頃、茶釜がジン〳〵音を立てる。

「吉、お茶が沸いだてえ」と、婆さんは棚から膳と飯櫃を卸してゐる。

「お母、初野はまだ戻らんかな」と、吉松は痺れた足を撫で〳〵膳の前へ坐つた。米一分の黒々とした

麥飯を茶碗に山盛りにし、茶柄杓で茶を打かける。

「彼女は今朝乘出したきり、まだ戻つて來ん、柏餅を早う拵へて呉れいとせがんどいて、今まで何處を歩いとるんぢやらう」

「又皆なに冷かされとるんぢやないか、あの阿房に困るなあ、早う死腐れやえゝのに」

「汝や何をいふ、阿房ても狂人ても、汝の眞實の妹ぢやないか」と、婆さんは鐵漿の斑らな齒て、漬菜をばり〳〵噛みながら、金壺眼て吉松を睨んだ。

「そがい云ふても、初野が居りやがるんて、物入りが多うなつて仕樣がない」と、吉松は慳貪に云つて、

「それになあお母、彼女が居ると、私や嫁が取れんだな、家は狹いし、初野は大飯を食うから」

「そがいな事心配せえてもえゝ、汝や苦勞性ぢやから、何んだれ彼だれ案じてばかり居るけいど、入らんこつちやがな、嫁を取りたけりや、何時ても好きな女子を連れて來いよ、お母と初野はこの蓆の上へても寢りやえゝ、それに彼女を連れて御祈禱に廻りや、袋に一杯や二杯のお米は、何處からても貰うて來られる。汝一人の世話にやならんがな」

「貰う者は何ぼ貰うてもえゝけど、乞食見たいな事をして下んすな、村の者は私の父ちやんは狂人てお母は乞食、妹は阿房ぢやと云ふて笑うとるがな」

「笑うたて構うもんか、澤山お甘い者を食べさへすりや、汝、云ふ事あないてないか」

「お母はようても、私やつらいがな」

婆さんは吉松の憐れつぽい小言を聞きながら、緩々食事を終ると、汚れた茶碗や小皿を隅の方へ押しのけ、坐つたまゝ臼の側へにじり寄り、口の内で睡そうな引臼唄を唄ひ、又粉を磨り出した。

吉松は布の乾くのを待ちて、それを白木綿の大風呂敷にくるんで外へ出た。空には白い雲が漂ひ、柔しい風が沖から吹いて來る。海邊近く太い松に圍まれた住吉神社では太鼓の音がして、小供の喜び騷ぐ聲がする。この前お詣りした時は、神社の扉は鎖され、埃の積んだ階段に子守が二三人腰掛けてるばかり、境内は寂寥としてゐたが、今日は馬鹿に賑やかだ。今夜神前で大漁祝ひの集會があるさうだが、宮を中心にして、通る路々何處を見ても景氣付いてゐる。そして吉松も生々した空氣に胸の鼓動し、譯なく悦しくなつて、大急ぎに歩き出した。

（二）

彼れは小學校も二年で止めた。繪畫の教育など更に受けたことがない。しかし何時の間にか獨りで工夫して書き出した。少い時から棒切れで地上に描いたり、消墨で板に描いたりした。草紙へも碌に手習ひはせず、虎や人形を書いてゐた。十三歳の初夏、大酒呑の父が、麥刈最中に發狂してから、詮方なく自分も日雇稼ぎをして、一家の活計を助けたが、チビ松と綽名を付けられる位、身體が小さくて弱いため、人並の仕事は出來ず、一日鍬を持つと關節が挫けるやうであつた。と云つて一日惰ければ、一日食はずにゐねばならぬ。狹い片田舍だから、力業をしなければ外に糊口の道もない。泣いても叫んでも一生野良仕事をして、鍬と心中する覺悟を定めねばならなかつた。所が或正月豊年祝ひとして、若い衆が

勸進元で村芝居を催すことゝなり、寄つて集つて衣裳や小道具を借り集め、出し物も千本櫻に阿波鳴門と定つたが、困るのは書割だ。無くても濟むが、凝り性の連中はそれに迄大趣向を廻らし、どえらい物を拵へて播州あたりの本職の役者をも驚かしてやらうと云ひ出した。で、村中で繪心のある者を捜して、間に合せに描かすことゝなり、評定の結果吉松が命を受けた。古老の指圖で、木綿の白布や、數枚繼合せた繪畫用紙に、鳥居に玉垣、椎の木などを描いた。それが思ひの外の出來榮なので、急に彼れの畫才が一村の漁夫や百姓に認められ、次第に隣村にも知られるやうになつた。この界隈の五月幟、漁夫の崇める惠比壽大黒の掛物は皆彼れの筆を煩はすのである。

* * * * * * * * * * * *

彼れは依頼者にかの布繪を渡して、五六十錢のお禮を貰ひ、それから磯傳ひに二三軒未納者を訪ねたが、何れも氣持よく拂つて呉れる。

「吉ゝ汝や毎歳繪が上手になるぜ」「今歳の淸正はどえらい元氣がえゝ、厄病神も逃げてしまう」と、行く先々で褒めて呉れる。で、吉松は袂の中に錢の音をさせ、大得意で心は急いても、わざとゆつくり歩いて、お竹を捜しに行きかけた。日は山の端近くなり、潮も退きかけ、半ば海へ突出た駄菓子屋の支柱は、濡れたまゝ根元を露はしてゐる。店前には多數の若漁夫が陣取り、粟おこしやら大福餅やら、てんでに握んでは食ひ、大聲で笑つたり叫んだりしてゐる。彼等の話題に上る者は、大抵は喧嘩か女、或は

賭博。しかも四邊かまはず露骨な言葉で持切りだ。たまたま澁皮の剝けた若い女でも通れば、戯けた口を利いて、大勢でどつと囃し立てるは愚か、惡くすると道邪魔をして罪な調戯を始めることもある。又中には調戯はれたがつて、自分て押かけ、響位奢らせてやらうと云ふ女もある。漁夫の休日にはこの駄菓子屋が倶樂部になつて、時には賭博宿も兼ねるのだ。

吉松は何氣なくこの店先を通りかゝり、ふと氣が付いて見ると、意地の惡い奴等が揃つてゐる。牙齒の龜もゐる、備前德利の米もゐる。ダニの虎、猪首の鶴、村を騷がす連中が皆久振りで歸つてゐる。惡い所へ來合はせた。あれ等に掛り合つちや碌な事はないと、知らん顏で行過ぎやうとすると、鶴が素早く見つけて「吉公ぢやないか、まあ寄れいよ」と呼留めた。吉松は仕方なしに振向いて、「今日用が殘つとるから遊んぢや居れん」と、一寸お世辭笑をして行かうとしたが、「まあそないに云はずに寄れと云うたら寄れいよ」と云ふと共に、龜は駈け出て、兩手を開いて道を防いだ。

「今日は堪へて呉れ」と、吉松は情ない聲で云つて、くゞり拔けやうとしたが、龜は肩を攫へて離さない。

「さうら逃げるなら逃げて見い、鳴門の海を漕ぎ切つた腕ぢや」

吉松は鷹に攫まつた小雀、爭ふも無駄だから、そのまゝ小さくなつて店へ引摺込まれた。袂の銀貨がヂャラヂャラ音を立てる。

「汝も澤山錢を持つてけつかるな」と、龜は吉松の袂を攫つて重味を量り、牙齒を剝き出して笑ふ。

「汝に聞くことがあるから、まあ坐れい」と、年長の虎は後退りして席を空けて、吉松を坐らせ、「吉公は何時見ても白瓜のやうな顔しとる、何處か工合が惡いんか、大事にせえよ、汝が煩らうと、家の者あ乞食せねや饑え死にぢや」と柔しく云つたが、吉松は厭な氣がした。自分が死ねば母と妹とは乞食をするのは分つてゐる。それに母は乞食を恥とするやうな人ぢやない。て、彼れは魔がさしたやうに自分の死後を思つて、鬱ぎ込んで默つてゐると、米は鼻に皺を寄せてヒツ／＼と笑つて、

「思案投首て何をしとる、衒妻の事でも考へとるか、汝やお竹と夫婦約束したちうぢやないか、」

「さうぢや／＼、誰れやらがそんな噂をしとつた」

「汝も中々惡さをするのう、私等が一寸漁に出て村に居らん間に、こつそり女子を拵へるたあ、汝もえらいぞ、祝ひに酒でも奢らんか、その袂の錢で」

と、皆んなて面白さうに色んな事を云つて、冷かしては笑ひ、笑つては冷かす。吉松は我知らず袂を握り締め、

「虚言ぢや／＼、そがいな事があるもんか」と、狼狽てゝ云つて、顔を少し赤くした。

「隱さんでもえゝわ、ぢやけど汝もお竹だけは諦らめい、あの女子はな、ちやんと主が定つとるんぢやぞ」と、虎は毛脛を出して胡床を掻き、澄ました顔で煙草を吸つてゐる。

吉松は一座を見廻して、最後に目を丸くして、虎の顔を見詰めた。

「お竹にやちやんと主がある」と、虎は繰返して、「汝やまだ知るまいが、彼女は源兄の者に定つとるん

おや、源兄が去年土佐へ行く時、お竹は己が嫁にする、五月の節句に歸るまで、彼女に手でも觸つて見い、承知せんぞと、私等に云ひ付けたんぢや、汝も氣を付けい、うつかりしてお竹の惚氣でもぬかすと源兄に首つ玉あ捻ぢ切られるぞ」

その樣子が萬更戲言でもなささうなので、吉松は眞青になつて震えた。頭を奇麗に刈込んだ新客が入つて來て、漁の話を仕掛け、虎の仲間は最早吉松を相手にしなくなつた。鶴は何時の間にか大の字に寢て鼾をかいてゐる。

吉松はこそ〳〵と外へ出た。もう二月も手入れをせぬ髮は小さい耳朶を蔽ひ隱くし、細かい棒縞の單衣は華やかな夕陽に照りつけられ、繪具の名殘が黑く青く光つてゐる。虎の威嚇文句がまだ耳元で鳴つてるやうで、彼れの魂はくら〳〵して身に添はぬ。源と云へば駐在所の巡査も恐れて手出しをせぬ程の暴れ者。腕力が强くて三人前の仕事もする代り、癇に觸ると、出刄庖丁を振り翳すのが評判の癖だ。十五六で魚賣りをしてる時分から、魚源命知らずと、饅頭笠に書いて隣村へも名の通つてる男だ。虎でも鶴でも源にや道を避けて諂言の一つも云ふ。彼れに見込まれちや、厄病神に取付かれたやうなもの。何だつて私しやお竹なんか思つたことか。

彼れは源が下駄で旅商人を滅多打ちにしたこと、大酒飲んで素裸で村長の家へ怒鳴り込んだことなど思ひ出してぞつとした。お竹を呼出す計畫なんか頭の中から消えてしまひ、只源の顏ばかり目に浮ぶ。何故源の船が土佐沖で沈沒しなかつたのだらう。何故鳴戸の渦に捲き込まれなかつたのだらう。何故私

を庇つて呉れた人のいゝ芝居好きの作藏爺が早く死んで、源のやうな奴は虎烈剌にも罹らぬのだらう。

吉松は神社の方へ向つて石ころ道を辿つた。道の左右には貝殼の塚が所々に築かれ、深紅の柘榴の花が白壁の側に咲いてる。小供等は祭ででもあるやうに、群をなして玉垣の前を飛んだり跳ねたりしてゐる。

「兄よ」と、突如に聲がした。

驚いて見ると、初野は眞向ひに立つてキヨロ〳〵してゐる。襤褸たれた單衣を赤い扱帶で締め、埃に染める白茶けた髪を藁で茶筅のやうに結び、顏から首へかけて垢で塗られてゐる。

「兄よ、お前時さんに會はなんだか」と、尚前後を見廻す。

「會うもんか、汝ももう家へ戻れ、お母が柏餅を拵らへて待つとるから」と、吉松が手を執ると、

「柏餅か」と云つて笑つたが、又身を藻掻いて手を振放し、

「えいても、時さんが私を捜しと、皆なが云ふから、あの人に會はにやならんもの」と呟いて、鳥居の前をウロ〳〵してゐる。以前から玉垣に寄りかゝり初野を調戯つて喜んでた連中は、此方を見て、「初野さん〳〵、時さんはお地藏樣へ行つた」と囃し立てて、どつと笑つた。

「本當にお地藏樣へ行たのかな」と、勢のない聲で云つて、初野は西の方へフラ〳〵歩いて行く。

吉松は情なくなつて涙を浮べた。この瞬間恐ろしい源の事は忘れ、只白痴の妹が年中村の子供の玩具になるのを恥しく思つた。そして悄然家へ歸ると、母は膳を出したまゝ、板の間に眠つてゐて、頭の側

には一つ二つの蚊が幽かな音を立てゝ飛んでゐる。

（三）

吉松は酒も飲まぬ。唄も唄へぬ。漁夫仲間とは性が合はぬから、平生仲のよい友達は少い。今夜の集合にも誘ひに來る者もなく、又とても行く氣にはなれぬ。で、早く晩食を濟ませ、神棚の燈明皿に燈火をつけ、上り框に腰を掛けて沈んでゐた。昨夜は幟に忙しくて何となく悅しかつたが、今夜から繪の仕事もなくなつた。平生なら夜業に草鞋を造るのだが、今夜は肩が怠し氣分は鬱いて槌を持てさうでもない。

婆さんは行燈も點火さず、燈明の光で絲を紡いでゐる。數町を隔てた宮では太鼓の音がます／＼賑やかに聞こえる。

「吉よ、汝や錢を何處へ置いたか」と、母に問はれて、吉松は振返り、

「其處の戸棚に入つとらあ」と云つて、薄光りに緒卷の絲のブル／＼震ふのを見てゐる。

「何ぼ溜つたか」

「今日は三圓ばかし貰うて來た、まだ三軒殘つとらあ」

「そがいに呉れたかい、そいぢやえゝお節句が出來るなあ、お母も明日はお高姉の宅へお祈禱に賴まれとるから、又錢になるし、麥の二俵や三俵は庭へ積めるわい、汝も嫁を娶るな今が丁度えゝ機會ぢや、誰れても好きな女子がありや連れて來い」

「私や嫁を娶らんてもえゝ、一生獨りて暮すぢや」
「そいても、今朝は嫁を娶りたいと云ふたぢやないか、芳ても鶴ても梅ても皆んな嫁があるんぢやもの、汝も欲しからうがな」
婆さんの聲は欠伸まぜりて、次第に絲車も間斷勝ちになる。吉松は時折話しかけられても碌に答へぬ。て、暫らく母子脊合はせて默つてゐると、何時の間にか初野が勝手口からノロ〱入つて來た。白痴の中ても陽氣に騷ぐ方てはなく、口數は少く、戸外へ出るにも歸るにも、大抵は忍び足て、家の者にも氣づかぬ位だ。兩方の袖口を持つて、しよんぼり庭に突立つたまゝ左右を見廻し、
「お母、家は暗いなあ、兄よ、お宮は賑やかぢやぞ」と、低い聲て云つて、草履を引摺つて又戸外へ出かけた。
「初は朝から御飯も食べいて、何をしとるんなう、もう何處へも行かいて、早うお夕飯を食べなよ」と、婆さんは猫撫聲で云つたが、初野は「そいても家は淋しいもの」と、何處へか行つてしまつた。
「また皆んなに嬲られたいんか」と、婆さんは獨言のやうに云つたが、最早娘を氣にも掛けず、絲車を離れもせぬ。
吉松も今宵は住み馴れた家を、際立つて暗く感じた。室に這ひ上つて行燈をつけ、燈心をかき立てたが、偶々は尙暗い。天氣が變つたのか東風が吹き出し、ソヨ〱と裏口から入つて來る。枇杷の木も騷ぎ出した。宮の太鼓の音は止んだが、ワイ〱叫ぶ聲は一層盛んに聞える。彼れは耳を傾けてゐたが、

やがて不意に起上つて、聲する方へ向つた。三日月は既に沈んで、天遠く星が力弱く光つてゐる。彼れは小暗き道を通つて、玉垣の側に佇んだ。鳥居の根元は出入の提灯の光に照らされ、松葉に蔽はれた敷石が明るくなり暗くなつてゐる。酔漢の聲が遠くなり近くなる。神社の扉は廣く開いて、神前には大きな蠟燭の光が燿き、左右には數十の漁夫が居並び、中には片肌を脱いでる者、胸毛を露はしてる者。怒鳴つては呑み、呑んでは怒鳴り、言葉の綾も分らず、只騒がしい聲音が一つになつて、酒の香ひと共に神の境内に漲つてゐる。神社の周圍には小兒が群がり戯れてゐる。常の夜は漣の音と松風ばかり、丑三つには呪咀の女が白裝束で蠟燭を頭に戴き、呪文を誦して松の幹に、胸の恨みを籠めた五寸釘を打つと、母から聞いてゐるが、その淋しい淨地は一村の歡樂の巷となつてゐる。

　吉松はその聲を聞きその香を嗅ぎ、熊の如き腕をまくつた人々の勇ましい姿を垣間見てゐた。しかし團欒に飛込みもしない。

「兄よ」と後から突如に聲がした。顧みると初野は依然兩方の袖口を持つて、無心に身體を搖ぶつてゐる。

「兄はお宮の中へ行かんのか」と、兄の顔を不思議さうに見た。

「汝やまだ此處に居るんか、皆んなに嬲られん間に、早う家へ戻れ、お母が待つとる」と、吉松は常になく柔しく云つて、妹の袖を捕へやうとすると、初野は身を飜へして松の蔭へ逃げた。

濃い雲が東の山から吐き出されて、空へ廣がつてゐる。

「明日は雨か」と、チョン髷の老漁夫がいぢかり股で石段を下りた。

飲み盡くした空徳利を提げた千鳥足が鳥居の左右へ散つてゐる。先立つたのと遲れたのと互ひに呼んでは答へ、「畜生め」「馬鹿野郎」の聲が姦しく闇から闇に傳はる。

吉松は彼等が今宵至る所に賭博に耽り、女に弄むれる樣を想像して、羨ましく嫉しく感じた。

大勢の後から、手拭を首に結んだ一群が、社内を出て、お百度石を取圍み、何か小聲で話し合つてゐる。虎もゐる。龜もゐる。頻りに首肯いてゐるのは源らしい。と思ふと、吉松は空想の消えて急に恐氣がつき、玉垣の蔭に小さくなつた。そして彼等が鳥居を潜るのを待ち、靜かに歸りかけた。

星は殘りなく隱れた。沖には常に見る漁火の一つもなく、舟唄も聞えず、暗い波は黑い雲と接して、只風にもまれた滿汐の音が高い。

「兄よ、沖にや海坊主が居るんぢやなあ」と初野は闇の中から聲を掛けた。吉松は默つて妹の手を執つて家へ歸つた。母の影は障子に薄く映つてゐる。絲車の音も聞える。

（四）

翌日は雨。風も少し加はつた。婆さんは鈴を持つて、お高姉の家へ生靈退治に出かけた。初野は柏餅を腹一杯詰込み、津盤の鋏を絲で縛つて弄んでゐたが、やがて厭いたのか、傘も差さずに、雨を犯して當度なく出て行つた。吉松は只腹匍ひになつて戸外を眺める。

びしよ濡れの水汲女が昨日と同じく、跡切れ〳〵に通つてゐる。醉つて銅鑼聲で唄つて通る者も多い

竹の皮鼻緒の足駄を引ずり德利を提げた小供が俯首いて錢を讀み〴〵通つた。番傘を擔いで萌葱の重箱包を柄の先にぶら下げた小娘が粽を嚙りながら通つた。どれもどれも見馴れた顔だ。

彼れは目では戸外を見ながら、心では昨日の出來事を思ひ浮べた。他郷を知らず書も讀まぬ彼れには、夢にも現にも一村の事件が凡ての智識であり想像であるのだ。て、今日も彼れの貧れな智識の卷を繰廣げて見たが、その全世界には源もゐる、龜もゐる。彼等は繪本で見た綱や金時のやうな腕を持つて、一村に跋扈してゐる。彼等が生ける限りこの村は泰平ではない。私のやうな瘦腕で叶うものか。

彼れは又お竹のことを思ひ出した。その機織姿や田植姿が印象の强い頭にあり〳〵と浮び、兼ねてのひそ〳〵話も、今聞く如く感ぜられたが、ふと源の事に思ひ及ぶと、樂しい夢は一時に消えてしまひ、果してお竹が源を思つてるのか、虎の告口が眞であるか戲言であるか、靜かに考へる暇がない。只彼れを打たんとして源が拳を握つてる姿が見えて、自然に目を瞑つた。

雨は急に强くなり、戸外は一層暗くなつた、板の間には藁屋根から雫が垂れる。隣りの牛が大儀さうに吼える。知らぬ間にお竹が絣の前垂れを頭に戴いて軒下に立つてゐた。

「吉さん、傘を貸してお呉れんか」

吉松は幻影でも現はれたやうにギヨツとして、目を丸くした。

「私んとこに傘があるもんか」と、態と横を向いた。

「家にや誰れも居らんかな」

「ひん」

と、微かに云つたのみて、吉松は薄縁に顔をすり付けてゐる。

「吉さん、先日の話はどないするんかな、考へちや居らんのかな」と、お竹は小聲て云ふ。吉松は默つてゐる。

「ちつとは小降になつた」と、お竹は空を仰いて「なあ吉さん、お節句が濟んだら舟が出るから來てお呉れな」と甘えて云つて、前垂を被つたまゝ尻端折つて駈け出した。

吉松は頭を持上げて、夢見たやうにその後を見送り、姿が見えなくなると又寝そべつた。何故もつと話さなかつたらう、問はなかつたらうと後悔した。「舟が出たら會はう」、節句が濟めばお竹の父も沖へ出て、彼女の身も暇になる。源も龜も海へ行く。さうなればお竹の心も確められる。と思ふと一縷の希望が浮ばぬてもない。明日明後日明後々日、と彼れは指を折つて「八日には腕の强い血を恐れん奴は、島の向う波の荒い沖へ出てしまう」と、にやりと笑つた。

しかし小供の時分から胸に刻み込んだ不安心は、今も消え失せず、ちよろ／＼舌を出す。彼れには血が恐いのだ。盂蘭盆とか氏神祭とか、四季折々の賑ひには、屹度下駄が飛び鉈が飛び、血塗れ騒ぎの起るに定つたこの殺伐な村が恐い。何だつて皆んなが仲よく面白く暮さんのだらう。せめて命知らずの源が死んだなら、此村も少しは穏かになるかも知れぬ。喧嘩の數も少くならう。龜や米も源に唆かされて付元氣て暴れ廻るんだから、親分の源がゐなければ、あんなに無理非道な人困らせをせんに極つてゐる。

「村の爲自身の爲、源が死んだら〳〵」と、二十分も三十分もそればかり考へた。

驟雨模樣のドシャ降りが通ると、密雲が薄らいで戸外は稍々明るくなつた。初野の弄んでゐた津蟹は泡を吹きながら、吉松の頭の側へ這つて來た。彼れはふと思ひ出つて、絲を手繰つて、蟹を柱に縛りつけ、塵紙に寫生を始めた。蟹は飛び出た目に怒を含んで藻掻き出す。紙にもその藻掻いてる樣が生々と現はれた、興が湧いて五枚六枚書き續けたが、やがて惜氣もなく鼻をかんで、丸めて外へ投げた。軒下に羽掻を縮めてコロ〳〵と鳴いてた鷄は、餌と思つたか、反古紙をつゝき出した。低い石ころ道を番傘さして、白裝束の母と赤い顏した妹とが歸つて來る。

「本當に〳〵、源の死ぞこない奴覺えてやがれ」と、母は怒鳴つて、初野を家へ引上げた。初野はぼんやり立つてゐたが、蟹が目につくと、柱から離して居間中を引まはす。

「おのれ糞、源の獄道」「罰當り奴」と、喧しい聲が響き渡る。吉松は呆氣に取られて、母の顏を見上げ、

「お母、どうしたんなう」

「どうしたも何もあるもんか、汝まあ聞いて呉れい、お高姉のとこから戻りに、米公の前を通ると、初野が眞赤な顏をして裸になつとるぢやないか、何をしとるんかと思うて入つて見ると、汝、源や龜が大胡床かいて酒を食うとりやがつてなあ、初野に無理無體に酒を呑ませて踊らせとるんぢやてな、そりを見て、私や腹が立つて〳〵、飛込んで叱りつけてやると、汝、何の事皆んなが惡戯氣出しやがる。終にや私の持つとる鈴を出して、囃しちや馬鹿踊りを初めやがる。大事な鈴が汚れちや、私の命を取られた

も同じてないか、今に見て居れ、斬り殺してやるぞ」と口惜涙を濺いだ。吉松は心ては怖氣がついたが、それても母を慰めるつもりて、

「そがいに怒らいても、私が仇を取つて上げらあ」と云つたが、母は氣がむしやくしやして、常になく邪慳に、

「汝や口ばつかりて、源の腕に叶ふもんか、汝が弱蟲ぢやから、初野まて皆んなに意地められるんぢやがな」

「さう云ひなさんな、私も男ぢやもの」と、吉松は不快な顔をした。母は鈴を眺めては血相を變へてゐる。

（五）

晩餐が終ると、母は繰車へ手を掛けたが、もう氣が落付いたらしく、慳貪な口も利かなくなり、顔色も平生の通りに眠むさうだ。雨がまだ止まぬので早く戸締をして、初野は宵の口から寢室へ入つた。遠方から幽かな聲が風につれて吹き込むのみて、今夜は昨夕と異つて靜かだ。

「吉、もう寢えよ、お母も寢るから」

「私やまだ眠むたうない」

吉松は村長の宅へ繪本でも見せて貰ひに行かうかと思ひ、門口まて出た。見る限り果てのない暗黒世界、後の山も宮の松も闇に沒して、天にも地にも豆粒ほどの光もない。て、急に恐ろしくなつて家の中

へ駈け込んだ。煤ぶつた金比羅神社のお札の前に、燈火は丁子を結んでゐる。彼れは燈明を掻き立てゝ油を注ぎ、その前に端坐して。一家安穏四海泰平の願を籠めた。初野は夢に泣聲を立てゝ「兄よ、來て呉れ、恐いがな〱」と叫んで、口から涎を垂れてゐる。

吉松は自分が妹一人庇うことも出來ぬ不甲斐なさを思つた。親子三人が雨風に曝され、乞食になつて流浪する樣が思はれた。

ても、考へてる中に何時となく妹の傍へもぐり込み、木枕をして眠入つた。斷え〱に苦しい夢に襲はれたが、ふと芥溜て捨つた錆びた瓦釘を持て、宮の松の樹に源を呪つては打ち〱してゐると、愕然と目が醒めた。妹が彼れの肚腹を蹴つてゐる。燈明は消えかゝつてゐる。

丑三つは今時分だらう、宮へ詣つて源を咀ひ殺したい。彼れが死ぬりや一村の災が除けると思ひ込んだ揚句、自分で自分が恐ろしくなつて、蒲團の中へ首を引込めた。

* * * * * *

翌日は五月五日。雨は名殘なく晴れ、冴えた光は一村を包んでゐる。吉松は晝餐の御馳走にと魚買ひに出た。道の左右の葺屋瓦屋、家々の門には五月幟が勇ましく翻つてゐる。小兒等は諸方の幟見物に廻つてゐる。吉松は何となく得意になつて空を見上げてゐると、源が籠を提げて近づき、

「吉公、汝も壯健か、久振りぢやのう」と笑顏をして「沙魚をたんと貰うたから、汝にも分けてやらうさあその鍋を此方へ出せ」吉松は返辭もせず棒立になつてゐる、涼しい潮風が顔を掠める。（をはり）

棒手振

柳川春葉

二月十六日の點燈頃、颼々いふ西北の風に吹かれながら、魚定は茫然飯田町の家へ歸つて來た。

歳は四十五だが、氣風が面白い男だから、何うしても五つ六つは若く見える。酒の爲に頭の毛が薄く成つて、顏は脂肪氣の無いバサケた色艶を爲てゐる。莫大小の襯衣の上に腹懸を着て、出入の大店の印を染めた半纏を三枚、其上に黒羅紗の筒袖外套を襲ね、折屈の出來ぬ程しつくりした紺の股引に、刺布の底へ皮を張つた大和靴を穿いて。兩手を交互に脇の下へ突込んだまゝ、少し前屈に飄然歩いて來る。酒が惡く持越して、よろける度に頭がズキ〳〵するらしい。

横町へ入つてからは、目を瞑つてゐても足數で覺てゐる。桶屋の角を曲つて四軒目の格子を、遠く上眼て見ると共に、悄然とした體て立止まつたが、疾口で何だか呟いて、其から出來るだけ強く顏を蹙めて見た。

追かけるやうに風が吹く。赤い文字で魚定と書いた街燈が未だ暮切らない中から悄然點火てゐる。足許の小砂礫の上に、新聞紙の切端がピラ〳〵飛んでゐる。那様ものを險しい目つきて一寸と睨めてゐたが、思切つて舌鼓を爲ると、

「あゝコン畜生！　又か。」
怨めしげに言つて、急にグッタリ首を垂れ、又力の無い足取で自分の家の門口へ來た。
二間間口の半分は格子て、不漁に休んだ時には魚定が男の力で精一杯拭込むのを仕事に爲てゐるから古びたまゝに何處か光澤がある。一方は水口の腰障子て、二枚とも大きく魚といふ字が書いてある。
門口の溝板を跨ぐと、俄に恐しさうに四邊を見廻して、少時は家内の樣子を窺つて見たが、宛然空家のやうに物音が爲ないので、餘計に氣味が惡く成つたのだらう。靴の踵で左右代る〳〵土を蹴て見たが誰か人が此横町へ入つて來る足音が爲ると、其を機會に忽忙しく格子を啓けた、左の手は袖口から引込めてゐるから、羅紗の鐵砲が入口に支えて撓つたまゝ、ズル〳〵と三尺の土間に入る。
「オイ、お春は居ねえのか。」
無茶に大きな聲を出した勢で、入口の障子を啓ける。六疊の取付の間の長火鉢の向方に、女房のお春が眼ばかり光らして煙草を喫んでゐた。
「返事を爲ねえな。默つてゐちやあ解らねえ。」
「其癖返事を待つのでも無く、面倒臭さうに足袋の鞐を外して、
「俺が留守だつて何も面當に土間を取散かして置く事は無え。」
惡垂口を利きながら火鉢の前に突立つたが、猶且處在が無いから、兩手を入違に脇の下へ挾んで、正面の神棚の燈明を苦い顏て見詰めるのだ。

女房は魚定より二歳年上だが、一方が若く見える處へ、此方が老けてゐるので、てんで釣合が取れない。髪結が上手で、二三年前までは此界隈を一手に引受けてゐたのだが、近頃は奥歯が脱けて元結が締らないといふので、家へ來る花客ばかりを受けてゐる。臍繰が相應に在つて、貯蓄銀行の通帳を後生大事に何處かへ藏つて置く女だ。

「何の事だ。」と魚定は漸く坐込んで「俺の面を見たらお歸んなさい位言つても罰は當るめえ。」

「お株が初まつたよ、又極つてゐらあ。」

「又だ?!。」

其を待構えたやうに定は鋭い聲で言つたが、忽ちジワ〳〵と成つて、苦しげに溜息を吐いた。

「眞實に極つて居らあね。」と女房は冷然と煙管の雁首を抉りながら「三日も四日も家を明けてさ。歸つて來ると八當の小言を言ふのは昔からお前さんの癖ですよ。」

「言はせるやうな種を蒔いて置くからよ。」

「それはね、小言を言はうと思へば、何だつて種に成るのさ。其よりも自分の事を考へて見るが可いぢやないか、お前さん今日は商賣から歸つて來たの?」

腹懸の丼から生臭い手拭を摑出して、魚定は氣持の悪い額の油汗を引擦つた。

「第一其事を考へて見たが可いぢやないか。」

「極つてゐらあ、お前の愚痴を云ふのも。」

うさ。其方の遊ぶのも極つてゐるからね。」

「可い加減に爲ろ、それぢやあ鼬、、にフンだ。」

苦笑を爲て腰の煙草入を拔取つたが、仰向いたまゝ自棄に煙草を詰込んで、

「あゝあ、面白くも無え。」

「お互樣だあね。」と女房も五德の下から吸つける。

「俺は最早自分で愛相が盡きちやつた。斯うも意氣地が無えのかと思ふと……あゝあ自分ながら情無く成るんだ。」

女房は知らぬ顏て、靜に煙草を吸つてゐる。

「全く病氣なんだなあ。えゝおいお春。俺は何うしても斯ういふ病氣なんだ。」

「然うてせうよ。」

「然うてせう?!」と反問して「てせうなんて……茶化して呉れるなよ。正直の處俺は何うしたら此癖が直るんだらう。」

我慢が出來ないといつた風て力任せに頭中を搔挘りながら、

「何うしたと云ふんだらう、俺には少とも解らねえ。おいお前は何う思ふ。」

「自分ても解らないものが、妾には猶の事解る筈は無いぢやありませんか。」

「然うかなあ。」

落膽して、頭を引抱えたまゝ身を揉んでゐたが、其手を離すと共に又大きな聲で嘆息する。

「解らねえ、何故斯樣事ばかり年中性懲も無く行つてゐるんだらう。俺あ知つてる！丁と知つてゐるんだぜ…家ぢやあお前が困つてゐる事を、酒を飲んで遊んでゐたつて、其は明瞭目の前に見えてゐる。」

「格別驚きも爲ないのさ。」

「然うだらうさ。今に初まつた事でも無えからなあ。」と苦笑して「だが然う言つたつて亭主が酒を飲んで、遊毫けて幾日も歸つて來なけりやあ、好い氣持は爲めえ。」

「お調戯てないよ。誰が那樣了管てゐられるだらう。」

「だからよ……其を思ふと飮んでゐる方だつて其は腹ン中を抉られるやうだぜ、酒だつて甘くはねえ甘くは無え、お前なんぞは嘸面白い事でもして、それで何も斯も忘れてゐると思ふだらう。えーだい、訖度然う思つてゐるんだらう。」

「何うだかねえ、他へ行つて聞いて見るが可いのさ。」

と女房は銅壺の蓋を掌で撫てゝゐる。其手の退く度にキラ〳〵光る蓋が又湯氣で舊の通りに曇つて行くのを、魚定は心細さうに昵と見詰めてゐたが、

「あゝ、無理は無えな。何うせ他の腹の中は解らねえから……。」

「其は事新しく言はないだつてもさ。四十面を下げて、小さくつても何でも一軒の家を持つた稼人でゐながら、年が年中此始末なんだもの、他の腹わ解らないとは能くお言だ。妾にはお前さんの腹の中は何

うしても解らない。」

「其通り、怒るのは尤だ。四十面を下げて……あゝ然う言はれるだらうと俺は丁と覺悟してる。稼人の癖に月の中に三度も四度も家を空けて、錢は消費いて了ふ。お買出しの資本も無えぜ。」

「へえ、然うですか。」と横を向く。

定は腹懸の中へ手を突込んで、少し體を傾げたが、銀貨と銅貨を洗ひざらひ摑出して、

「こら、此處に一兩と少しゝか殘らねえ。」

女房は益す冷淡に、其方を見やうとも爲ないので、未練らしく勘定を爲ながら、

「是ぢや何の足にも成りやしねえ。有つたつて無くつたつて同じ事だ。」

「何うも爲方が無いのねえ。」と女房も此時ばかりは心から溜息を吐いた。

「全だ。悔んだつて取返しがつかねえ。けれども其を知つてゐながら斯ういふ馬鹿を爲てゐるのだからなあ。」

茫然掌の上の金を　めてゐると、

「だけどねえ、妾は最う諦めてゐるの！」

「何を？。」と定は蘇生つたやうに其方を見た。

「是からはお前さんが何んな事を爲て來やうとも、何にも言ふまいと。愚痴も自分の方で飽きたからね。」

「あゝ然う言ふだらう、俺は疾度然う來るだらうと覺悟を爲て來たんだ。無理は無え。」

「お前さんは護謨のやうな人なんだから、少しの間ピンと張つて置いたつて手を放せば直に舊へ戻つて了ふ。年が年中同じ事ばかり爲てゐるんだもの。」

「俺は斯ういふ病氣だ。」

「否、其がお前さんの生地なんですよ。」

「然うかなあ。」

「而して歸つて來ると、那樣哀ッぽい事ばかり言つてさ。眞實に其辯解だつて聞飽きてゐる。お前さんは何時も女房の前で芝居を爲るのだからね。」

「芝居だ！俺が芝居を爲る！」と大きな聲で「馬鹿な事を言ふな。同時俺が……其だから困るんだ。大概お前だつて、え、俺の此腹ン中が解らねえのか。」

「だから初めから解らないと言つてゐます。」

「困るなあ、何てえ張合の無えんだらう。女といふものは。」

「男といふものは、物事が解つて、確乎してゐるわねえ。」

定は胡坐の兩膝に手を當てゝ、力一杯推つけてゐたが、

「俺は然うまで見違へられてゐるのかなあ。」

一心に見据た目からボロ〳〵涙を零し初めたので、

「まあ、何うしたつて言ふの。」

「歯痒くつて爲やうがねえ。」
「お止しなさいよ、好い年を爲て……お前さん未だ醉つてゐるのだらう。見つとも無いぢやありませんか。」
「大きなお世話だ。手前には最う何にも言はねえ。」
「又言ふ事も無いのだらう。」
「聞かせたつて眞面目に受けて呉れねえのだから、迚も駄目だ。」と檢束無く泣きながら「言ふに事を缺いて芝居だなんと疑りやあがる。箆棒奴、芝居か、眞劍か、能く目を開いて見ろ。」
「だつて眞劍だと思つた處で、別にお前さんを褒める譯には行かないからね。」
「誰が褒めろと言つた、褒めろと勸辨しろとも、俺は那樣事を言ふんぢや無え。是だつて少とは意氣地の有る人間だ。」
「おや然う？」
「嚊の前だから、虚飾も外聞も其方退けて、斯樣に底を破つて見せるんだ。他の氣も知りやがらねえて。」
と勃然に成つたが、忽ち勢が挫けて、
「だが其も無理な注文なんだらう。疑られるのも俺が惡いからだなあ、斯樣事を言つて揚句の果はお前の貯めた金を出せと來るんだから、然う思はれるは當然かも知れねえ。」
「だから此前にも言つた通り、帳面はお前さんに渡すから、預けて置いた金を皆引出して使つて了ふが

可いのさ。其上お前さんの取前も片端から使つて、天秤棒まで叩賣つて了へば最う思置く事は無いだらうから。何うせ妾は野垂死を爲る意さ。」
「那樣事を言つて呉れるなと言ふのになあ。お春、俺はお願だ。」
「ても何うせ然う成るに極つてゐるから、一層の事早く片を附けた方が可いぢやありませんか。」
「怒るのは尤だが、然う言つて呉れるなよ。此方は立つ瀬が無え。」
とウン／＼悶掻きながら、
「帳面も資本も何も要らねえ。あゝ何にも要らねえよ。」
「其ぢやあ何うする意なの？資本が無くつて買出しは出來ないに極つてゐるのに。えゝお前さん、何う爲るんだね！」
「生きてゐるのが馬鹿々々しい。」
「其はお互樣さ。」
「お前なんぞは自分で自分が解つてゐるから、未だ張合も有らな。俺を見ろ、自分が解らねえぢやあ、全く生きてる效が無からうぢやねえか。」
「那樣事は醉漢の言種だよ。其醉漢を亭主に持つた女の事を考へて見るが可い。」
「其も氣の毒なものさ。」
「有難う、お前さんも隨分察が有る事！」

定は何にも言はなかつた。て、五六分間は互に火鉢の中を見詰めて、相變らず嘆息ばかり吐いてゐたが、

「お前さん！」

直に顔を揚げたが、此方は一寸返辭が出ない。

「又平常の處なの？」

「違ふんだ。」

「ぢやあ何處です。」

「品川よ。」と苦り切つて「新公が連だから。」

「何うせお前さんが引張つて行つたのでせう。」

「俺は最う辯解は爲ねえ。引張らうが引張られやうが、何の途罪は輕くならねえんだ。」

「然うともねえ。」

「だが、然うは言ふものゝ、今度ばかりは俺も弱つたぜ。丁度彼の日には到底不漁て、思はしいものは一つも無しと來たから、今日は休業にしやうと思つて茶屋で一服喫んでゐると、其處へ新公が茫然入つて來てからに、斯樣馬鹿な事は無え、何うせあぶれだから其處邊で一杯やらうと言ふんだ。此方も自暴だけれど、先日の事も有るからなあ、實は逃てえと思つたのよ。」

「思つたゞけなんだらう。」

「まあ聞きねえ。全く思つたゞけなんだ。其から一杯飲んで、今日は奇麗に別れやうと言ふと、新公が何うしても交際へとつて放さないからしぢやねえか。」

「放れも爲ないんだ。」

「まあ默つてろと言ふのに、て、愚圖々々してゐる中に時刻は夕方に成るし、醉つた勢に電車へ飛乗つてとう／＼品川へ行つたのよ。其からお前、今朝まで飲續けだもの、頭は破れるやうだし、腹工合は惡し、今日の心持つたら宛然大病人だ。」

と額を抑へて、

「俺は斯樣思を爲ても酒と離れられねえのかなあ。」

「呆れもしない。」

「他は然うだらうな、自分で呆れた。今度といふ今度こそは心から愛想が盡きちやつたぜ。其も面白く飲んでゐるんなら未だ可いが、少しの間だつて氣の紛れる事は無くつて、其苦しい事つたら身も切られるやうだ、醒めかゝると可厭な氣が爲て、居ても立つても我慢が出來ねえから、自暴に成つて飲むんだ醉つたつて寐られやしねえ、段々冴えて來て、其は家の事も思出せば、商業の事も氣に成る。斯樣辛い思を爲て何で酒を飲むんだらうと思ふと、俺は實際涙が出るんだぜ。だけど妙だなあ酒を見るとふらふらと其方に引かれて行つて、斯う何かに魅入られるやうだ。

可厭だ、可厭だと何程振切つて見ても、其ぢやあ又壽命が盡きて了ふやうな心持が爲るから、秘と一

杯飲む、飲むと最う何うしても好い頃て濟ませなく成つて、又苦しみながら底の底までやらかして了ふんだ。

お前なんぞは、屹度俺が面白がつて、浮かれてゐるんだと思ふだらうが、然うぢや無え、此方は死ぬ苦みだ。」

「まあ何うでも可いのさ。面白からうが、苦しからうが、他人に泣を見せる味は同じなのだから、最早那樣事を言ひつこ無し！」

「然うだ。同じ事だ。お前に心配させるのはなあ。」と膨ぼつたい目を瞑つて「あゝ何うしたら可いんだらう。飲めば苦しいし、飲まなくつも苦しいし、後悔したつてお前は本氣に爲て呉れねえし。」

と言つて見たが、相手が默つてゐるので、

「本氣に爲せると後が又苦しい。あゝ駄目だ。」

フイと立つたのを、女房は危險さうに見てゐれば、押入から夜具を引ずり出して、股引も脫がずにゴロリと寐て了ふ。

「而してお前さん、明日の事は一體何うするの？」

「俺には解らねえ。」

「ぢやあ勝手に爲るさ。」

ど力任に煙管て火鉢の緣を叩くと、魚定は夜具の中から、ムク〳〵顏を出して、

「怒つたのか。」

「…………。」

「成程、腹が立つだらうなあ。」と又泣聲で「何うでも爲て呉れ。俺は誰かに思ふ存分酷い目に逢はされて見てえ。斯樣風で愚圖々々生きてゐるよりか、腦天から玄翁か何かで一思に叩潰されてえな。然う爲れば何處か行く處へ行けるだらう。」

「可い加減にお爲なさいよ。それよりも明日の事は何うするのだね。」女房は金切聲で喚く。

「病人は何時死ぬか解らねえんだ。」

「お前さん何處か惡いのですよ。」

「酒……酒で苦しむ病だ。」

「那樣病が有るものか、飮みたがるのはお前さんの生地だと言ふのに。」

「生地?!可厭な生地だなあ。」

寢返りを打つて、大息ばかり吐いてゐたが、旋て靜に成つたので、お春が云つて覗いて見ると、定は目に一杯涙を溜めて、何時の間にか寐入つて了つたのだ。

（完）

池畔

野上八重子

聚芳園て開いた同窓會て、久し振りに龍子さんに逢ふと、
「一寸と此方へ入らつしやいな、お話があるんだから。」
と先に立つて池の方の小路へ行く。
「何のお話なの？」
と敏子はついて行きながら後から聞くと、
「まあ、人の居ない所へ行きませうよ。」
と山椿の中のだら／＼坂を下りて、小いお稲荷樣の祠の横から池の端へ出ると、大きな若楓が水の上にのし掛かる樣になつた下に、疊一枚ほどの自然石が、平たく横はつて居る。
「此所にしませうか、彼方は五月蠅くつて」
と云ひながら、龍子さんは袂からハンケチを出して、
「お敷きなさいな。」
と石の上に擴げる。
「私なら持つてゝよ。」

と敏子も右の袖を探つて、縫ひ取りの洒落れたのを、龍子さんの薄紅色の横に並べた。頭の上はすぐ楓の枝で、蒸す樣な行く春の日射しを、綠の葉が涼しく遮ぎつて居る。

「私ね、貴女に伺つたら分るてしやうと、思つたんですが。」

と龍子さんは敏子に並んで腰を下ろすと、

「節子さんが御離縁になつたつて本統?」

と低い聲て聞く。

「まあ、御離縁になつたの」

と敏子は驚ろいて涼しい眼を見張つた。節子さんと云ふのは矢張り同窓で、昨年近縣の豪家へ片附いたお友達である。

「ぢや貴女も御存じないのねえ。」

「いゝえ少しも、如何して御離縁になつたんてしやうねえ。」

「如何いふ譯てすかねえ、私もまだ委しい事は知らないんですけれどもね、何でも旦那樣と仰しやる方が有名な放蕩家なんてすつて。」

「いけないのねえ」

と敏子は濃い眉の根を一寸と寄せる。

「夫てね、是迄隨分辛い事計りおありなすつた樣な話てすけども、人の噂て何んだか本統の事は分らな

いんですよ、だから貴女は御存じか知らぬと思つて。」
「全く始めて伺ふのよ、もう久しく皆様にお手紙も何にも上げないもんだから、誰方が如何なすつて入らつしやるんだか、一寸とも分らないんですもの、學校を出ると筆不精になつてねえ。」
「本統ですわ、私なんか殊に、お小使帳をつけるんだつて、怠けて計り居るんですもの。」
と小い口許で輕く笑ひながら、光るもの丶嵌まつた指先で、そつと丸髷の鬢を押へる。
前の池には、薄藍の水が底濁りに溜まつて、所々若根の蓮が、皿程の葉を浮べて居る。岸邊には蘆もある。杜若もある。水を拔く一尺の高さに、紫の花がちら〱見える。其上に細い一枚橋がかゝつて、夫を括きに廣い池が、覺束ない瓢簞の形をなして居る。周圍には、綠の葉、綠の枝が彼方此所に花物の點々を交えて、疎らに池の形なりに連なつて居る。橋際の燃え立つ樣な耕の一團は八汐であらう。
「彼花を見ると、私すぐ郭公を思ひ出してよ。」
と龍子さんは凝と眺めて居たが、
「あら、あの向の柳の下を通つて居らつしやるのは芳子さんぢやなくッて」
と云ふ。
「何方に」
「ほらあの橋向の、今柳の蔭に成つたわ、誰方かと大勢御一緒の樣よ。」
楓の枝が邪魔をするので、少し伸び上ると見えた。五六人華美な袖や裳裾が塊まつて、向の岸を橋の方

へ方へ來るのが、木立の間や花の蔭から見えたり隱れたりする。一番右の丈の高い方の横顔が、龍子さんの云ふ通り芳子さんらしい。

「此方へ入らつしやるのかしら。」

「さうね、あの芳子さんの後に居らつしやる方は、慥か乙組の方ぢやなくつて。」

「皆乙組の方のやうね、あの金鎖を掛けてる方?」

「いゝえ、其横の藤色の御紋付の方」

「あゝ彼の方はほら、板井さんとかつて、何とか博士に入らしたつて評判の方でしやう。」

「あの方がさうなの、さう、御評判程の方ぢやない樣ねえ、芳子さんの方がずつと御立派だわ。」

「本統だわねえ、あら此所が分つたと見えて、芳子さんが入らつしやるわ。」

と云ふうちに、芳子さんは連を離れて、一人で橋にさしかゝつたが、中程まで來ると立ち留まつて、二人の方を見て莞爾する。綺麗な影が橋の上から池の水に落ちた。

「早く入らつしやいよ。」

と龍子さんがハンケチで招くと、重ね草履にお納戸がゝつた袷の裾を足早に捌いて渡つて來た。

「何方に居らしてるのかともつて、先刻から探してたのよ。」

と龍子さんの横に腰を掛けて、

「本統にお久し振りねえ。」

と人懐つこい笑顔をする。いつの間にかすつかり奥樣らしくなつて、つやつやした丸髷に、赤を嫌つた木色の手絡も上品である。敏子は二人丸髷を見比べて、自分も髷に結つて來ればよかつたと思ひながら、そゝけた束髪の後れ毛を白い手でかき上げた。

『そうそう敏子さん、あのお話は芳子さんが御存じかも知れないわ。』

と龍子さんは左側の敏子を見返る。

『そうね、芳子さんが一等御近所なんだから。』

『なアに』

と芳子さんは向から不審らしい顔をむける。龍子さんが節子さんに就いてこれこれだと話して、

『本統に御離　になつたの？』

ときくと、

『えゝ。』

と細い聲に成つて、

『お可哀想なのよ。』

と云ふ。

『貴女はもうお逢ひになつて。』

『此間ちよつと宅に入らして下すつてね、種々お話を伺つたんですけども、女はあゝした羽目になると

心細いのねえ。』

『矢張旦那樣がいけないの？』

『そんな事はねえ、節子さんがあゝした溫順しい方だから、何にも委しくは仰しやらないけどもね、人の話によると隨分な方らしいのよ、今度の事なんか聞いて見るとまるで無茶ですもの、何でも先月の末とかにね、お父樣の三週年の御法會があつて、久々でお里歸りをなすつて居らつしやると、突然家風に合はないからとかて云つて遣したんですつてねえ。』

『非道い事ねえ。』

と二人は一緒に云つた。

『夫に節さん許のお嫂さんと仰しやるのがね、兄樣の出て入らつしやる會社の社長のお孃さんとかで、お內輪に中々勢力がお有りなさるらしいのよ、その上お母樣は兄樣とは義理あるお母樣と云ふんですからね、お歸りになつてゝも、いろ〳〵御心配らしいわ。』

『それぢや、如何してねえ。』

と龍子さんは思ひ入つた體で、

『學校に入らつしやる時分には、級でも彼の方が一等無邪氣で、苦勞がなさそうだつたのにねえ』

『全くねえ、笑ふ時なんかこう深い笑窪が立つて、私あの顏が今でも眼についてゝよ。』

と敏子は三年前の學校時代をちよと思ひ浮べる。

『今はもう彼時分の節子さんぢやなくつてよ、御様子なんかすつかり變つてねえ』
と芳子さんはしんみり云つたが、
『變つたつてば、彼繁子さんを御覧になつて。』
といふ。
『いゝえ、入らして？』
と敏子が聞くと、
『入らしてゝよ、私先刻彼方の四阿の前で一寸とお目にかゝつたんですけどもね、西洋服なんか召して大變なハイカラにお成りなすつてよ』
『皆様がいろ〳〵に變つてしまふのねえ。』
と龍子さんは凝と芳子さんの顔を見たが、
『貴女だつて隨分お變りなすつたんだわ。』
と云ふ。
『何故？』
『何故つて、ねえ敏子さん。』
と龍子さんはにこ〳〵しながら敏子を見る。
『本統にお變りなすつたわ。』

と敏子も笑ひながら合槌をうつ。

『厭ねえ、お二人て同盟なすつて、私が變つてるなら、貴女方だつて矢張り變つて入らつしやるんだわ。』

と芳子さんは中々負けぬ。

『だつて、貴女が軍人の奥様にならうとは、全く思ひ掛けなかつたもの、ねえ敏子さん。』

と龍子さんは、又敏子を味方にする。芳子さんは學校時代は、軍人が大嫌ひな方であつたが、今は陸軍大尉の奥様である。

『だから變つたと仰しやるの、非道いわねえ、今だつて私軍人は大嫌ひ、ちつとも好きぢやありませんよ。』

とわざと切口上で云つたが、眼の中には笑が溢れて居た。

池の左で太鼓が拍子よく鳴り出した。餘興の太神樂が始まると見える。（完）

小曲拾篇

吉井勇

奇蹟

あな大空に數知れず、
象形文字あらはれぬ。
この時遠く東より
灰色の髯ながく垂れ、
耳環をかけし人きたる。

南の室

ただ見る一室。――溫かに、
窓を匂はす瑚あかり、
眞名蠻を焚く大香爐、
豹の敷皮そのうへに、
置きしは誰そや、鸚鵡の骸。

指語

また指語す、怪しきをとこ。
舖石の冷たきゆふべ、
人だかり、何かは知らね、
立ち騷ぐ背後にありて
また指語す、怪しきをとこ。

豹

豹とこそ喚べ、わが少女。
豐かにかづくその衣、
ほのかに紅きその笑、
ああ南國の橄欖の
森に放たむ君なれば。

倭寇

朱印の船旗はたと鳴る。
ただ聞く『八幡大菩薩
守らせたまへ、勇ましく
萬里の海を渡るべく。』

朱印の船旗はたと鳴る。

金曜日

金曜日、あはれさが惡し。
我船よ、帆をな張りそね。
赤嘴の惡鳥あまた
飛び過がひ何處ともなく
消えゆきぬ。あはれさが惡し。

劊手

起て、劊手、斧を揮ひて、
まづ碎け、大日輪を。
さならずば斷頭臺に
われを斬る刹那虛空の
火は飛びて汝をし燒かむ。

墓庫

あなあはれ、暗き墓庫、
あなあはれ、七日經ざるに、
あなあはれ、黑き棺の、
あなあはれ、うへに銘せる
あなあはれ、名こそ消えゆけ。

復讎

復讎の思はにがし。
今日もまたひとり忍びぬ。
果敢なくも梢を叩きて
わがうたに悲しき歌に
頰の瘦もいよいよ淸し。

囚人

いまわれ聽きぬ、地の底
幾百尺の石床に。
城の主なる暴王の
影に驚き飛び立ちし
濠の鵠のはばたきを。

阿片

長田秀雄

追憶

夜深き惡の牢獄に、
悔と恐と鬱憂の
三重の鎖につながれて、
わが靈魂はなき叫ぶ。

疲れてくらき膓の火は、
ぐらすの窻に照り映つる、
きく、いま、我を縛めし
妖女の高き凱歌を、……

響らぐ歌は、ぐらす戸に
血のごとく泌み輝きて、
消え行く、とみる、數しらぬ
病める男の顏と化る。

妖女の戀の褪せし華、——
渠等默みてうちならぶ、
まなかに、あなや、髮みだし
蒼ざめ歎く我相。

悲哀

悲哀の琴の淸搔の顫く響。

わが腦をからみたる脈絡に、
濃き紫の血ぞ走しる……

迷宮の最極の
白琺瑯を疊みたる
秘密の一間、黒貂の衣まとふ
わが戀人の死屍を、ひしと抱きしめ
身は白き石に化り行く。

馬、車走せちがふ
廣き街、そのただなかに、
童貞等不思議の香を焚きくゆし、
鐘うちならし、愁はしく挽歌うたひ、
大理石の冷たき我を
土深く葬れり。

いと暗き地の底に、
繁華の響ほのにきき、
太き黄金の縄をもて、十重廿重
いましめられし我石の木乃伊は、いまぞ
墮ちて行く、夢の深みに……

わが腦をからみたる脈絡に、
濃き紫の血ぞ走しる、——
悲哀の琴の清掻の顫く響。

沈丁華

秋庭俊彦

君はその夜の濡髪に生火のしづく
いと熱き膏油をかをし、悲しみか
愁ひかしらね、あてやかにまた蕭やかに、
染模様色めく衣を裁ち縫ひぬ。

春の夜の風戸の隙ゆさざめき靜に
灯にたはれ、吐息のしめりおりおりに
夢にのみ見し物影の日をありありと
誘ひきつ、『あはれ一期の餞別よ。』

いまも瞳に曇りつつ浮びてそくれ、
うとましや、君が嫁ぎの春の衣、
ああ歡樂の絲車それにかへらず。

暗き一室に額垂れてひとり歎けば、
さびしさの想に似たる沈丁華
萎えゆくかをり其處となし、愁はくだつ。

瞬間

とどろかに四輪車きたる。
紅き灯のなげきほそぼそ、
いま夜の底にしづみし
街のなか、館のかげを。

わが心微かに顫ふ、
あはれその重き響に
ひしがれし想のみだれ、
眞黑なる蹄の音よ。

さもあれや、つとこそ匂へ、
衣の香の夢のすかがき、
たをやぎし朧ろの姿、

しづかなる思の色に。

うつらゆく路のかたへは
壁つづき闇の仄めき、
馭者の子がひしと鞭うつ
氣勢よさ。避けつつながむ。

轣轆と、あなつかの間に
目をよぎる空虛の櫃、
扉透く玻瑠のつめたさ。
かくてまたわが夜はさびし。

和歌彙選

○　武田斐雄

わが肉を遠くはなれてかへりこぬ魂のごとくに日は沈みぬる
ゆく末をほのみるほどにほのじろき光もなくて年は來にけり
朽ち果てしわか胸の戶にうつだかくたき木あつめて風を待つ君
捨てられつまた捨てゝみつ遂にわかとゞまりぬべき天地を見ず
笑むとみていつしか眠る幼子のまなざしに似てあけくるゝ日か
雪消の草に眠れる大牛のかたちとなりぬ遠の島山

○　中野紫葉

同じ音に風の吹きけり同じ戶にさへぎられつゝなにもとむらむ

うつくしう死をば飾れと大なる幹はわなゝき葉をちらすかな
君を得て望たらひし昨日すら明日のまへにはなにの價ぞ
日のめぐりしばしとゞまれあゝ見ずや羽ばたきだるう巣に急ぐ鳥
歌悲しいつはりながら歌ひつゝ經し年頃もおもひしられて
空青し海はも青し中にわれ仰げど俯せどたゞ少きかな
風ふけばふくにつれつゝ木の葉みなきたなき葉裏そのまゝに見す

○　大津照水

秋日和杉とがり立つ裏山に半輪みゆる晝の月かな
月と日は追ひつ追はれつ世をめぐるめぐるが中にわれ老いてゆく
十月の野の夕風にみだれとぶ小鳥の如くしろし茅の花
首をのべみなゝつかしきまなこしてわれをながめぬうまやの馬は

○ 西井金羽

北極の寒き日のごと戀ざめの眼して少女は今われを見る

○ 橋田濤聲

潮みちぬ夕月さしぬ大灘は松魚の腹の眞白波して

風の日は熊の肉賣る北國の野に立つ小さき藥の家思ふ

○ 小木鳥城

大理石敷きたる道をゆくやうに足(あと)の音も清き雪の月夜や

さらてだにせまき胸内(うなち)に憂草植ゑに來たまふ人にくからず

○ 村上城岳

炭燒くと出てにし人を如月の雪さえなばとまつや丹波女(たゞめ)

○ 小林小朴

わが鷗海にはゆかすぱらいそうありと言ふなる御瞳の中行く

わが行くは焰の海よ友綱も梶も熱して火とたゞれたり

○ 勝島秋水

泣き玉ふ君慰めん歌もなく暮れゆく春の夕空を見る

○ 山岸蓼雨

情こもる母がみ文に涙して雁ゆくかたに掌(て)をあはす夜や

○ 佐藤琢琅

春の潮月に青照りひた〳〵と君住む島によせてゆくかな

○ 加藤忠治

はる風は小琴にひゞき草に吹きわが世を花にかざりてぞ行く

○ 西平守亮

空と海二人が胸の形しぬとすればくもり狂ひ波立つ

○ 志氣風美

冬の日の薄き光に佳き人は泣きぬ祈(いの)りぬもの戀(こ)ふるさま

○ 村田愛美

哀愁は重う寄せ來ぬ秋の日の落葉のうへにうすく照る時

○　梶原重雄

春の雪鹿の子まだらや山畑の芽して幾日の麥生の上に

春寒し神の杉生は木の花のみだるゝ如くあわゆきぞ降る

春の灯の赤きに向ふしかはあれわか頬の色を殊更にみよ

○　佐野翠坡

天上のしろがねの花一瞬に散るとし雪の空あふぎ居ぬ

君とわが二尺のひまに一の謎いとおごそかにありてえ去らず

ねざめては母さぐりなくみなし子の如くむせびぬくらき野の水

いにしへの心來たりぬいとほのに息つく草に雨のふるさま

けしの花火もゆる如き唇のにほひをひめてくれなゐにさく

あけぼのす香爐くゆれる春の日の帳をも見ゆるむらさきの雲

亡者たちかなしき節を水底にうたへりときく冬の川かな

かさこそと落葉に風し月光の青める下になみ立てる墓

應募和歌東京小石川區原町百三十三尾上柴舟宛の事



蜂の巣

花莚蜂の巣を見て移しけり　へき生

むら〳〵と巣を出る蜂やはたゝかみ　同

蜂の巣や櫻に近き堂の軒　同

巣を遠く蜂の飛び去る日和哉　同

畑近き蜂の巣の藪燒かれけり　同

夕ぐれや猶巣をめぐる蜂一つ　同

うかと巣を覗いて蜂にさゝれけり　同

巣の蜂の人驚かす貸家かな　同

蜂に逃げて遠くより巣に礫かな　同

巣の蜂や人聲すれば出て來る　同
大甕の如き蜂の巣落としけり　同
巣を守る蜂のうなりや花の雨　同
蝶一つ蜂の巣近く過ぎにけり　同
三度巣を燒かれて蜂の來ずなりぬ　同
飛花落花蜂の女王や巣を守る　同
蜂の巣や樱の中の大悲閣　同
蜜蜂の巣提げて歸る樵夫かな　同
蜂の巣に馬鹿婿勇を振ひけり　同
巣守る蜂花盜人をさしにけり　同
巣を造る蜂の去來や花日和　同
蜂の巣や花の主じの覗き過ぐ　同
夜の蜂落花の風を怒りけり　同
蜂の巣の撞鐘程に太りけり　同
くれ遲き巣を守る蜂や花の軒　同
洞中に巣造る蜂の出入りかな　同
蜂の巣やひつそりとして古機屋　同
蜂の親巣に寄る人に迫りけり　同
蜂の巣や遂にさゝれし惡太郎　同
蜂の巣を厠の屋根に見つけたり　不言
野良仕事蜂の巣を燒くいとま哉　星陽

黄蜂の巣あるべき杉の道暗し　殘雨生
蜂の巣や半ば碎けて古き軒　冷茶生
巣の口に尻並べをる子蜂かな　垂柳
蜂の巣をとつて童の凱歌かな　捨小船
蜂は巣を嫁女は機を日もすがら　柳子
巣籠るや雨の日永の德利蜂　三命
蜂の巣を蜂の留守見て落としけり　賓水
ねころんで軒の蜂の巣目に入りぬ　枝蛙落
枝ながら小さき蜂の巣折取りぬ　馬太
蜂の巣の太りて春は暮れにけり　傑舟
蜜蜂の巣や蠶室の椽の下　小蔭
蜂の巣を落す勿れも我子かな　連雀
蜜蜂の箱ある軒や梭の音　緑水
水攻や火攻や蜂の城落つる　天香
さゝやかに土蜂の巣や蘭の鉢　鹿の子
巣に礫蜂の怒を恐れけり　夜色
蜂の巣の一階成りし遲日かな　草童
灯ともせば蜂の巣のある燈籠哉　秋葉
鳥交る軒に蜂の巣かぴけり　笑柄
蜂の巣や法三章の扎朽ちて　總子
蜂の巣に酒をふきけり曆博士　奎村

蕨採り山蜂の巣に怖ぢ歸る　四緑
蜂の巣に首をすくめて通りけり　骨壺
七泉を覆ふ楠木や地蜂の巣　十湖
巣をつくる蜂に枯れたる接木かな　夜光
鋏み落とす蜂の巣小さき庭木かな　六絲
蜂の巣や十八番の札所寺（日光）　同
落とされし古巣を去らぬ蜂哀れ　有無
蜂の巣や杣人が假屋の板廂　同
巣を出でて菜の花畑や浮れ蜂　菊舟
巣に歸る蜂や桃より櫻より　同
蜂の巣に花きりまどふ女かな　曉嵐
拂はれし巣に飛ぶ蜂のまどひけり　同
蜂の巣や繪馬堂の繪の櫻狩　南若
脫け出でゝ巣を幾めぐり子蜂哉　同
蜂の巣の焦げし燒野の茨かな　白藤
蜂の巣や瓦落ちなん寺の庫　同
蜂の巣に名高き寺や荒れにけり　尺水
蟇拔けて空（カラ）の蜂巣に怖ぢにけり　同
蜜蜂の巣や晝閉す里の家　木瓜
巣の蜂に追はれて走り走りけり　同
蜂の巣に皆が得行かぬ厠かな　渭南

道場や古りし蜂の巣いつまでも　同
砂山の宮に蜂の巣ある木かな　路傍草
落ちてある蜂の巣蜂の死してある　同
蜂の巣に女姦し臺所　濛雨
鍬の先き納屋の蜂の巣落としけり　同
蜂の巣や寶物多き寺の藏　李王
蜂の巣に城門古き扉かな　同
蜂の巣のあらぬところにかゝりけり　同
毒草の花咲く土手や地蜂の巣　蓮哉
蜂の巣や禪を學びに通ふ寺　同
蜂の巣に物干竿をつきあてし　同
蜂の巣に軒もる雨の傳ひけり　鬼洗
蜂の巣や萱ふき代ゆる宮の屋根　同
毒蜂の巣を燒きなやむ人數かな　同
蜜巣箱物干竿のかゝりけり　京杜
何怒る蜂騷しき巣箱かな　同
羽ばたいて鷄上り鳴く蜜巣箱　同
花曇蜂の少き巣箱かな　同
自然薯の蔓引けば蜂の巣の見ゆる　小魚
蜂の巣のありて此門入らしめず　同
蝶々の目に蜂の巣の怪しけれ　同

蜂の巣の棤うらゝかに旭かな　同
蜂の巣を退治る寮の日永かな　同
蜂の巣や四門の中の發心門(山寺)　同
蜜蜂の古巣もありて賣屋敷　青城
蜂の巣や厠の枇杷の葉隱れに　同
蜂の巣や奈良のはづれの鍛冶が軒　同
醫三代蜜蜂を飼ふ蜂屋かな　同
似我蜂の巣穴掘りけり闌の砂　同
巣を造る蜜蜂を見よフランクよ　同
蜂の巣や茅花の中の拘杞一木　石鐘
試作場のなぞへ菜畑や蜂屋置く　同
鰐口を打てば巣の蜂亂れ立つ　同
蜂の巣や室の日裏の釣進　同
蜂屋置くや射㙇の裏の花畑　同
學寮の蜂巣落とすや夜三更　同
蜂の巣を夜毎鐘撞卿ち來る　同
蜂の巣や松の根芝の瓦塔　同

本回の應募者は八十名。句は小魚、石鐘、馬太三氏の五十句づゝ、李王氏の四十七句、へき生氏の四十四句、木瓜氏の四十二句、京杜、南若二氏の四十句、十湖、夜光二氏の三十七句づゝ、白藤氏の三十五句、鵝子、笑柄二氏の三十三句づゝ、青城氏の三十一句、淡雨氏の卅句等仲々盛んにて、計千三百四十八句の多きに上りぬ。

募集課題

接木　三月十五日締切
百日紅　四月十五日締切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事。

羽後瓢骨君に答ふ、句數は五十を制限と爲し居れり。

蜂の巣や下駄で上る浮見堂　路葉
風鈴にかも似て軒の蜂巣哉　胡角
蜂の巣の墻に兄弟閲ぎけり　同
蜜蜂の巣や靜養の花の園　三好
蜂の巣やうつろになりし大榎　牛村
破れ垣に蜂の巣見ゆれ明屋敷　方外
たゝき落す巣に執念の小蜂哉　羽川
蜂の聚巣やあらなんと覗きけり　同

右は締切後に到着したるものなれども未だ本社へ選句を發送せざるうちなりしを以て此處に差し添ふることとなしたり。



世界教と國家

松逕子

國家と世界教とは兩立すべからずとは、加藤博士が其著「我國體と基督教」に於て言明したるところ、之に對して、そは餘りに淺解なり、妄斷なり、沒思慮なりとて、幾多世論の紛起を見たるが、誠にそは淺解なるべし、妄斷なるべし、將た沒思慮なるべし、而かも國家といへば分在的なり、世界教といへば統合的なり、分在的なるが故に前者には此世界に多くの主權者あるを是認せざるべからず、統合的なるが故に後者には此宇宙に唯一の主宰神あるを豫想せざるべかず、多と一、ては恰も柄と鑿とにあらずや、一寸聞きたるだけにては如何にも金輪奈落その調和融合を見るべからざる兩個の觀念ならずとせんや、淺解と誹らば誹れ、世には淺解者の多きを如何せん、然らば沒思慮と妄斷と相繼いて來るも亦强ちに已むべからざる理數なるべし、加藤博士の所論は偶ま世に數多き此種の淺解者の代表として現れ來り、敢て明確なる江湖の判斷を仰がんずるに似たるものなり、換言すれば兎も角も博士は此る機會を與へたる者此點より見れば博士の勞は決して徒に終らず。

されど世の論者には或は單に國家と宗教とはその概念を異にすといふ唯一の主張より、直に兩者は沒交涉なり、國家は權力關係に於て立ち、宗教は唯信仰の上に成ると、左も事もなげに言ひ消たんとするあるは吾人の首肯するところにあらず、右向する頭と左向する頭と、之が右向の體と左行の體との個々異なるものの上に安んぜられなば論はなけれ、然らずして唯只一個の體に而かも右向左向兩個の頭を付せんか、所謂兩頭

の蛇、徒らに沙場に蜒蜿して備さに迍邅の苦を嘗むべきが如く、假令一は權力關係に立ち、他は然らざるにせよ、國家の大權に統轄せらるるそれも我なれば、宗敎の慈光に普照せらる是れも亦我なり、その一個の我にして同時に二つの異なる觀念を包容せんことは、恰も兩頭の蛇の如く、そも何れに向つて適歸せんかの嘆なかるべからざるべし、之を暫く歷史の印せる痕に見よ、國家と宗敎とは如何に中世紀に於て紛糾混亂の關係を示したるぞ、初には敎權能く王權を壓してオツト大帝以來歷代の帝王の即位は盡く羅馬法王の批準を仰ぐ、而かも其間常に衝突あるを免れざりしかば、後遂に其弊に堪えずして獨帝は却て敎王の選擧



に干渉するに至る、即ち初は王權敎權に降り、後には敎權王權に降れるなり、此に至つて英傑グレゴリー七世現れ、敎、王、二權の分野を明劃して再び敎權をば王權の羈絆より救ひ、斯て有名なるヘンリー四世との確執を生じ、彼をして遂に降をカノツサ城外に乞はしむるに至る、而かも餘憤は猶ほルイ五世に傳はり、復も法王パスカル二世と隙を生じて、ウヲルムスの會議となる、次いで法王イノセント三世に至り、二權の分野は亂れて再び王權は敎權の下に屈し、後代政治的思想の發達を待つ迄二權の分野を明にするを得ざりき、此の如きの紛糾、此の如きの混亂は、唯人智猶ほ未だ至らず、兩者の概念を明にせざ

るに歸すべきか、一半は然りとすべきも全體を然りとは斷じ易からず、ヘンリー四世の腔子裡には豈寸毫の法王尊崇の念あるを許さんや、而かも深恨を含んで皇后と共に雪は狂ふカノッサ城外徒跣單衣にして佇立すると三晝夜ならしめしもの、豈其處には厶微なる一大勢力の潜在するものなからざるを得んや、一大勢力とは何ぞ、當時の氣運は猶ほ羅馬法皇に確乎たる信念を繫がしめ、從つて　の同情なくんばあらず。



法王を通じて彼等民衆の上に照臨まします天父の慈光は、能く國家の權力にも抵抗せるを敢てせしむるの力ありたるとそれなり、此間或は異議あるべし、而も吾人は斯の如く考ふるの決して妄斷にあらざるを信ず、然らば加藤博士が杞憂を此間に置き敢て解說を下さんとしたる、假令所論に於て誤ありとはすれ、尠くともその努力に於て多大

更に思へ、既に前にも述べたる如く、人は矛盾せる兩個の觀念を一個の頭に貯ふる能はず、暫くそれを貯ふとも絶えず兩者の調和を欲し、如何にしてもその調和を得べからずんば、孰れかの一を全く克服して之を埒外に放出せんとさへ勉む、相矛盾せる兩個の觀念を抱いて、此は宗教に屬するが故に、此は政治に屬するが故にと、截然左右に剖判して兩々相爭はざらしむるとあり得がたし、更に具體的に言へば我は世界教の信徒なるが故に、單に信仰としては神意を體して須く一視同仁、我が隣人に親むと猶ほ我同胞に於けるが如くするを思はざるべからず、而かもそは唯思ふのみ、我は國家の一員たるが故に、此生存競爭の激甚なる、優勝劣敗を常規とする、斯る世に住むからの行爲としては、須く豺狼を學んて、如何なる酷薄をも忍ふべく、堅甲利兵日々に我が郷黨と鬩ぐを要すといふが如きことあるべきを得ざるなり、唯それ世界教といふ、然れども世界教の信仰より來る理想を移して、之を政治の上に齎さば如何、その歸結は當然世界主義とならざるべからざると誠に加藤博士の所見の如し、既に玆に世界主義の語を着けば、それと國家主義とは一見鴻溝の其間に橫はるの感をなすもの、然らば兩者の關係に就いて何等かの闡明なくして可ならんや、此意味に於て世界教と國家との問題は決して單に概念の相異のみにより輕々に論斷し去るを得ざるなり。

世界教の信仰より出づべき、政治上の理想は當然世界主義なるべしといへぬ、故に玆には直に世界主義對國家主義の關係を究めんと欲す、人の性は統一を欲す、器什を一束して、提携に便するが如く、吾人の腦裡に踏至する諸多の思想をも、亦取つて盡く前後左右を纏綑げし、之に統一を與へ置かんを欲す、物に果して統一ありや、否果して統一あるべきものなりや、そは暫く問はずとするも吾人の心的態度は常に此の如きの方向を取りて止まざること、之を人文發展の歷史に回顧せば明なるべし、單に民族といはず、單に哲學と言はず、又單に宗教といはず、盡く多より一に向ッて進み來れるにあらずや、行住坐臥の如く、寐るも起くるも他

と相關せざりし原始の民と聽ては共に水草を追ふて遊牧するに至り、更に進んでは一處に固定して部落を營むに至り、更らに更らに進んでは今日の如き國家をも造れるにあらずや、多元論より二元論、聽ては一元論、それも或は唯物に偏し、或は唯心に偏したる者が、遂には兩者を融合して汎心論をも出たせしにあらずや、動植物崇拜、天體崇拜等の諸種の多神教より累轉して、佛耶、回の諸教に見るが如き一神教を生ずるに至りしにあらずや、多よりして一に進み、複雜よりして單純に進む此傾向は、急坂に石を轉するが如く到底その極に至らずば止めんとして止むべきにあらず、汎心論と一神教とが兎にも角にも哲學說と宗教觀との至るべき極地に至れるものとせば、世界的社會なるものが亦何くんぞ我民族の最後に到達すべき理想的社會にあらざるを知らんや、井上博士が海牙或はアルジエシラス等の平和會議の運動に顧みて、加藤博士を詰るに、既に民族進化の第三段階まで說きながら、何に故に進んで第四段階まで及ばざるといへるもの寔に故あり、今日坤圓球上國を爲するもの幾十百、而かもこは猶ほ理想鄕に向つて邁往する過程に過ぎず、之をしも極地に達するものと見做さんは、そは猶ほ斥鷃の桑楡に潛んで、而かも一擊九萬里程の大鵬の世界を知らざるの痴に坐すべきなり。

斯くいはば、或は今日の國家は痴人の迷夢の上に建設せられたるものか、夢ならば覺めよ、そが上に建設せられたるものならば疾くに解體し去れよといふべきかと、此の如きの難詰は直に來らん、然れどもそは徒に正を知りて未だ權を知らざる者なり、孔孟釋耶の諸聖甍を比て隣保をなすとも、中に盜跖の族潛に部下を指嗾して日々に穴隙を鑚らんと覗ふあらば、諸聖は諸賢と一團をなして壕には水を深くし、塀には玻璃片をも植ゑて、彼等と對峙するの必要あるが如く、うこなはる幾百千億の人類盡く同一自覺の域に入り四水海に入りて同一鹹味の無上の諸味を享樂せざらん限りは、各國各部に分れて各々自衛の道を取らざるべからず、時には十萬の貔貅を驅りて廣漠の野に閲がしめ、以て不逞を

懲し不義を戒むることもあらざるべからず、これ喜ぶべきにあらずと雖も誠に理想郷に向つて進むの過程としては避くべからざるの事に屬す、故に一面國家を立てゝ四隅に割據すとはいへ、他面に於て常に人類の自覺を促し、一日も早く障壁を徹し肺肝を開いて黄白黒何れの人種をいはず、遭逢必ず嬉々として道に握手するの此快天地樂乾坤を創めざるべからざるなり、唯それ斯る理想、斯る希望、並にそれに對する熱誠を抱いて、以て國家を營み、以て干戈を執らんか、その干戈や猶ほ佳禾の爲に雜草を芟るの利鎌のみ、此に至れば殺人刀は即ち活人刀たらんのみ、吾人が至尊を九五の位に戴き奉り、敢て晏如として此國家の大權に服し、時には日清の戰役に參し、時には日露の戰爭に加はり、命を鴻毛の輕きに比し、雨飛する彈丸を事ともせざる所以は實にかゝる信念の上に存するのみ、世界主義と國家主義とは此の如きの見地に於て決して支吾も撞着も矛盾も扞格もあらざるや明けし、否國民をして私闘に怯にして公戰に勇ならしむる一大動力は却て此處に汪勃たるものありとすべく、加藤博士の憂や全く杞人の二字を冠すべきものならずんばあらず。

加藤博士は或は世界教を以て盡くトルストイズムの如き者とせしにはあらざるか、世界教は世界教のみ、トルストイズムはトルストイズムのみ、前者は後者を含むべきも、後者は前者と必ずしも刎合すべきにあらず、世界教がトルストイズムならば誠に國家存立の上に於ては恐るべく忌むべき者たらん、今より既に幾數年の昔とはなりき、トルストイズムに醉へる高加索種族は、露國の爲に徵兵を忌避し、全部落日を期して盡く兵器を燒盡し、以て無抵抗主義を極端に標榜す、露政府遂に放任する能はず、巨魁を西比利亞に逐ひ、次いで全種族を北米は加拿太の廣野に飄泊せしめたり、彼等猶も沮まず、水雲萬里遠く踵を異鄕の地に印して、婦人自ら牛馬に代り、耒鋤に身を取付けて、自ら隴圃に立ちつゝありといふ、杜翁自らも日露戰爭に趣く壯丁に詰るに、汝は何が故に人の子を傷ふべく滿州の野に志すやの語を以てしたりき、然れども此の如きは偶ま性

急なる理想郷の憧憬者にして權數を知らざる正直者の所爲のみ、見よ、彼等を措いて暫く他の世界教の教徒を見よ、彼のガーフィルドは幼時村學の教師某に勸めらるゝに軍人たることを以てせられたるが、彼は頭を掉つて從はず、我は干戈に伴ひて同胞の血を見るが如き職務に堪ふる能はずとて、神に對する敬虔の念は潜に當時より彼をして宗教界に立つの心を養はしめしといふにあらずや、彼や學者なりき、數學の教師たりき、而かも奴隷解放問題より風波忽ち平地に起りて南北の壯丁血雨に見ゆるや、蹶然筆を捨てゝ悠揚巨鞍に跨りたるものは誰ぞ、彼の大統領ガーフキルドは、叱咤南軍を驅りたる此馬背の勇將軍にあらずや、その他クロンウエルは如何、フイフイテは如何、彼等に民族的宗教の信仰ありしか、而かも彼等は皆勢に俟して、或はチャールス一世を斷頭臺に立たしめ、或は身を軍伍に投じて敵鋒に斃るゝを致せしか、否彼等は皆神の意志を體し、理想郷を近かしめんが爲に、止むなく降魔の利劍を把りたらんのみ、然り彼等に取つては實に其劍は降魔の利劍たりしを疑はざるなり、吾人は杜翁が日露戰爭當時に於て、我佛教徒の戰爭の爲に盡すを嘲り、彼等の行爲は明かに教祖大聖釋迦の教旨に背反するものと痛嘆せし所以を解せず、却て彼が國難に際して自國の士氣を沈滯せしめ萎靡せしむるの言動を敢てしたるを怪む、彼や自國の行動を以て謂はれなきに鞘を外づす野武士に似るとの觀をなせしか、然らば其意や諒とすべきも、彼の戰爭論に逃ぶる處强ち左りとは見るべからざるこそ惜むべけれ、加藤博士と杜翁とは正に相反せる兩極にして、孰れも首肯すべからず、吾人は世の識者の決して「世界主義と國家主義」施いては「世界教と國家」との問題に於て此般の謬見なからんことを切に切に望んで已まざるなり。

君！代議士と成る勿れ

烏山生

一郎兄足下。僕、昨朝鎌倉の客寓、朝暾梅花に和かき

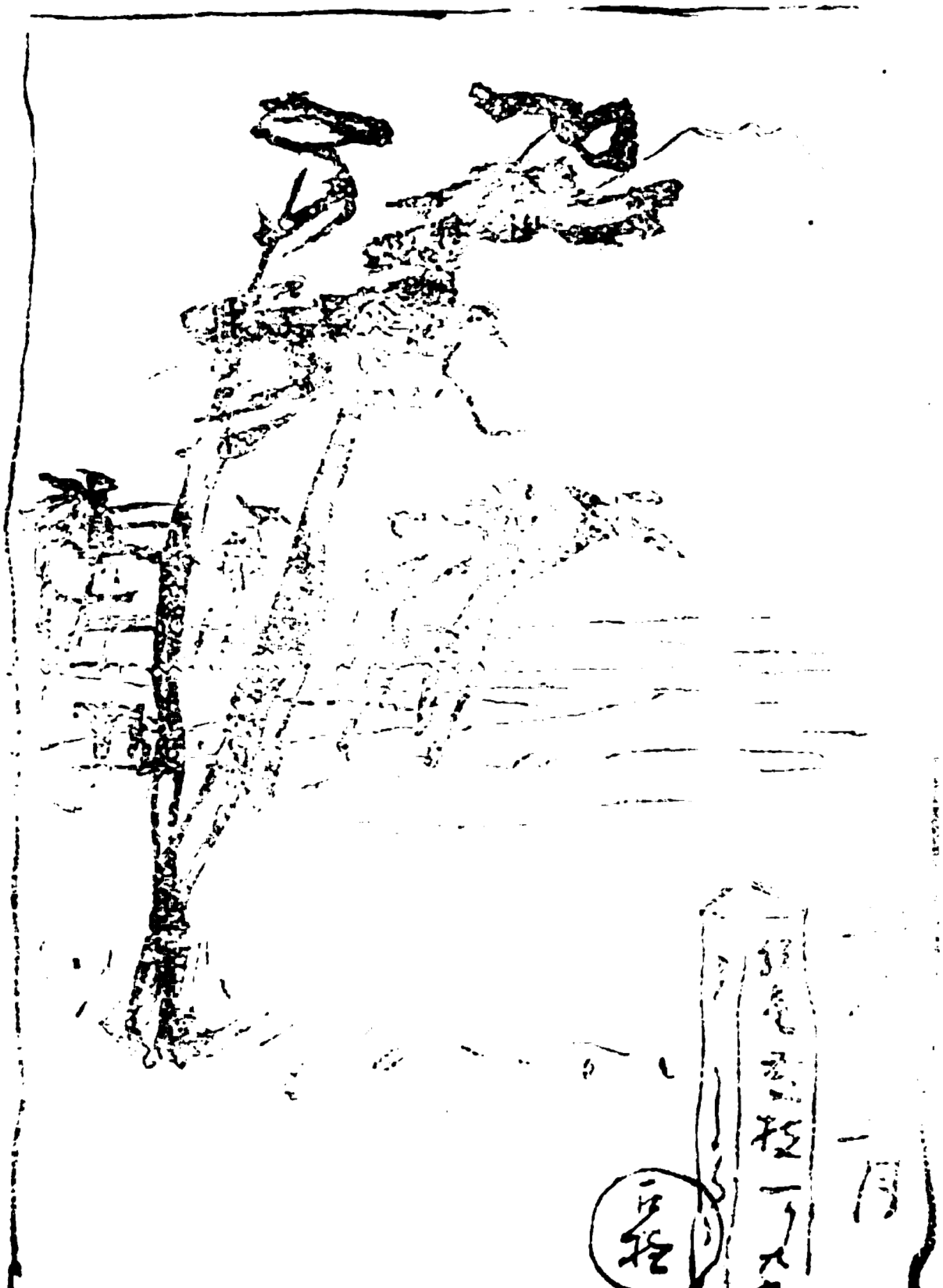
南窓の下に閑座して、心寛やかにラボックの原始文明論を繙讀しつゝあるの時、偶々兄が長文の來書に接しぬ。倉皇として緘を啓けば、這は悌くも凋みたる梅花兩三片、はら／＼と余が膝頭に落ちたり。余、始め其の何の故たるかを解すること能はざりき。

繰り擴けて拜誦するもの尺餘。その梅花は蒼龍寺畔、亡き父の塋域に、憶ふ疇昔に身の毛も悚つ亡父が憤死の斷末魔に、はふり落しゝ一滴の熱涙を、渠が此の世に遺しつる寡婦と孤兒とが眼に、あはれ此の世の花とは再生しにしし白一輪を余が亡き父の遺志を紹ぎて、甲北の地に蹶起すべしと云ひ給へる兄、一郎の手によりて、今朝二百里外、此處鎌倉の片ほとりに、母を奉じて多恨の病軀を忍べる當年の孤兒が膝頭に運ばれにしことを知るに及びて、余は暗然として足下の簡を握り、顧みて過敏なる余の髓樞を電の如く奔せ過ぐる過去の影を趁ひ、骨瘦せ眼凹みたる亡父の俤を描きて、兄よ、余は落ちたる花を拾ひて、不覺にもはら／＼と花に酬ひの涙をこぼしぬ。

一郎兄足下。余は必しも矯激の情に充てる足下の此の文辭に待つ處なくも、余の亡父が矯慢なる一自由黨員石川貫氏の爲めに、無慚、三たび逐鹿場裏の敗將とは成り、そこはかの名をも傳へし我が川上家の礎の塵を拂ひて、七世相傳の家產ををめ／＼と、西山七兵衛輩が如き一水呑百性の手に委したりし過ぎし日の無念は、余不敏と雖も、當時一中學生の身を以て、かよわき雙手に父の位碑を受けたりし逆運兒の身として忘ぜんと欲して、いかでかは忘じ得る處なるべき。膝頭一片の梅花は、余の心臟の總てを貫き得て餘ありし！

一郎兄足下。旣に最高の學府に業を卒へ、齡亦而立に達して、丈夫天下に爲す有るの機に會し、甲北の故山、腕を扼して余を擁輔せんと欲する幾多亡父の舊政友に背き、まざ／＼と父が終生の政敵石川貫が、老朽不材の委を旣に甲南の一隅に於て、馬上髀睨の憎く態に認めたる今日、腑甲斐なくも弔ひのと矢の一ツをだに發ち得て、猶晏閑として湘南の草茅に一讀書生の閑消光を托しつゝある余の心事を怪むと云へりし足下の眞意、

余悉く心讀し、情解し竭しぬ。余は余が畏敬の從兄たる足下が情誼の深さに汲み、滿腹の感謝を左右に呈して、獨顧みて我が心にほゝゑむの赤附を有す、さあれ足下。事情の風に煽られ、境遇の波に漂ふ藻草の花と人の心事は、機によりて色を描き、色に結びて形を異にす。足下よ、余をして若し足下が所謂余の亡父の遺志なるものと、亡父の復讐なるものとを一切離脫し去て、余一個の眞心底を少しく披瀝するの自由を許し給はゞ余は斷じて云はんと欲す、偏狹狷介余の如きにありては、所詮日本外史と文藝倶樂部とを唯一の愛讀書としつゝあるが如き、滔々たる衆愚の列に伍して、かの多數決と云ふなる雜然たる集合意志に、余一個の意志が故なくして流さるゝ樣を目擊するの苦痛を忍ばざる可らざる代議士の如きものを好むこと能はざるなり。



むかしは八郎爲朝院の昇殿を辭退しける時、鎭西八郎は鎭西八郎にて足りぬべしとこそは言ひつれ、足下よ、鈍骨の身に添ふ宿痾の影に泣ける不肖余の如きものは、あはれ色香のしなは下れ三十路の花は咲くに咲くめる我が世の春を仇に過ごせばとて、猶ほ湘南の一讀書生の身に終らば事足りぬべく、小新聞

の一寄書家にても事足りぬべしとぞ覺ゆる、何を苦しみてか、強て文藝倶樂部を讀み日本外史を誦するの人と成るを欲せんや、幸に病間なるの日、心寛やかに曾心の一巻を繙き、一文の感想を舒べ得て、さゝやかに受けたる稿料の總てを捧げて、老母一人の晩年に奉仕することを得なば、余が望み則ち足れるなり。余は謹みて足下の好意を謝せんと欲す。

然も一郎兄足下。腑甲斐なき余が亡父の讐を報ゆる能はざるが故に、足下親ら千金の身を挺し、甲北二郡の地を挈て、敢て逐鹿場裏に一石川號に見んとすと云ふに到りては、余不敏と雖も足下の爲に一言なきを得ざるなり。

余は足下の聰明に訴へて敢て言はんと欲す。余は今日の代議士と云ふものゝ陋劣無氣力なる樣は、更に足下の言より甚しきものあるべきを確信す。余は足下の如く親しく政黨内に出入して、渠等が陋劣無氣力の程を熟視し情解し得たるものにあらずと雖も、渠等の議事錄なるものを讀む毎に、今日堂々一黨を代表せんと擬する知名の辯士が論議立言の、その餘りに呆氣なく、餘りに幼稚にて、殆んど無責任なる一私立學校の法學生號が討論などと、毫も擇ぶ處なきを感じ居れるなり。

余は又ビリリヤードに於て渠等の或る者に接し、某會所に於て若干の他の者に接するの機會を得たり。余はその餘りに粗野なる渠等の風采、言語、擧動を目視する毎に、その何が故に巨額の運動費を抛ち、親戚故舊の胸を痛めて、はる〴〵と主都の中央に物笑ひの種を供せんが爲めに來れるかを解すること能はざるなり。

余は又、山路氏が獨立評論誌上に於て、渠等の愛讀書と崇拜の人物なるものゝ明細なる統計を見たることあり。余が渠等を呼て、敢て文藝倶樂部と日本外史の愛讀者と云ふ以所のものは、畢竟此の名譽ある二種の書物の愛讀者が、當時拔群の統計數を示しゐたるに因るなり。

余は或る時、有力なる某無所屬議員の口より、今日恐らく豫算案の眞意を了解するに堪ふる者は、三百八十人中僅に、二十數名に過ぎざる事を聽けり。余は又某

政府委員が、渠等の言論と中學校長會議のそれとを比較して、吾か下院議員の頭腦は、何の日にか、後者の位置に進むべきと歎じたるを聽きたり。夫れ斯の如きものは、渠等が常に政府委員に與へつゝある笑ふべき質問難駁の蹟に照らして、余の毫も疑ふを欲せざる處なりとす。

一郎兄足下。余は敢て此れ以上に渠等の愚劣を列擧することを爲さゞるべし。余は又敢て渠等が收賄醜運動の敗德事を事新らしく喋々するの愚を爲さゞるべし。余は只た西暦一千九百八年、明治四十一年の今日に於て、苟くも我が日東帝國の首府に於て、斯くまでに愚劣醜穢なる人類が、臆面もなく白晝に横行跳梁して、敢て憚る處なき事の寧ろ文明進化上の一大奇蹟たることを舒ぶるに止めんと欲す。

足下よ、斯の如きは恐らく足下も亦余と感を同うする處ならん。則ち現代代議士の愚劣腐爛を慨することに於て、余は全く足下と感を同調にし得たるなり。只だ異る處は、かるが故に足下は奮起して敢て大海の一水を淨むる處あるべしと唱へ、余はかるが故に自己の意志を投じて、衆愚の鼎裡に煮らるゝことを甚しき不快事と成す處に存す。

足下、余は足下の學識と足下の品性とを以て、若し一たび穢多村の相談會に莅むの興を敢てせんか、固より容易に群鷄中の孤鶴たるべきを疑ふものにあらず。又足下が今日の富力と名望とを擁して、一たび起つて、甲北の僻陬に逐鹿の人とならんか、かの石川老朽輩が如きは、豈に啻に鎧袖一觸の喩のみならんや。之れ足下が家業の多端に累せられて、今日に到るまでむざむざ逐鹿の機を逸したるを惜める所以ならん歟。然れども一郎兄足下。足下が消極主義よと哂へる余に在りては、寧ろ足下が業務の多端なりしを祝し、寧ろ足下が逐鹿の機を空しくしたるを慶せんと欲す。足下よ、余は再び足下の聰明に訴へて言ふ處あらん。多數決の制下に於ては九十九の賢明は、常に百頭の愚者に如かざるなり。九十九だも既に然り。況んや十數の賢明に於てをや、況んや一二の賢明に於てをや。足下果して

克く此れを忍ぶべしと爲すか。足下の世故に老熟なる、或は此れを忍ぶべしとせんも、余は足下の學識と品性とを以て一穢多村の相談會に列するには、その餘りに高邁に過ぎたるを惜まざるを得ざるなり。

足下云ふ、代議士の愚昧陋醜寔に斯くの如きものあるが故に、敢て邦家の爲め身を挺して、耿々正義の一儀表たらん事を期するのみと。

然れども足下。余は三たび足下の聰明に訴へて言ふ處あらんとす。足下が稜々の志、固より壯ならざるにあらずと雖も、而も斯の如きは或は恐る、曩者ポーツマウス條約の結果に奮慨して、日比谷の燒打に奔せ加はりしの徒と其の轍を同うするの謗なきか否やを。

夫れポーツマウスの條約は足下の熟知せるが如く、何人と雖も苟も冷靜なる態度を持し、健全なる常識に訴へなば、毫も憤慨すべきの結果を得たるにはあらず、否寧ろ宜しく太白を擧げて、小村伯の成功を祝すべかりしを至當としたりしなり。余は足下が今日此の冷靜と、此の常識とを喪ふ事なくして、靜かに現代代議士の腐敗を觀ぜん事を欲す。

余を以て言はん歟、今日渠等の腐敗は寔に余の如き冷淡なる一讀書生が眼にも、廿世紀の一ミラキユラスと映ずるまでに、しかく爛熟したり。されど足下よ、這は單に恥ぢ外聞と云ふことを毫も辨へざる蒙昧なる田舍漢が、不作法なる振舞、惡むべき敗德事を、誰憚らず首都の中央に於て敢てするが故に、一々の穢濁明かに水面に浮びて、吾人の不快を購ふこと、餘りに大なるものあるに過ぎず。

足下よ、穢多村の相談會は手腕ある村長に取りては、却て他村のそれよりも籠絡し易く、取り纏め易きが如く、又渠等の智識、經驗、手腕とは殆んど段違ひの高處にある今日官僚派の面に在りては、克く渠等の爲めに獵官の門戸を鎖し、或は絕對的の盲從を強ゐ、若くは一時の方便を弄して、渠等の頭數を買收するに於てさまでの困難を感ぜざるにあらずや。

足下よ、夫れ善につけ惡につけ、無能なるもの丶無能以上に出でざるべきは、進化論の首肯し得べき自然の

理法なり。余は今日渠等の或る者が爭うて官僚派に近かんと腐心し、既に近き得たる者は甘じて盲從の節を伸ぶる事なきを見て、之れ豚の豚小屋を出づる事なく、無能者の無能に晏ずる所以、寧ろ我國政黨の一進歩なりと信ずるなり。足下よ、余は斯くの如く觀ずるが故に、偶々渠等が立法權の行使を濫用して、愚劣哂ふべき多少の法律案を制定しつゝあるを快らず想ふも、猶渠等の存在を以て、しかく我國文明の進歩に多大の妨害を與ふるものにあらず、否與ふる事能はざるものなりと考ふるなり。足下よ、余は渠等の存在を以て博徒ゴロッキの存在と同一視する事を得べきか、博徒ゴロッキの存在は、社會風教の上に於て寔に慨すべきの事たるに相違なきも、而も社會は大物なり、決して二三無頼漢の横行を容るゝも、さまでに大體の進歩を妨害せらるものにあらず。然るを足下、そを慨するの餘り渠等の改良を希ひて、堂々たる紳士の身を挺して敢て其群に入らんか、傍人渠を評して何とか云はん。余は必しも足下が惡德議院の廓淸を期し、敢て千金の身を挺して逐鹿場裏の人たらんとするを觀て、博徒ゴロッキの仲間入りするものに比するの不倫を敢てするものにあらずと雖も、足下よ、余は少くとも之れ狂を趁ふて奔るもの亦狂なりの誹なきや否やを感ぜざるを得ざるなり。

一郎兄足下。足下必しも余の言の稍々奇矯に失したるを咎むる勿れ。余豈に好て奇矯の言を弄し、事一場の快を慢罵に購はんと欲するものあらんや。代議士に對する世の識者の感想は、略々余と同じきものあるを確信すればなり。只だ渠等の口を啓かざるは、堂々たる紳縉、容易に勝手口の强賣り無心者と爭ふを爲さざるの類なり。足下よ、余は常に楠公と權助との論者をして、今の代議士の態を觀、往年の奇矯を弄せしむること能はざるを惜む。

然れども足下よ、余を以て猥に代議士無用論を唱ふるものと誤解する勿れ。余は常に代議士の存在が、今日國政の改善を刺擊する事、恰かも社會主義の存在が、社會の改良を促進する事大なるものあるが如く、横着なる今日の社會には、又缺くべからざるの激藥なりと

信じつゝあるなり。

一郎兄足下。余は四たび足下の聰明に訴へて言はんと欲す。若し夫れ一段の高處に立ちて、這般の事象を觀ぜんか、足下が今日靑衞の小枝にも類したる一杯の水を擁して、滔々たる濁流に脚を容るゝと、依然甲北の一雄鎭として、識德双備の一紳士として、甲北農林學校の經營を輔け、甲北圖書館の改善を完うすると、抑々祖國の文明に貢獻する處、孰れが大なるべき。英國は斯くの如き鄕紳士の多數に依りて、健全なる進捗を爲しつゝある事を知れりや。余は足下が馬首を南にし、敢て一石川嶷が如きものゝ壘據を窺はんよりも、寧ろ曉風を拂ふて、廣大なる奧家の林檎園に、颯爽たる足下が英姿を迎へん事を望むや、切なるものあるなり。足下幸に猛省する處あれ。妄言多謝。

『靑果集』を讀む

生田長江

眞山靑果氏は予と親交のある人である。しかも予は、その予と親交あるの故を以て、氏が新進作家中の第一人者たることを斷言するに憚るものでない。『靑果集』は短篇の小說七篇、脚本一篇を收めたる氏が製作の第一集である。

總じて處女作と云ふものは、一生懸命になつてかゝれるのが常なのに、此の靑果集に於ては、その前に代作時代と云ふ妙な時代のあつた爲めもあらう、格別どうも、作者の全身全力を傾倒したらしいのは見當らぬ、どの作品にもどの作品にも、たまらなく面白いところのある代りには、また隨分と不謹愼な筆遣ひもあつて、完璧を以て許されるやうなのは殆んどない。されば瑕瑾の有無を第一の標準にして云へば、其價値、正宗白鳥氏の『紅塵』などに比べて、さほど立勝つて居やうとも思はれぬ。

集中の諸作に通ずる缺點は、第一にまづ抽象的議論の徹底して居ないこと、不消化なことである。是は他方面の技倆が、多數の作家に一頭地を卓むでて居る丈け、それ丈け目立つて見えるのだ、精しくは、國木田、島崎の諸氏は、兎に角其觀察の眼や、描寫の腕の相應する位の哲學上修養を有つて居るのに對し、青果氏は直接藝術上の感興から云へば、右國木田島崎の諸氏を凌駕するものあるに係はらず、抽象的の概念を取り扱ふことのみが、諸氏に一歩を讓つて居る。

今一つの著しい缺點と思ふのは、筋全體に統一がないといふことである。自然そのものに統一がない、而してその統一なき自然の任意の斷片を、些の增減するところなく表現するのが藝術の本義であると云ふやうな、特殊の見地よりする場合は知らず、さもない限りは明かに缺點である。或は一部分丈け馬鹿に緻密の描寫をされて居る。或は、是から大に發展しさうなところで、突如片が附いて了ふ。或は全然後半部のないのがある。また全體に、得意の警句を聞かせたいばつかりに、餘計な挿話(エピソオド)を作つたり、無用な場面(シーン)を夾むだりして、大切な前後の關係を緩くするやうなことが屢々ある。是れ一つには、作者の覇氣があり過ぎるからであらう、一つには生活上、落付いて筆の執れない事情があるからでもあらう。

青果集に現はれた長所を云へば隨分とあるのであるが、とり分け他の新進作家などに比し、あらず、從來一般の作家に比しても、大に卓越して居ると思はれるのは、その作物一體に潑溂として居ること、獨逸語に所謂レエンディヒなることである。

精しくは、此作者はだいぶ世間を見て來た人である。隨分暗黑方面(ダアクサイド)をも見て來た人である。その自然主義的傾向は、大陸自然派の小說脚本などを讀まされた結果ではなうて、むしろそれ等のものを讀むに至つた原因である。その人生に對する態度には、些の弛みたるところもなく、はち切れるまでに張りつめて居る。第一にレエンディヒなる所以である。

第二には描寫の技巧。特に物をヴィジュアライズし

て見せる手腕のすごさは、寧ろ無器用な人の多い新興自然派中に異彩を放つて居る。とりわけ會話のピチピチとして居るところ、その專ら會話によつて人物の性格を說明し、事件の進行を記錄する上に、戲曲の約束を應用して、時に、小說としては或は鮮明過ぎるかと思はるゝほどの印象を作つて行くところなぞ、所詮、雜輩の追隨を許さないものがある。而してまた其作物のレエンディヒなる所以てある。

作者の人生に對する態度や、描寫の上の技巧やがレエンディヒなるに加へて、今一つ、狹義に所謂文章の調子なるものもまた如何にもレエンディヒである。前にも云つた通り、小說としては時に印象が鮮明過ぎるかと危まれるやうな、まことにプラスティックな筆遣ひて從つて、



あまり餘韻のある文章とは云はれないけれど、兎もあれ今の作家中、青果氏ほど力のある、生氣に富むだ文章をかく人は少からう。地の文、會話の文を通じて、より實らしく書く人はあるかも知れぬ。より强い調子を出し得る人は無いやうてある。

以下個々の作品に就いて少しく思ふと

ころを述べて見やう。

「茗荷畠」の前半ては、予の所謂哲學上修養の不足が目に立つて、面白い思想の斷片や、鋭い描寫の技倆には服しながらも、兎角不滿足の感あるを免れなかつた。『何うした、別れたらう』、『憎いだらう、君、女が憎いだらう』、『君、寢たかい』なども小氣味のよい進行てあつた。追々此調子が流行り出すことてならう。ある時、偶然に或る問題に觸れると、話の中に皮がつき肉がついて、動かすべからざる問題に成長する」湯村の癖も、「比喩と謎とだけて小說をかゝうと焦つて居る辰馬の人物も、『憎い奴だ、君のやうな面憎い男はない。今度こそ今度こそとは思ふが、別れて見れば寂しい。何うしても別れることが出來ぬ。君とは全く腐れ緣と云ふんだらうね』。と云ふK先生も面白いが、たゞかの、作中の人物に、『それが基督の人格美と云ふんだらう。度々聞く言葉だ、詰り理解ぢやないか。確實を信ずると云ふことは、既に信仰の範圍を脫して居る』。とか、『然し不思議だね。自然も自然極端な自然。第一性論を主張する君としては大分變つた議論だね』、



とか、恐ろしく徹底しない、讀むで居つても冷汗の流れるやうな議論をさすのは困る。信仰、理解、自意識等の言葉に對して、はつきりした概念がまだ出來上つて居ないのだ。

後半五、六、七は遺憾なく作者の本領を發揮して、まことに立派なものである。

「南小泉村」は「如何に贅澤な謙遜をしても、かれら小百姓と同じ血が體に流れて居るとは信じたくない」と云ふ此作者の、「生れざりしならば却つて幸福であつたらうと思はれる」かれら賤屬に對する、殘酷に鋭い觀察の眼を、最もよく證據立てゝ居る。地方的特色も隨分よく出ては居るが、主として感服したのは、その、兎もすれば陳套な、センチメンタリズムに墮ち易い題材を、よくも、あゝまで冷かに取り扱ひ得たと云ふことだ。

「男柱」の九十九老爺は、ツルゲニエフの作などにても出て來さうな、まことに面白い性格であつた。

「小春日」、輕快一方の筆遣ひに、才氣の横溢を見せたもの。それ以上の意味はもとよりない。

「久本氏」はあまり振はない方の作だ。主人公の描寫が第一死むで居る。

「卓上」、他の人には一寸眞似の出來ないところもあるが、眞山氏の作として見れば、格別とり立てゝ云ふべきほどの、特異な點もないやうに思ふ。

「敗北者」は集中第一の長編である。作者もまた長編物の積りで取掛つたかして、比較的複雜な事件の發展を、段々と順序を追ふて描いて居るが、結末はまだどうしても、短篇物の結末たるを免れぬ。全體の統一と云ふ點から云つて見ても、何となく短篇の小說幾個かをつぎ合はしたやうな感があつて、完璧を去ること太だ遠い。けれども局部々々には例によつて、たまらなく好いところがある。主人公に對して眞正面から同情を寄せた、此人には希らしい敍情詩人的の、柔かな筆致も、なか〳〵しんみりとした、落付いた調子を作つて惡く無かつた。

「第一人者」は何と云つても脚本界に於ける近來の傑

作たるを失はぬ。佐野天聲の「大農」などと日を同じうして論ずべきでない。

着想は成程イプセンあたりから來たらしいが、思慮なき、淺薄なる模倣では決してない單に暗示を受けたまでのことである。刺戟を受けたまでのことである。而してレエンディヒと云ふ特徴は最もよく此一篇に現はれた。一つ〱の言葉に力がある。一つ〱の人物光景がピチ〱として居る。作者の人生に對する態度そのものが寸分のたるみなく緊張(ストレエン)して居る。強い、強い、實に強い感じを讀者の心に與へる。

犬や、子供や、測量師や、落日などを出して來て、一面それ〱の象徴的意義を有たせながら、一面更に、見物を飽かせまい爲めの小道具にそれを使つた周到の用意は、特に脚本家としての、侮り難き手腕あることを示して居る。尙ほかの小說に於ても、常に主として會話の中に、人物の性格を說明し、會話によつて事件の進行を記錄し行くことに多大の興味を有するより推して見れば、作者は所詮、小說家としてよりも、寧ろ脚本家として更により多くの成功を收め得べき人ではなからうかとさへ思はれる。

警句の多いことは、改めて云ふがものはなからう。むしろ餘りに警句を聞かせたがつた結果として作者自身の云ひ相な、但し、主人公梢崎博士の、其場合云ひ相にもない、また、云はす必要もないことを、無暗矢鱈と喋らした爲め、後段稍や思想の聯絡をなくしたところ、二箇所、三箇所に止まらなかつたやうに思ふ。

之を要するに、靑果集には隨分と缺點がある。集中の大半は皆多少の瑕瑾ある作物である。よしまた瑕瑾がないとしたところで、さう大したものではないやうだ。乃ち作物そのものゝ價値よりすれば、靑果集一卷未だ以て、文壇を驚倒するに足らないのである。

しかも、此瑕瑾多き小品の上に現はれたる、もしくは是等の小品によつて證據立てられたる、作者本來の天分は非常なるものである。其非常なる天分を、彼は未だ發揮し盡さぬ。未だ發揮し盡さゞるに、一面の技巧夙く已に先輩諸氏を凌いで居る。已に先輩諸氏を凌

ぐの技巧を有ちながら、後は未だ其全力を製作の上に傾倒せぬ。未だ傾倒せざるに、夙く已に脚本第一人者の如き、兎に角近來の傑作と稱せらるゝものを得た。青果氏は竟に一流の才である。

諷刺文と問題文藝

松原至文

二千年來吾等の手足を制縛して來た、道義、理想、信仰等に反撥して底の底から人間自我の叫喚を、文字に發した新藝術の一面が、やがてわが問題文藝である。問題文藝といへば表現するところの內容の範圍が、一定の主義主張の型にはまる如く見ゆるところから、一種の囚はれたる文藝に過ぎぬやうの誤解があるかも知れぬけれども、それは淺薄な見解にすぎぬ。

ただ在來の文藝に諷刺文なる一體があつて、同じくその態度に於て、制縛に反撥し、時代の弊害を指摘するといふところから、問題文藝なるものが、此の諷刺文、若くは諷喩、諷諧等の一種の變體に過ぎぬやうに思はるゝのは、近代自然主義上の新藝術たる問題文藝に取つて竊てなければならぬ。

諷刺文、若くは諷喩諷諧等の、意義として問題文藝に似通つた點は、その時代の風俗なり習慣なり、若くは文藝學術其他の樣式なりに對して、その弊のあるところを抉剔し指摘して、之れが改良革變をせまるところと、制縛壓迫等に對して反抗するところとに在る。かゝる一面の意義に於て似通ふて居るところから、諷刺文と問題文藝とは、一見してその樣式全く相等しきが如く看做され、藝術の分類上同一の意義を有せるものと誤認せらるゝのであるが、此の兩者は、各その根本意義に於て全く異つたポイントの上に立つものである。

諷刺文といふものは、短かく言へば表面上の事實に對して、一個の小主觀を發表するものに過ぎぬ。換言すれば、同じく弊害を指摘し、制縛に反抗するとは言ひながら、一個表面の事物現象に對して、自家（すなはち小自我）の小憎惡なり小嗜好なりを述ぶるものに過ぎぬ。たとへば風來山人の『文武々々と夜もねられず』といふ如きものも、ただ皮肉家としての風來山人が、廟堂一時の施政方針についての小憤激にすぎぬ如きものである。又たとへば一篇の大きい作物が出て文壇を捲席するといふやうな場合に、その題名の地口で小品文を書いて、その中の缺點だけを拾ひ上げるといふやうな事をやる、又は宰相とか學者とか女學生とか教師とかいふ社會の一階級に何等かの弊害などの有るときは、皮肉、反語、比喩等を以て之れを指摘する。斯の如き態度は要するに小自我の管見にすぎない。

問題文藝といふはさる小主觀の上に立脚せずして、同じく主觀の聲とは言ひながら、それは大主觀の聲である。新意識上の人生の上に立つて、醒めたる人間としての吁嗟叫喚の洞聲を作るのである。たとひ其處に一自我一個性の偏はあつたにしても、その底を叩いて之れを六合に啓けばそれが直ちに全人生にわたり得べき意義のある自我なり個性なりである。されば全人類の代表的反撥の聲と之れを見做すことが出來れば、かの諷刺文なるものは自己一家が吐憤——若し多少代表的の意味があるとすれば、ヒューマン、ビーイングとしてではなく、一事物一現象上の好

悟觀を同じくするものだけの代表的吐憤——である。

根本立脚點に於て既に如上の相異がある。以下多少その枝葉の點にまで仔細看を及ぼして、その各意義の闡明に努めて見よう。

諷刺文といふものは上に言へる如く、一個の小主觀である。問題文藝が社會現象に對して、その原因に溯りて弊害缺陷を指摘抉剔し來るに反して、これはただ既成の一現象に對して、小主觀の是非を言ふに過ぎぬ。略言すれば問題文藝が原因に溯りての討尋研覈であれば、之れは結果を見ての詮議批判とも言ふことが出來る。この意味を押し廣めて行くと、問題文藝は內容的であつて、諷刺文は外形的であるとも言へる。外形的、——然り觀察の方法といひ、その觀察を發表するの方法といひ、諷刺文は要するに外形的である。之れを反對から言つて、外形がまづくては諷刺文として形をなして居らぬと斷じても可いくらゐである。外形的であるから、まづ文字樣式をととのへ、取りすまし切つて、おれは何處を衝ッつかれても缺點はないが、お怪我はお前の方にあるのだと言つた風の態度。故にそのきりりと刺すものも要するに文字がするわざで、內容の致すところでない。であるから諷刺文はその重なる形式として、多くは反語法逆語法を取る。この反語法逆語法といふものは、諷刺文の先天的性質に最も能く契つた修辭法で、又最も諷刺的効力を現はすに佳きものである。由來この反語法とか逆語法とかいふものは、あまり長い形式で發はす時はその効力の自然と薄らぐもので、たとへば一浴さつと冷水をぶつかけて、ヒヤッと飛び上がらせて後は濟みと言つ風、古るい比喩ではあるが、山椒のひりりとするぐらゐのところが一箏利き目が多い。故にわが邦では之れが形體を變じて、狂歌、狂句、川柳、戲文等のたぐひとなる。

問題文藝は飽くまでも內容的である。內に熱し蒸すヒユーマン、ピーイングとしての根本自覺の叫び聲が、鬪めきれずして外に迸るのであるから、時として知らず識らず外形の如何を顧みて居れぬ事がある。この觀察も無論內容的であるし、その顯はし方も內容的である。イブセンのドラマの如きは、その序幕からして、既に何物か人に向つて自省的思索をせまるものがあるが、之れを舞臺に上せると、更に人を考へさせると言ふのは、親しく西洋でイブセンの劇を見て來た人の話である。されば問題文藝は諷刺文の如き短かい形式を取ることが到底出來ない、それは諷刺文のやうに單に漫に時代若くは其他の弊を罵りて、自ら一時の快を取るものとちがひ人間根本の自覺を喚起すべく、深い深い自省を發せしむるものて有るからである。されば諷刺文といふものは、悲憤の聲を作る——若くは皮肉諧謔——を作るに關はらず、その結果はやゝともすれば滑稽に陷るが、それは根底の深省をせまらぬからで、諷刺者其人に取りても、唯だ一時の洩憤に快を取るものであるからである。然るに問題文藝にあらはるゝ重な主人公には、常に眞面目な哀感が伴なつて居る。悲痛の色調を佩んで居る。諷刺文の方は、まづ讀者をして抵掌して一味の面白さを快呼せしむるが、問題文藝の方では讀者をして、一種の苦しく憂らき呻き聲を發せしむる。

諷刺文とても、所詮は諷刺しなければならぬだけの、悲むべき、若くは憤るべき、若くは愁ふべく恨むべく、慨くべき原因が其處にあるには相違はないが、それは唯だ表皮を一枚ひんまくれば、事は濟むべきだけのものに過ぎない、よしや諷刺に効果があつたとして、その憤るべく慫ぶべく、はた悲み慨くべき事柄が、全く勦絕斥滅せられたしとしても、それは唯た一の小なる惡から、他の一の小なる善に成り變るものに過ぎない。然るに問題文藝が胚めるところの痛苦悲哀は、わが時代末の人類が、なべて有するところの深大なる苦しみ慨きである。諷刺文の未とし

て指摘するところは、人の爲した事を人が改めれば其れにて事は濟むけれども、問題文藝が訴ふるところは、或は行き行きて遂せざるべき永劫無涯の目的を目差して、呻きながらも這ひ行かんと焦躁る痛苦悲哀である。

グリーノの古しへに唱へられた靈肉一致の歡樂の味はひは、希伯來思想の汪勃たる勢に壓倒せられて、小亞細亞から半島の地をかけては言ふに及ばず歐州全土の民まで、心の底の悲哀苦歎を言葉で伴はつて、空々しくも聖よ、道義よ、理想よ、信仰よといふやうに成つて以來、人類は甚はだ無邪氣ならぬ僞りの夢をつゞけて來た。假りに之れを二千年の歴史とするも、顧みれば長い間の僞りの夢ではある。科學の力、哲學の力は、嚴しく烈しい勢であらゆるものゝ解剖を遂げ、ついに此の僞りの夢の薄絹をすつかり剝ぎ落して了うまでに到つた。醒めたる人類は此處に於てか遑々然として、當面直下に走り流るゝ現實界の有樣に驚き倒れんとしたのである。或者は白鉢卷で立ちはだかつて、ウォーク、ウォークと叫んだけれども、其の腕もやかては脆く挫かれて了つた。或者は弱き者亡びて勁きもの起つの世なりと聲言して荒れ廻つたけれども、遂には瘋狂院の鐵窓に現も夢もなき惡闘の殘骸を横へた。或者は再びヘブライの夢に醉はうとし、人にも醉へと勸めた。或者はまた此の希伯來の夢を賣る白頭翁を僞れる者よと叫びながらも、自分は之れと多く異るなき一種理想の巖陰を見出して逃げかくれて了つた。然し現實は何處までも何時までも現實である。悲しく傷ましき現實は果しなき永劫のラインとして、人の目の前に鮮かに殘る。此悲哀、此痛苦、しかしながら是れ亦一面に於て大なる自覺の悲哀、自覺の苦痛である。此の自覺の痛苦、自覺の悲哀こそは、二十世紀の人民に取つての大なる祝福である。たとひ痛苦であれ、たとひ悲哀であれ、吾等は二千年來の夢から一度は必らず醒めればならぬ。覺めての後は假令や痛苦が來やうとも悲哀が來やうとも、白日の下に淨裸々の淺間しい相を曝け出さうとも、知らぬ者は兎に角、知つての今は那麼にしても醒めずに止まる譯には行かぬ。此處に於て起り來つたものが此自覺を迫る問題文藝である。問題文藝の根ざせるところは斯の如く深い。

『家庭』といふ言葉の中には、女子の頭の上に下さるゝ種々さまざまの不文律がある。

『弱き者よ、其名は女なり』と呼ばれて、女は二千年この方此の不文律の笞鞭に打たれ叩かれて、未だ一たびも自覺自醒の頭を擡げた試しが無い、かゝる弱きものに對して、その職能として問題文藝は自覺の狼火を擧げてやらればならぬ。イプセンはかくの如くにしてノラといふ代表的女人を作り、二千年來積み上げられた歴史の白反古を焚くべく、萬條の火柱を建てた。ノラは吾國人にも既にもう親しき名前となつたであらう。その他ビョルンソン、ハウプトマン、ズウダーマン等の文藝界の大名は、その力ある筆を以て、人間の新しい醒覺の爲めに、聲高き警鐘を撞いた、

問題文藝はかくの如く新しき時代の精神を代表して、歴史の舊慣なり自然法なりに對して反撥せんとする新人類の聲である。かゝれば諷刺文といふものとは、其意味に於ては言ふまでも無く、その形式に於ても、多大の徑庭ある事は言ふまでもない。若しそれ藝術學上の一分類として問題文藝を議する段になると、更に章を改めての他日を期せればならぬ。



我輩も猫である（十二）

白也

「蟻は甘きに集まり、人は新しきに集まる、この句はまだ可い、「狗は香を慕ひ、人は色に趁る、この句も我慢出來る、「蛾は燈に集まり、人は電光に集まる、」（虞美人草）この句に至つては流石に驚かざるを得ない、驚くことの容易なる點に於て、我輩も亦文明の民である、斯く苦んでまでも對句を作らねばならぬとなると、文章を書くのも並大抵の骨折りではない、人生文士となる勿れだ、詩を作るより田を作れとは、猫を養ふより、犬を飼へとの諺と共に、千古不滅の金言である、この金言を知つて、猶且つ詩を作らうとは不量見の大なるものである、如何に不量見の大なるものであると承知しても、作りたいには致し方もない、世の中の事は一つや二つの金言を以て律し得らるゝやうな、そんな單純なものではない、朝に巡査の職を奉じて、盜賊の群に入る輩さへあるではないか、我輩と雖ども一とつ對句を作つて見やう、

蝶は菜の花の上に止まり、女は呉服屋の前に止まる、

老爺は藥鑵頭を光らし、娘はダイヤモンドを輝かす、

花火は高きに上つて開き、おならは低きに下つて發す、

征夫は故郷を懷ひ、文士は原稿料を思ふ、

珊瑚蟲は珊瑚を作り、火事は灰を作る、

酒飲みは德利を見て歡呼し、自然派は陰部を見て隨喜す、

勞すればいくらでも出來さうだ、然し更に効がない、勞して効なき事業は止めた方が德だ、止めた方が德だと悟つた時は、既に無駄骨を幾程度まてして居る、…宙の事は總てこんなものだ、

折からチン〳〵と表のベルが鳴つて、案内乞ふ聲がする、表に案内がある、物もうとは誰ぞと、太郎冠者氣取りて行つて見ると、此時既に細君が取次に出て居

る、

「私は田中案山子と云ふ者ですが、先生はお宅でしようか」

と至極慇懃だ、細君も玆を先途と取り繕つて「ハ、おりますて御坐います、少々お待ち遊ばして……」

と二階へ上る、左樣て御坐り奉る式に我輩も控ゆる、

扨て雷がころげ落ちる樣な勢て、梯子段をふみ碎きさうに主人が降りて來る、次いてストン／＼と餅を搗くやうな調子て細君も降りて來る、主人はいきなり玄關へ突進して、案山子君と顏を合せる。と、

「イヤァ能く來て呉れたね、まア上り給へ」と細君や我輩の御坐り奉る式に引替えて、意外に略式だ、

「實は昨夜當方へ來たので、鳥渡逢いたくなつてね、

と先き樣でも紋服を脫いだ句調だ、

「さうかえ、そりや有難う、さあ上つて呉れ給へ」

「それぢや失敬するよ」

と二階へ行く、言葉の樣子から見ると、舊友に相違ない、然し細君も我輩も未だ面識のない處を以て見ると、何時頃の友達であるかわからぬ、或は中學時代の友かも知れぬ、兎に角珍客たるを失はぬ、この珍客へ對する主人の物語りと、主人へ對す珍客の物語りとは、正に聞き漏らしてはならぬ代物である、續いて我等も二階へ上る事にする、

其前に鳥渡珍客の人相を紹介しやう、

一見中肉中脊て、疎々たる鼻下の八字髯が大に振つて居る、金緣眼鏡に金鎖、軟か物て身をくるんで、ゾベラとした風態、白足袋て雪駄を穿いた處は少々月並みてはあるが、荒れ地の芒のやうに、ヒヨロ／＼とした髯だけは、確かに凡夫の企て及ぶ處てない、長さに於ては我輩の髯に及ばぬけれども、數に於ては伯仲の間にあるなどは、頗る賴もしい、

扨て二階へ來て見ると、主客共にお平らにお樂にて火鉢を中に宜敷き位置に陣取つて居る、我輩は主人の坐布團の、片端を借用して、玆て寐たふりをする事にする、我輩は能く寐たふりをするが、人間は俗に狸寐入りと云ふそうだ、然し狸の事に關しては、我輩まだ何の知識をも持たぬ、

「餘り久しく逢はんので何から話して可いか鳥渡困るね」

と先づ主人が口を切る、

「お互にね、だが其後君の身上に關しても色々な事があらうが、僕にも色々な事があつたよ」

「珍談があるかね」

「珍談も可なりあるね、その代りに至つて珍てないものもあるよ」

「僕なんか常に其後者の方にばかり、出逢つて居つた」

「然してばかりもなささうな噂さは、兼て風のたよりに承知しとるがね、」

「然し僕は更に君の噂さを聞く、機會を持たなかつた」

「それぢや大方、風上にお居てだからでしようハ……」

「主人よりもちつと話がコツて居るやうだ、此時細君がお茶を持つて來る、

「君は未だ初對面てしたらう、荊妻です」

と濟ます、「初めまして……」と細君は土蜘蛛のやうにヘタばる、「いやこれはお初に……山田と云ふ御主人の舊友てす、田舎者て……何分と勘平が云ひ開きをするやうな格好て、機會人形(からくり)のやうなお辭儀をする、

「そりや實際色々な事がありましたが、最も變つた事として、第一にお話しなければならんのは實は、……私も妻を持ちました」と主人の方へ向き直る

「そりやお目度う、別嬪かね」

と主人も餘計な事を聞きたがる、

「奈何てしよか、それは亭主には大方分りますまいよ」

「成程」

と妙な處て感服する、

「それに付きましても、今度の妻を貰ふ前に實は三人ばかり候補者がありましてね、皆夫々種々樣々な事情がこんごらかつて詩的な處もあり、小説的な處もあり仲々一朝一夕には語りきれんのてすが、委しく云ふと長くなりますから、簡單にお話しましよう」

「そんな話は簡單の方が可いね」

「然しさう簡單に話して了ふと、情が寫りませんしー

「情なんかうつらんでも可いよ」

「第一連絡がつきませんからな」

「つかんでも可いぢやないか」

と主人は無茶ばかり主張する

「さうは行きません」

「左樣てすか」

鳥渡話が切れて睨み合ひになる、主人は短い髯をつまんで引張つて居る、山田君は火鉢の灰へ、樣と云ふ字を、楷書て書いたり草書て書いたりして居る、これを見ると主人も、忙しなく殘りの火箸を取つて、殿と云ふ字を書き初めた、

約三分間ばかり經つと、主人は急に思ひ出した樣に、

「奈何云ふ詰です」

と矢張り聞いて見たいと見える、

「然し御迷惑の樣ですから」

「何に迷惑でも關ひませんよ」

「それでは御免被つてお話しましようか」

「まあ〳〵どうぞ」

隨分奇妙な會話をする人達だ、

「極く初めから話さなきやならんてすが、先づ一別以來、鄕里に歸つてからと云ふものは、別にこれと云ふ仕事もなし、幸にさう齷齪せんでも、其日は送られると云ふのでもなかつたので、歌なんか作つて、國の新聞へ投じたりなんぞして居ました」

「はがき集ですか」

と主人は遠慮なく肉迫する、

「いや木の葉會と云ふのを組織しまして、其咏草を載せねてすな」

「木の葉天狗の集りと云ふ會ですな、萬事がつき合ひでしような、名吟がありますか」

「多少歌らしいのもありますが、君に云はせれば素人臭てすから」

「他の人に云はせれば替つた事を云ひますか」

「そう皮肉に出られると、何とか云ひたくなりますな」

「これは失敬へゝゝゝ、へなぶりなんぞもおやりですかな」

「あれは御免被る事にしましたハヽヽ」

「それは結構でハヽヽ」

何の事だか解がわからぬ、解らぬ事を云ひ合つては可笑くもないに笑つて居る、お互に餘程明確を缺いた頭腦と見える、

「さうして三年程を經る內に、一人和歌の上での女（レデー）友（フレンド）を得たのですな、勿論未見の友ですけれど」

「そろ〳〵本文に入りますな」

「そろ〳〵では御迷惑と存じまして、成るべく單兵急に接する事にします」

「宜しく願ひます」

「初めの間は、案山子の君になどゝ前書きして讀み、こちらでも百合子ぬしへ返す、かなんかやつてましたが、烏滸話が前後しますがその女友は白百合子と云ひます」

「その歌を拜誦させられる人は御難だ」

「いやその時分には、決して戀歌のやうな者ではなく、

云はゞ春秋の挨拶のやうなもので、鐘幹の、鶯の籠を窓に移して作る、と云ふやうな羨ましがらせの、酷いのおやありません」

「わび住みの狭うして、
　馬車おもはねど
いたいけに美くしう
　　飾るは妻ぞ若き

と來られると、嘘最う恐れ入るの外はないからね」

「兩人にこれすゑて
　微笑の句も得よと
みなさけの我師が
　　おくりものかたじけな

は可いが、第一先生の落合さんが、いちやつかせたから惡いのです」

「なんでいちやつきの點は、御多分に漏れまいね」

「案外さうでもなかつたのですが、これが直接手紙で歌のやりとりをするやうになつてからは、戀歌が自然多くなりましたな」

「自然多くなりましたもないものだハ……」

「でまア、簡單に云ふと、未逢戀と云ふ奴が成り立つたのですな」

「有り難う」

「御馳走樣……ですかハ……」

「憚り樣さハ……」

「斯うなると何處か、逢つて見たくなるもので、一寸煩悶しましたな、若しも君が、假りに僕の位置に立つたとしたら、君は此際如何なる手段を取りますかね」

奈何せ主人の友達だから、別段怪しむにも足りぬけれどこんな奇問を出し得る手腕を見るとこの男も稍替つて居る、然し同じ替りものでも、紅鹿君とは又一寸替り方が別だから、紅鹿君の晝雷のやうなのを、聞いた後には、絲蒟蒻のやうに、噛み切れたやうな、噛み切れぬやうなのも、一興である、

「僕はそんな位置に立つ事がないから、手段も方法も腹案がない」

「假りに立つとしたらです」

「假りに立つとしたら、又其時で考へるさ」

「今此處で考へて見たら奈何です」

「そんな事をするより、君の取つた手段を聞けば十分だ」

「君も久しく逢はん内に、大分老いたね」

と案山子君、一種特別の眼て主人を見て、にやりとする、

「左うかね」

と主人は一向平氣である、

折角に放つた甲矢に、何の手應ひもなかつたので、直ぐに乙矢を放つた、

「更に昔日の觀なしだ」

「左うかね」

と又平氣て居る、流石に案山子君も我を折つたものと見えて、

「それては甚だ遺憾だが、直ぐに僕の取つた手段をお話しましよう」

新刊批評

▲明治事物起原　石井研堂著　橋南堂發行

人事、教育文藝、交通、軍事、實業、暦日歳時、病醫、法刑、衣帛、飮食、住居、器財小間物、遊樂、動植物等の部門に分ち、各部門に數項又は數十項の小目を設け、各目について其起原を記したるものなり。社會の變遷等を見るに都合よき書なり（定價一圓廿錢）

▲木村重成　塚原澁柿著　左久良書房發行

▲眞田幸村　同

前者は澁柿叢書の第四卷にして後者は其第五卷也。何れも豐臣家末路の有樣を背景として描けるものなれど、前者の主人公は年少にして而かも智慮ある重成、後者のは老實にして多策なる幸村、相對比し來つて兩人の面目頗る明かなるものなり。吾人は此叢書の終るを待ちて、塚原澁柿其人及び氏の歴史小說全體に亘りたる細評を試みたしと思ふ。依て茲には只紹介丈けに止めおく。（定價前者九十錢、後者八十五錢）

▲身心修養長命術　杉谷泰山紹述　博文館發行

ドクトル、フーフエーランドの著を杉谷文學士の紹述したるもの也、「人間の天壽は二百歲なり、之を完うせんが爲めには身心の兩面に於て合理的修養の方法を講ぜざるべからず」といひて人生の意義より起して、衣食住は勿論敎育宗敎道德等に關して種々の長命術を說きたるものが本書なり。長命を欲する人の參考とある點多かるべし（定價七十錢）

▲春色輪やなぎ　岡鬼太郎著　文泉堂發行

「商賣覺帖」と「お帖場物語」とを收む。後者はつまらないものなれど前者は藝者の一生を描けるものにて鬼太郎氏の獨擅也。鬼太郎氏の藝者通なる人の已に知る處、垢拔けしたる、才走りたる筆にて其鋭き觀察を記したるもの、面白からぬ筈なし（定價七十五錢）

▲基督の比喩　八濱德三郎著

▲舊約聖書文學一斑　今泉眞吉著

▲基督教辨證學　有馬純清著

▲基督教本原眞理　露無文治著

何れも基督教叢書として警醒社より發行せられたるもの也。斯道の研鑽者に益を與ふべし。

▲美的道徳　木村鷹太郎著　大日本圖書株式會社發行

所謂本能に從て快樂放縱の生活を送ることの美的にあらずして、倫常に從ひ、道徳に從て生活することの美的なることを述べたるもの也。文章は達者なれども説は普通の倫理學者などのいふことゝ異れる所を見ず。只曾てバイロズムの鼓吹者たりし人より此説を聞く、多少奇異の感なきを得ず（定價六十錢）

▲立志小說觀音堂（正編一册、續編一册）堀内新泉著　成功雜誌社發行

不遇より身を起して現社會に活動しつゝある事業家の一生を寫せるもの筆も達者にして事柄も趣味なきにあらず、青年者の讀物とするによし（定價各々四十五錢）

▲天地人生之秘義　川田鐵太郎著　富山房發行

宇宙論、本性論、認識論、人生論の四篇に分ち一種の哲學觀を述べたるもの也。

▲石川五右衛門（前編）塚原澁柿著　隆文館發行

後篇、發行の上精評すべし（定價六十五錢）

▲三叉文集　竹越與三郎著　隆文館發行

時文叢書第一編として發行せられたるもの也。竹越三叉氏の文世已に定評あり、殊に此集に收めたるもの丶二三は曾て本誌に掲載せられたるものなれば氏の文についての細評は見合はすべし。時文を研究せんと欲するものには大いに興味あり且つ有益なる書也（定價四十五錢）

▲大英遊記　杉村楚人冠著　有樂社發行

冠人冠杉村廣太郎氏をして一夜にして文名を海内に知らしめたるものは本書也。氏が昨春伏見宮殿下御渡英の時「朝日」の特派員として通信したる記事を集め、附するに美麗なる口繪及び挿畫等を以てし、製本亦頗る美也。輕快にして而かも拔目なく、飄逸にして而かも引締りたる筆致は殆んど氏の獨壇といふべく、歐洲の風俗人情社會等を知るに極めて都合よき書也（定價一圓）

▲基督の靈訓　宮川經輝著　警醒社發行

これ大阪基督教界の名士宮川牧師の説教なり全篇九章に分ち基教信徒のため神、罪惡修養等を説示したるものなり（定價十錢）

▲漫畫天地　小杉未醒畫　左久良書房

例の未醒氏の飄逸な想洒脱な筆、縱横紙面に揮灑して妙趣に言ひ知らぬ妙味がある、天の卷に百二十二葉地の卷に三十七葉、題を見てからが奇拔なものに富んで居る、何の御用とか、明治式色男とか、獅子身中の蟲音とか、それに一々獨歩、嶺雲、烏水、葉舟、孤雁、銀月、瓊音等諸家の、賛とも付かず解說とも付かぬ小品文が添えてある、之にも仲々面白いものがある（定價金九拾錢）

▲明治詩集　吉野臥城著　照文堂發兌

短歌集や俳句集は昔から今迄色んなものが盛に出る樣だが新體詩は新歴史を持つからとはいへ、早や三十年にも近からうといふのに、一家の集は少しづゝ出て居るもの丶未だ諸家のものを網羅して之を一部に大成したものはない、此著は決して網羅ではないが、今時に在つて稍々名ある作家は略ぼ収め盡されて居る上に、詩も著者の採擇ではなく、作家が

各々自選したのであるから之を各家が最も得意の作と見ても差支あるまい、各家といふのは藤村、晩翠、泣菫、有明、碎夢、白星、花外、泡鳴、林外、月郊、敏、孤蝶、薫、露葉、鷗外、及著者の十六家で盡く其小照を寫眞版で添えて居る（定價七十錢）

▲緑髪　小川未明著　隆文館發行

「愁人」以後の作、及び「愁人」に洩れた作、全體で四十四篇を集めたものだ、未明氏は如何したものか此頃は餘り多く作物を出さぬ樣だが然し斯樣な感じも之迄の氏が餘りに多作に過ぎたが爲めであらうか、此著の終に添えてある、諸新聞雑誌に現れた「愁人」の批評を見ると、中々に褒めちぎつて、天才などゝ迄持ち上げたものさへあるが、併し、近來個々の作物として世に出たものの評を見ると、「例によつて例の如し」などゝ棄つ氣なく葬り去つたものが多い樣に思ふ、それは如何いふ譯かは知らぬが、此頃に至つて世人が稍氏に冷淡になりかかつて居るのは事實らしい、之は甚だ謂はれのない事で、氏に取つては又甚だ氣の毒な感じがする、左樣に見るなら折角著者より寄贈を受けた此著に對し一つ忠實の批評をすべきであらうけれど、毎度氏にはお氣の毒の至り、俗務の紛々に堪えぬ身は更に病床苦吟の身を兼れて居るので、又全體の僅か六分の一を讀んだに止め、卷を終ふるには至らなかつた、生中讀んだふりの一攫みの評は、僕には正直過ぎて迚も出來ぬから明らさまに白狀してお詫を申す、て僕は順序を追ふては漂浪兒迄を讀み、餘は早稻田文學に出たもの新小説に出たものだけを拾ひ讀みした、その他は曾て御目に掛つて今猶ほ記憶に新なるものもある、先づ此中でいふなら、最初の「暴風は」僕は惜氣もなく落第させるが、次の「兄弟」それから一つ置いての「霰に霙」の二篇は最も氣に入つた作此種のものが氏の柄に一番嵌つたものと思ふ、「愁人」に於ける坪内博士の序に見ゆる、「作られたるものにあらず、生れたるものなり」といふ評談は的確動らく得ないものであるが、最も此二篇に於て痛切に左樣感ずべきだと思ふ、何時も氏に對して言ふ事だが氏の作は今の潮流に掉すには甚だ損な作である、現時の讀者の要求する處は、これ自然主義ならざればこれ寫文主義である、否、一部分には後者に於けるが如き色彩の絢爛な描寫の緻密なものを喜ぶものもあるけれど、大部分に於ては前者に於けるが如き、極めて日常生活に密邇し、その秘義に接觸したものを要求して居るので、氏の抱いて居る樣な、壯美の底にも悲哀の調を帶びずんば已まぬと言つた樣な趣味、而かもその一本調子でヨイショコラを定めて行くものには同情者が少い、併し眞成に文藝に忠實なものである上には同情者の多少などは顧るべきではなく、又斯樣なことをいふのも眞面目な批評の態度ではあるまい、が今此處て之を云々するのは著者が世の褒貶にビク付かず、自己の特性を愈が上に發展せしめて大成を期せられたいと望む老婆心に過ぎぬ、氏の作は如何に贔屓眼に見ても、その構想の方面からなど云爲すべきものではない、否偶まその方へ注意したと思はれる樣な作は先づ大抵失敗して居て却て氏の價値を落すものが多い、それ故嚴密な意味からいふならば、氏の作の大部分は唯一箇の記行文である、回想錄である、偶感談である、此等を集めた小品文集であると見るが宜いので、小說とまでは名けずともあれと思ふ、それ故氏に最も同情のある見方をするならば、唯その趣味性にあるであらう、生を天上に受けて、純美の感情に育つたものが、過つて人間に墮ちて紫雲渺々の境を戀ふるといつた樣な、花にも月にも、鳥にも、蟲にも、陰にも晴にも乃至、功名にも利達にも、何ものにもあれ凡て寂寥の色を着け、悲愁の涙を忍ばせるといふ一種の詩情である、分り宜くいふならば、彼の「天地の悠々を見て獨り愴然として涕下る」といふ、孟浩然の詩情である。此詩情は恐くは餘り多くの人の持ち得るものではあるまいが、じやといつて既に當然此世に存在し得るからには之に據つて文壇に一旗幟を樹てることも決して惡くはない、唯氏に望むのはそれはそれで宜いとして今少し多角形に外界に觸れ、左樣な主觀から見た活人生を描寫したら宜かろうといふ事である、妄言多罪（定價九十五錢）

（8生）

○壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税八錢）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵税共		

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盗取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割増の事
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年二月廿七日印刷
明治四十一年三月一日發行　（禁轉載）

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野村一

發行所（電話下谷九一九）　反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

天賞堂監製實用懷中時計發賣



本堂は毎に世界時計の製産地に店員を特派し彼國近時の流行と我國の好尚とを參酌し體裁優美なるが上に機關堅牢にして時報精確なるを目的とし專心監製せしめて之を輸入し汎く東洋諸國の需求に應じつゝありしが今回米瑞諸國よりの新着品は頗る時好に適するもの多數なるを以て此際特に大方各位に便利を謀り就中精良の品類數十種を選擇し其種類に從て十ヶ年より三十ヶ年迄の保存請合證を添付し左の非常廉價を爲すべし冀くは愛顧諸君此好機を逸せず現品盡きざるの中速に御需の榮を給はらんことを

●金側時計

十八金側無雙18形（十三サイズ）中蓋付器械ニツケル19石入切天府アンクル龍頭卷（米國製）
乙種．價百九十五圓
甲種．價貳百拾圓

十八金側無雙14形（零サイズ）中蓋付器械ニツケル7石入アンクル龍頭卷（米國製）
乙種．價六十五圓
甲種．價七十圓

十八金側ダイヤモンド六個入月星梨子地無雙14形（零サイズ）器械ニツケル15石入切天府アンクル龍頭卷（米國製）
乙種（貴婦人用）價百五十圓
甲種（貴婦人用）價百七十五圓

十四金側斜子無雙13形器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（貴婦人用）價廿五圓
乙種（貴婦人用）價廿七圓
甲種（貴婦人用）價三十圓

十八金側斜子無雙13形器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（貴婦人用）價卅五圓
乙種（貴婦人用）價四十圓
甲種（貴婦人用）價四十五圓

十八金側斜子無雙13形器械ニツケル石入アンクル龍頭卷（瑞西製）
丙種（貴婦人用）價四十五圓
乙種（貴婦人用）價五十圓
甲種（貴婦人用）價五十五圓
以下略ス

●銀側時計

銀側斜子16 17形片硝子器械流金及ニツケルアンクル龍頭卷（瑞西製）
戊種……價八圓半
丁種……價九圓
丙種……價十圓半
乙種……價十一圓半
甲種……價十二圓半

銀側斜子13形片硝子器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（御婦人用）價六圓
乙種（御婦人用）價七圓
甲種（御婦人用）價七圓半

銀側斜子無雙13形器械ニツケレーシリンドル龍頭卷（瑞西製）
丙種（御婦人用）價七圓
乙種（御婦人用）價八圓
甲種（御婦人用）價八圓半

銀側斜子無雙13形ニツケレーアンクル龍頭卷（瑞西製）
乙種（御婦人用）價十二圓
（甲種御婦人用）價十三圓半

銀側無雙14形（零サイズ）中蓋付器械ニツケル7石入アンクル切天府爪石入龍頭卷（米國製）
梨子地側斜子側共同價
丁種（御婦人用）價十七圓
丙種（御婦人用）價十八圓
乙種（御婦人用）價十九圓
甲種（御婦人用）價二十圓
以下略ス

●鐵及白銅側時計

白銅側16形片硝子器械ニツケルシリンドル龍頭卷（瑞西製）
乙種．價三圓八十錢
甲種．價四圓半

鐵側17形片硝子中蓋付器械ニツケレー本傳ニ枚車シリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲種……價五圓

白銅側16 17形片硝子器械流金アンクル龍頭卷（瑞西製）
丙種……價五圓
乙種……價五圓半
甲種……價七圓

鐵側16形片硝子器械流金二枚車アンクル龍頭卷（瑞西製）
乙種……價五圓廿錢
甲種……價七圓廿錢

鐵側13形片硝子器械ニツケレーシリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲種（御婦人用）價四圓

白銅側無地無雙13形器械ニツケーレシリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲（御婦人用）價四圓八十錢

鐵側無地無雙13形器械ニツケレーシリンドル龍頭卷（瑞西製）
甲種（御婦人用）價五圓
以下略ス

時計及寶玉類内外雜貨貴金屬美術品商

天賞堂本店
東京市京橋區尾張町二丁目
【電話新橋特三三三三 三一五三】

天賞堂神田出張所
神田區表神保町（電話本局二六〇〇）

天賞堂横濱出張所
横濱市尾上町（電話八七六）

天賞堂大阪出張所
大阪心齋橋北詰（電話東七五一）

天賞堂長崎出張所
長崎市鍛冶屋町（電話一二三九）